一言いふて下され。思はぬ難に名と流し。命と果すお前もいとしいはいとしいが。三人の子となした廿年の馴染には。私や代へぬぞとわつとばかり。嘆きくづれ見へければ。權三も無念の男泣。五臓六腑と吐出し黒鉄の熱湯が。喉と通る苦痛より主のある女房と。我が女房といふ苦患。百倍千倍無念乍ら。斯ふ成下つた武運の盡せひがない。權三が女房。お前は夫。こくく忌々しいと縋り合ひ。泣より外のとぞなき。サテ家内の目の覺ぬうち夜も短のし。はや立退んと引立れば。可愛や三人の子供が。母が今此ざまで。住馴た屋敷と退くとがしらず。何ごとの夢に見てすやく寐入る寝顔に。暇乞と泣ければ。ヱ、未練な。市之進に首尾よふ討るゝより。浮世の願ひ何が有ると。引立て門と明んとすれば。門外に提灯人足扉ぐはたく大音あげ。岩木甚平笹野權三に逢に來た。誰も臥つてけつるゝ。明よくと呼はつたり。ヱ、悲しや弟の甚平門からは出られぬ。裏門はなし塀高し。飛づ押つうろつくまに。家内は起る門は叩く。前後に目とつく炎垣。サテ惡人めが扳穴。我が身に神の御利生と。二人手とくひ生死のちまた。命のさゐい四手樽に。六道四生ぎつと詰つて動のれず。跡へも先へも酒樽と。共にさかさまざのぞんぶりころ〳〵比はあの月の。時は夜明の七ッがしら。二ッがしらに足四本。胴は一ッの酒樽に。歩び無明の酒の酔。是ぞ冥途に通ひ樽。契りは偕老同穴と。一つ棺に一つ穴。ぞこぞに埋んでおけの輪と。言はねど物が言はせたる

下の卷　權三おさね道行

鎗の權三は伊達者でござる。油壺のら出すよな男。しんとんとろりと見とれる男。ぞふでも權三はよい男。花の枝のら溢れる男。しんとんとろりと見とれる男。いとしひ男。戀慕はれじつ。二張の弓のもとはづの。放さぬ先に弦きれて。引れぬ方に引れ行き。ひとり留主寝の床の中。心もそみて目も冴て。しんき〳〵の空恪氣。つゐに我身の仇しぐさ。世の譏りぐさ憂ぐさに。淺香の水の漏れそめて。さゝのゝ露とおきまぞひ。寝惑ひ歩み惑ひては。故郷忘れぬ二人が涙。わきて出石の山はれぞ。戀の病は驗なき。但馬のもげた數ふれば。我と和女は五ッと七ッ。十二違ひの月更て。姉ともいはゞ岩枕。かはす枕が思はくも。影耻かしや野邊の草。和女は人のとみなへし。おれが口のら女房とは。身のはぢ槨徒らに。染ぬ浮名の村はぎの。みだれ泣くこそ哀なれ。振上げ見れば源の。鬼神退治の大江山

。峰は青葉につゝまれて。谷も尾上もしん〳〵と。山の振さへ愛想なく。くすみきりたる松の下のげ。藪の木蔭の一在所。あれあれ〳〵。麥つく嗅ら隣りの姉が。三十斗りで鉄醫振袖。夫でも戀の一節や。大工殿より鍛治屋が憎い。聞の鏨鍛治がうつ。なふ鍛治がうつ。聞の鏨鍛治がうつ。なふ鏨の關のとさしの解そめて。迷ひ初しは誰故ぞ。若い殿御と我もへに。くづとれ姿二腰のその一こしは道芝の。露のあたひと消果て。一本芒苅殘す。腰のまはりは秋の暮。淋しや悲しいとゝしと。抱きあひては泣ばかり。國に親と子東都に夫。思ひは千筋百筋の。我は涙のとがせくるまとゝくるとや。世のうはさ手でせきのぬる河水に。洗ふのたびら播磨潟。ろくに寐ぬ夜の目もとぼ〳〵と。埃まふれの髪形。嚊やく浦の蜃にも劣る。山田ばたけの鳥嚇し。さりとは鳥おどし。あはの鶉や澤の田鶴。ひよ〳〵となくはひよどり。小池にすむは鴛鴦。鴛鴦のしのもやもめのつまの留主守。男やもめの憂住居　鳥の上にも歎のれて。いとゞ涙の種ぞのし。跡にもふだつひら〳〵雲に。さつと吹來るの音　野邊の薄のそよぎまで。我と追くる追手のと。露の笹はら〳〵と連だち走る蹈わけ走る。磯の千鳥とぱつのけて。石づきつのんでずんずと。

のばしやる〳〵ぞるいさつさ。ぞいさ〳〵ぞるいさゝばのやりの鎗先に。はづす小鳥も無りしに。今は羽風も恐ろしく船は乘合人めせく。歩路急げどはのもうず。何と知邊に難波津の。名は住吉も住憂しと世の憂節のふしみ山。そめぬ袂も捨る身は。心ばかりと墨染の。里に忍びて送りける。さりともと。昔は末も頼まれき。老は憂身の限りぞと。古歌の詞も思ひしる。岩木忠太兵衛玄關前。淺香市之進方より。小袖箪笥挾箱駕籠長持。其外嫁入道具一式積重ね。不義人の諸道具返納と。呼はり散して歸りけり。母は持病の血の道に。おさゐが事の其日より。癪のつのるに胸痛み。最ど枕も上らぬに。なんじや。道具が戻つた。婿とも孫とも緣きれたの。情なやとよろぼひ出。なふ聞とも見るとも悲いとばつのうりと。駕籠にのつぱと抱き付。絶入ばかりに見へけるが。いのなる天魔の障碍ぞや。此樣なと仕出す。卑しい氣はみぢんもなく。まぢやう者の孝行もの。子もじんじやうに育てゝ。母樣聞て下されて。私しは娘もたんと持。嫁入の時の諸道具と。一種も散さず子供躾ける便りに。小身の我夫に餘り苦に掛とともないと。いふ詞が違ふにこそ。廿年に成る道具。古びもせず持なと此心で。そもや惡事となんのせふ。物の見いれの報ひうと。又口說たて泣さけ

るが。市之進の身に成ては口惜い筈なれども。余りにこれは情ない。子供に讓ってくれもせず。見苦しい門に積せて。我子の耻は思はずの。ヤイ中間ども下女どもよ。あまり人の見ぬ中。早々内へ運んでくれと。嘆き急れば忠太兵衛。これ〳〵おばゞ。聞てゐればども〳〵と。何をごくにも立ぬと。市之進には過りない男。一所に討て捨る女の諸道具。市之進が留て何にせよ。人間はづれの女。穢れし道具武士の家が穢るゝ。中間ども片端に叩きわり。火どつけで燒でしまへ。畏まつたと棒木槌。鋤鍬鉞ひつさげ〳〵立のゝる。母は堪へかね手を廣げ待てくれ〳〵。なふ祖父様。道具悔うは無れども。今生でも來世でもおさゐが顔はもふ見られぬ。手にふれた道具。切て一種は老の形見に殘したし。屋敷と欠落する時も。唐土高麗にゐるとてもさぞ忘れぬは子供がと。常々遣たい〳〵と。思ひし念も不便な、り。一色づゝも殘して。子供にとらせて下されと。葛籠引よせ箪笥に縋り。悶え悲しみ泣きければ。是ふばゞ今是が悲しいとは。お身も我も最一度は。大きな悲しみ聞のねばならぬ。其時二人は何とせふ。年寄ては憂とと聞が役と覺悟して。じつと涙と勘忍めさ。身も勘忍〳〵と。一途に堅き國武士の。喉に涙ぞ詰りける。何と思案して見ても。此道具受取

そは。朋輩中の思はく他國の聞へ。若黨中間ども。煙り高いは憚うり。一色づゝ取わけ。燒て捨いと言付られ。迷惑ながら主命。葛籠箪笥挾箱。引散し打碎き。あまの焚火と燃上り。煙りに見へぬ面影に。母はなとも身ともだへ。可愛やおさゐが嫁入の時。まゐ髮で門火とたき。千秋萬歲と祝ひし其道具。門火の跡で灰となす。母が身体諸共に薪木となして呉ぬかと。嘆きと見ては下女はした。若黨小者に至る迄。みな〳〵袖とぞ絞りける。殘つたは長持一ッ。取わけて燃せと。開くふたりの孫娘。兄弟抱合ひ泣きゐたり。祖父も祖母も夢心地。やれ〳〵危なや命冥加な孫どもや。もし火と付たらよい物の。堅い父御の言付の。なせに聲と立なんだ。器用に生れついたよな。花紅葉の樣な子共と。母めはよふも見捨たと。髮搔撫て泣きければ。お捨は何の頑是なく。母樣に逢ひたい。母樣呼でと泣くばり。姉のお菊は優しく。父樣は母樣と切に行くとおつしやる。祖父樣祖母樣頼ます。代りに私と殺して母樣助けて下されと。父樣に詫言とと。膝に凭れ伏しければ。ヤ、よふいふた。母は左程に思ふまい。虎二郎はなせこされぬ。娘と母につけるは離別の作法。こちに隔その心はない。孫三人と朝夕に。見たらば憂さも紛れふもの。此子は父御の四十二の二ッ

子にて。母がお捨と付たが。今は父母兄弟が。世の捨物になりしのと。くどき繰り言身もしほれ。枯木の樣なる祖父の顏。涙に別ちなのりけり。泣な〳〵大事ない。なんぼ母めが捨ても。祖父や祖母が可愛がる。甚平といふ叔父がある。サアこい〳〵と手と引て。泣〳〵奥にぞ入にける。茶筌髪。言甲斐もなき身なれども武道と磨くあられ釜。たぎる心は逕次第。淺香市之進歸國と直に門出と。三人の子と片付て。氣は廣けれど先暫し。お國の内は憚りの。笠ふう〳〵と鼻の門。今迄とは事替り。案内なしも無禮なり。物もうも角だつ。暇乞一禮のつてもがなと。玄關見いれ立たる所に。鼻忠太兵衛痩骨高く引括げ。鍋のつる程反に反たる朱鞘ぼつてみ。一文字に駈出る。ヤし〳〵と。袖引とめ笠取て捨ければ。サア市之進今朝は畜生めが諸道具。孫娘二人受取申た。旅出立は暇乞と見へた。おいで過分。追つけ吉左右待ち申と。云捨て駈出る。いや申し御顏色も常ならず。氣遣ひ千萬。巨細聚はり屈くる迄は。盛外ながら離しませぬ。なふ市之進。御自分江戸より下着の節娘さゐめが提首と。お目にのけいで口惜い。悴甚平はその日より尋ねに出る。年よつても忠太兵衛。腰膝立ぬ身ではなし。刀の刃に血も付す。高枕でも暮されず獨り物にも狂れず。相手がなと存ずるに。最初不義の證據と取て。我らにも知せ。國中に沙汰とした事觸は川側伴之丞。彼奴と切て老後の思ひ出。お放しやれと駈出る。ヤ、是々御心外尤ながら御老人の腕先。万一伴之丞に討れさつしやれば。此市之進まづ妻敵とさし置。鼻の敵と討ねば叶はず。取まぜ迷惑は拙者一人。平に〳〵御了簡。御厚恩に受まとると差うつふけば。なふ是市之進。斯程根性の腐つた女房の親でも。忠太兵衛が討るれば鼻の仇と討氣よな。是は曲もないお尋ね。たとへ女は畜類に成たりとも。鼻は鼻に極つた忠太兵衛殿。敵があらば討いでは。そりやお尋ねに及ぬと。市之進ア、御心底身に余り忝いと。大地にぞふぜ老体の踞いたる感涙に。市之進も是はと手とつかね。泪にくれし婿鼻。武家の道こそ正しけれ。ヤく婆にも逢て暇乞の盃。兄弟の娘最一度顏も見たのうふ。草鞋がけの体わざと奥へとは申さぬ。やい〳〵市之進のお出。皆來いやいと呼はれば。ヤ申ちいさい奴らによく申付たるが。何とはるは致さぬかな。イヤく器用者共そこは氣遣ひめさるなと。玄關に坐しければ。母は二人の孫娘。左右に具して立出る。中に盃酒肴盆正月のせち振廻。三人の子の誕生日。一家寄あふ祝日の。坐敷は座敷にのはらねぞ。揃はぬ者は人の數。五人顏と見合せて。物

とば言はぬ目禮に涙たしなむ顏つきは。泣叫ぶより哀れにて。酌とる下女が袂迄。溢さぬ酒に絞りけり。母は涙の耐へせい。盡果てわつと泣き。可愛や此子供が父御の言付覺へて。目に涙は持ながら。優しいと見るにつけあの業人の畜生の。人でなしの腹から此樣な器用な子と。何として產出した。人並の根性さげてくれたらば。母も子も揃ふたり忠太兵衞夫婦は。子も孫も產揃へた。手拆者といはせぬう。娘の子は母方付と。二人ばうり送つて。虎と殘して下さるは。岩木の苗字とうとみ。此方とは緣ときる心う。曲もない市之進。恨にござると聲とあげ。積る涙と一とに。泣盡すこそ道理なれ。イヤく御恨みは相違。隔つる心聊かなし。此度我らお暇下され。世のさんじんと成たれ共。親より傳へ今日迄。樂みと致せし茶の道は忘れがたく。虎二郎めと千野休齋弟子分に預け申たり。お恨晴れられ門出のお盃とと。言ければ尤さこそと打解て。隔てず交せと盃に。云ととては首尾よく追付げ本望〳〵。其本望とは子共の母。我妻と切るとと身の悅びになすとは。如何なる運如何なる時。如何なる惡せの契りぞと。思へばはつたと胸ふさがり。鐵石の如くなる市之進が心。搔くれて憂へず涙に咽びけり。女房ぶさゐが弟岩木甚平。宿なし旅の形もやつれ。一僕具して立歸る。忠太兵衞伸上り。ヤイく甚平戻つたう。首尾はどふじや。市之進も只今門出。なんと〳〵とそく〳〵立。ヤア市之進。留主の中不盡のと出來。お歸りない先不義者どもが提首。こなたへ見せ申せと。親共の心せき。我らは元より彼奴らが欠落の曉より。直にぶつ立喰物と腰に引付。海道筋の旅籠や。馬つぎ船場と詮索し。山蔭在々迄も近鄕殘らず尋しがいや〳〵足弱とつれ。氣の怯れたる迷ひ者。深く隱るゝ心も付まいと存じ。伯耆路へ掛つて詮儀致せども出合ず。つく〴〵存ずれば相番と賴みし迄にて。番頭へも斷はらず。日數とふるは不調法と存じ引返し。只今歸りがけ直に斷相濟み。一寸立ながら兩親に逢んため此仕合。御自分も我等も互に遲いの早いので。お目に悲ちずば殘念たるべし。幸の折に參りあふ。本望達せん吉左右。いざ御同道仕らんとて勇みける。市之進手と打ち扱々御苦勞お骨折。御親子の御懇意。心肝に徹し忝けなし。最早是より御同道には及ばず。我ら一人參るこのらは他と賴むともなし。甚平殿は御休息賴み入と言ければ。いやさ。云れぬ遠慮心は矢竹に存じても。人數なければ手の廻らぬこともある。扨こそ留守の內よもや何ともあまじと。落付ても斯樣のとの出來。權三も他國に親類知音も有るべし。何と隱匿へ

置も知らず。三日路四日路とも蹈出し。時の變にて介太刀欲いとも有べし。是非共に御同道。イヤこれ御心底頼もしけれど。女房の弟に介太刀させ妻仇討ては本望でも有まいか。いやさ介太刀と極めず共。只力に成迄の事と聲高に成ければ。市之進色と損じ扨は茶入釜の蓋取よりはの。人の首のとり様知まいと思召すな。弓矢八幡身こそ小身なれ。見ごとちぎれ其足の一領も用意して。そはといはゞ刄金とならす。お歴〳〵にも負るとはおりないさ。甚平から〳〵と笑ひ、腹筋な。然らば足本の女敵なせ討ぬ。ムヽヵ足元の妻敵とは、ムヽヵ川側伴之丞がとな。それ程憎へのある妻敵なせ討ぬ。市之進はつと驚ろき尤彼が不義の狀數通。女が手箱にて見付。彼奴も一刀と念へども。一時には手に及ず。先是は後日の沙汰と。いはせもあへず。それ〳〵〳〵鼻の先に置ながら。二人の敵は手がとゞのず。初日の敵後日の敵と言別ちはしらず。介太刀頼まぬといふ市之進の女敵。一人は岩木甚平が介太刀一討た。お見やれと。腰兵糧の器物引ちぎり。押開けば伴之丞が首。洗ひ立てゞ持たりける。市之進是はと手どうてば。勇夫婦大きに悦び。金輪際の敵。憎しといふは彼奴がと。但御扶持人。上べは何と訴へに及ばず。彼めも身の耻除ひかね。お暇申しすて

て。欠落致す所と因州境にて。思ひの儘に討取ました。手拭〳〵なふ市之進。敵討の門出に。是程の吉左右有べきぞ。忠太兵衛が指圖。甚平と連られい尤いふに及ぬと。介太刀一て本討手の名に疵付けな。畏つたお暇と立出んとせし所に。十ヵ斗りなる旅人の門柱に影隠れ。奥と覗いてちらめくと。市之進きつと見やら心へずと走り出れば。なう息子の虎二郎。凛々しげなる旅装束。おのれ此体は何所へ行く心いれ。小癪者めと小腕取て引出も。イヤ父様の供してもく。姉様お捨は女子なり私は男。敵うつ親と一人やるは武士でないと。先に立て走り出ると引留め。扨は汝と産だ母と切る心ぞ。母様なんの切る物ぞ。母様と連ていた權三めと切てくれる。ぞふでも往くと意地張たり。やい悪い合點。叔父様も父も出てもけば。祖父様祖母様お年より。姉や捨はめらうの子。そちと跡に殘すは。もし權三めが來た時。切せふと思ふ用心。隨分休齋に茶の湯と習ひ。時々是へお見廻ア。お二人へ孝行兄弟ぢもに氣と付。權三めが來たらば切て捨い。但一人殘るが恐くば。連て行んと宥め賺せば。いのにも一人殘りましよ。跡のと氣遣せず。必手拭遊ばせと。聞分のよき利發者。勇夫婦は目もくれて。女子男打捨ひ。すぐつた樣な子共の成人。見たい心もなき母めは。

いかなる畜生ぞや不便とも思はぬ。切なりとも突なりとも頓て本望〳〵と。涙ながらの暇乞。兄弟三人聲々に。權三めは切殺し。母様は息災で連て戻つて下され。さらば〳〵父様と。いへ共父はさらば共。いはんとすれば目もくれて。胸に八色の雲とづる。故郷離れて別れ行く。月にたれ。寢て見よとてや伏見とは。船によせたる里の名の。橋の夕暮きて見れば。涼しくの文字のたゞりて。京と持たる京橋に。ひとつ流れのみそぎ川。末吹風も袂涼しき。權三ふさゐは。三日とも同じ所に足留て。ゐるにゐられぬ梓弓。伏見に暫しすみ染の。秋の櫻の入相も。明日とばしらず一日の。命々と聞捨て。難波の方に思ひたち。人目と忍ぶ乘合に。空坐睡りの船漕げば。傍に茶船と漕つれて。温飽蕎麥切。きり〳〵と押廻し。豆腐なら茶と茶と賣るも。宇治の川水落そひて。昔と胸に涙ぐむ。女心ぞ哀れなる。市之進は御幸のみや。甚平は三栖の里。毎日そんじやうそこ〳〵と。合圖としめて甚平一人。京橋の夕日影船ぞもと見まはし。ずんぞ早ふ出る船があらば乘たいと。乘手に目とつけ見廻せば。早ひが好なら此船。初夜が鳴ると出します。おふいのふ狹そふな。狹いとはこざらぬ。若い旦那殿とおの様と。苦の影に屈んでじや。あの傍が廣ひあそこに盡きませふ。イヤ居所はどうなりとして居ようが。初夜といふてはもふ遲い。明日の晝船に致そふそんなら勝手。船は此方の。乘る身は其方の。しゐはせぬと云ふ中に。船中とつくと見廻し。顏は見へねど十ヲが十ヲ是に極つたと。嬉しさ足も飛上れど。苦の影より見つくるゐのと。わざとゆる〳〵橋の上。涼む顏して二三べん。心祝ひの神の閻。市之進が旅宿へと足と飛せで走りける。苦押のけて。ヘヲテ大事の物忘れた。コレ船頭殿。こち二人は揚てもらと。人に頼まれ大事の買物。銀までうけ取。乘急ぎするとて頓と忘れた。揚てたもれ。して夫は何所迄買に往しやる。ヲ、あれは何とやらいふ町じや。ヲ、それ〳〵擂木町の彼方。藤の森の先じや。ヘテ御身も余程のと云ふたがよい。爰のらなんぼ有ると思はしやる。一里半ござる。其中に船は出てしまふ。揚るとは成ませぬと。情もなげにとり合ず。イヤ運くば搏はずとも出してたもれ。二人分の運賃は拂ふて揚る。平に頼むと北南の見世ざさ。橋の上に目とばなさず。爰な旦那殿はうろ〳〵とつまらぬといふ人じや。乘せもせぬ運賃取ては一分たゝぬ。矢張乘つてござれ。それはむごい船頭ぞの。今の様に跡のら乘手もあれば狹ふなる。平に揚て下され頼みかそると詫ければ。狹い事氣遣して下されな。明日の朝大坂まで

滿足に屆けりや能ひ。今夜一夜はおの樣も胴切にして。旦那殿もこま〳〵に刻んで片づけて兩せまする。そこらは摶はずふんぞつて。のたれてゞされといふとも。心にかゝる一つなり。おさゐ万づ氣にかゝり。ナ船頭殿、物には情といふとあり。人と乘せずに運賃と、ば。船頭の一分立ぬとや。我々とても人に銀分立がたい。これ手と合する。是非とも揚て下されと。詞とつくせば聞わけて。そんなら早ふ揚つた。ヤ、過分〳〵と。二人手とひき氣もせく足元。御身衆は怪我しうふな。がんぎにけつまづき。おの樣の大疵に又疵のつゝぬ樣に用心〳〵と。つれ船頭のざれとも。今日こそ胸にこたへけれ。とこのゝげに身をひそめ。甚平が爰にあるゝらは。市之進も此邊にゐらるゝは必定。ナヤ〳〵二人の望み叶ふた。覺悟あれと言ひければ。ア、夫は覺悟のまへ。國と出る其夜より。夫に進せた命。惜いとは思はね共。もし弟の甚平が手にゝちばゝ口惜い犬死。甚平と見るならば隨分と通るゝが。市之進殿への奉公。私やこなたが心ざし。斯してもゐられまひ。今夜はどこに泊らふぞ。チみすがはなの油のけの。そろ〳〵京へなりとも登らふと。夕べの空もはや暮て。軒端〳〵に町々火は。切子燈籠いろ〳〵の花の壽盡判じ物。見世に涼みの芝居咄しや踊子の。十二三のら八ッ九ッの。娘やさしや。黑いはとりの腰卷に野郎ぼうしの濃紫。揃ふ拍子や形振もよく。それ〳〵それ〳〵やつとせ〳〵エイ〳〵難波江の。蘆の假寐の一夜さへ。永き契りと結びはすれど。許さぬ戀の關のとや。いつそやまべと思へども。一期さる丸との誓詞のあれば。天智天皇罰恐しく。親のかんけもそこはのとなく。よその人丸願まれずして。直に大江の千里と越て。凄さふのやぶ中押わけて。たんだふれ〳〵な爰でされさ。踊る姿の懷しや。ナあの踊子と見るにつけ。國の子供もあの年ばひ。生たの死んだの煩らふの。可愛や今年は踊るまひ。離れ〳〵に成果て。どこで死んでも淺ましい。子供の水も受まい。潟灌葬禮誰がせうぞ。迚もなら今死で。この燈籠と六道の。宙宇のあゝりに迷ひと晴れ。切て未來が助かりたいと。歩き〳〵の口說と。男も心據ぐもり。空は今年の日照にも。袖には誰が雨乞の。身と志る雨ぞ果てしなき。市之進が嘯ひ備前國光。運こそ來れ我妻に。此世の緣は薄柳の帷子高く捻このらげ。甚平とは跡先に引別れたる夕べの雲。時はめいどの酉の下刻。運こそ北の橋詰にて行あふたり。笹の權三浸香市之進が妻敵。覺へたのと言より早く討のくる。チ、待受たりと差上る。弓手の小脇水

もたはらず切落せば飛退つて。武士の役作法ヨりと。一尺八寸振合せて刃向ふたり。ヱヽあ
ぶれ者切たは〳〵。喧嘩よ棒よ。踊り子供に怪我さすな。お吉樣ア。おせん樣ア。半兵衛ア。ど
ぶ介ア。人と呼やら逃るやら隣丁八丁九丁町。十番切の皐月闇夜討の入たる如くなり。女は
甚平とちらかと見て。望みは夫の切先弟に討れ大死と。暫し身とひく橋の影。權三が蹈込
み打つ切先欄干に切こんで。くはへとめたる刃と捨〳〵、竹がな一本。一手遣ふて鎗の權三
と名と取る庭。諸人の形見に殘さんもの。足取なりとも見物せよと。刃とくゞる無刀の働
き。流石成ける手負ぶか。一生一世と念力に。切込だる右の肩先。胸板と筋違にはらりす
ぱと切れても。猶身と引ぬ最後の身ぶり。橋は宛ら紅葉の。まれにあふせの敵と敵。ふん
ごみ〳〵五刀。切られてのつけにのへせ共。武士の死骸の見ごとさや。逃疵更に無がけり
市之進なと見失なひ。南無三寶と北へ走り南へ戻り。どこへうせたと小隅〳〵とうら猫の
風と搜す眼の光り。橋には死骸のたとうつ。折しも七月中旬血は流れてとう〳〵と。月こ
そうかべ伏見川。龍田の川とぞ紛ふたる。甚平姉と引つ立來れば。ヱヽ介太刀の其方に討る
ゝは口惜い。夫の手にうけくれまいの。市之進はどの仁。誰が介太刀と打物ぞと。橋の中
へ突出せば。なふ懷しやとよる所と片手なぐりに腰のつがひ。くはらりすんと切下られ。
あつと手に伏したりける。帶引掴んで頬引あげ。見れば子供の不便さと憎くし〳〵の恨み
の涙。胸に浮ぶと打はらひ。ずんど切さげ取て引伏せ。肝先蹈へぐつと刺たる我が切先。一
右の跟と蹈のけ。ずつはと切れ共蹈へばこそ。直に男が胸板ふまへ。とゞめは何れも一刀
鎗の權三が古身の鎗。疵も古疵咄しも古し。歌も昔の古歌なれど。谷の鉦原一夜さ咄し。
其鎗の柄もながき世の。御評判とぞ成にける。

鎗の權三重帷子　終

山崎與次兵衛壽の門松

近松門左衛門作

上の卷

筑波根の峯より落る瀧の白玉。ひいふうみいよいつむなゝや。九軒の町に羽子かはも。比翼の羽子板むくろじもみがき入ては色になる。戀の二葉のうぶろ松。枝と枝とやり羽子も。みいよういつも末ながき。返事になるゝ門の松。こゝへの松あり客も待。先新町の初子の日。松澤山にふうみゝり。千代も根引はたへずまじ。コレ〳〵新助。嫌と云ふもの無理に突やつてそれ見やの。羽子と松へ突留やつた。元の樣にして返しやと。袖に取付禿共ナフ取付きやんな男に突すりやとまるとは。あたまのら知れたこと。珍しそうにと振はなし。手と拍いてはつはらはこちや知らぬ。あべのこの新助と走て內へ駈込ば。ろりや〳〵逃をな捕へよと。羽子のら起るいさのひは。飛が如くに追ふて行く。情口舌のもろ出る。雪間に素足伽羅のはる。霞の袂虹の帶雲の上着とやりのけて。新艘突出し出立ばへ。紺に鬱金に薄染淺黃織物縮物染物づくし。小紋三重染二重染淺黃鹿子にひは鹿子。紫鹿子にふ

る年の。憂さとも芥子の紅鹿子。極彩色の越後町。三筋に三ッの春たてば。松若みどり梅時節。やりが前垂あのねさす。天も醉ふたり人も醉ふ。初盃の内祝ひ過て諸祝のよね搗へ雪駄の音のしやら〳〵と。春めく中に紫は色のつゐさや藤屋が内。吾妻と云へる名木の。松にはつゞく花もなき。戀と利發と目のはりに情こぼるゝ道中は行來の人も立留り。花と見捨る雁金も。歸り廓のはれ所。身にも年にも耻もせず。七十ヲの古婆の古綿ぼうし頬冠り。春知り顔に七ッ屋の。藏の戸出るうぐひす茶の。布子の袖とすれ紐れ附纏ひ行く足元遣手のゐやが聲高に。是爰な婆樣此廣ひ道となんぞいの。高砂の尉と姥が離別した樣な形せ。太夫さんにすれもつれ。ヱイ嫌らしいことたゝるい。あの跡のちおんなと樣に付て來る君い男は。盃夫の風とも見へぬこなたの連の。とつとゝ退て貰はふと押やれ共腹立ず。ヲ、お道理樣や御免なりませ。音に聞へた吾妻樣。お慮外ながらしみ〳〵と。お咄し申したい事御座りまして。廓とぶら〳〵致します。ぞふぞお聞入なされてお情にあづかれば。老婆が後生も助かりまと大事の〳〵太夫樣に。鹽のこのらい梅干ばゝがそいこな奴と思召そ。お耻のしやと云ひければ。ヲ、いや口合とやらるゝ。是女郎さん達の全盛と見のけて。爽の祖母のといふのたり事は古ひ〳〵。其爲の遣手是目が黑ひ見ておきやっ。怖い事云ふて下されな。のたり事云ふ樣に見へますの。ヲ、貧乏はせまいもの。連合はせん搗で隱れもなん。千貫目の廻しも仕た難波屋の與左衛門。爲換の銀が滯り大坂と仕舞ふて。八幡へ引込み果られた。其難波屋の祖母でござる。あの頬冠りは獨息子。千貫目の大釜の湯氣で育つた奴なれぜ。今では錢一貫の廻しもならず。難與平〳〵と其日過の日用取。咬者と見もるもお道理と。老の繰言目に涙。問はず語りに故へと思ひ出したる風情なり。引舟禿遠慮なく。ふ、踊り哥にうたふは祖母の事の。ゑい〳〵山崎〳〵。八幡山崎なん與平のお祖母。ヤア此誠に銀と出せさ。盈にでざれと笑ひける。吾妻は始終貰ひ泣皆の衆は何笑ふぞ。戀で有ちふが有るまいが勤する身の慣ひ。落めと聞けば見捨られぬ。吾妻と見込で頼むとは愛らしい祖母さん。傾城冥加聞く氣でごんす。爰は人立繁山。ちよつと横町の小店とこりの揚屋町。爰へ〳〵と手と取れば涙と流し。否なやゝ〳〵。お咄し申事とても此祖母が此年で。何の願ひでざりましよ。月共星共思ふはあの與平め。いつぞや人に雇はれ此新町へ文の使の次手に。吾妻樣と見そめてゞ〳〵。親の口のらつ、おはもヒ。戀病みに頬ひます。家主隣の聞へも

有る五器さげる瑞相のと。叱つて〳〵追出しても退ふと存じたれ共。ア、昔の身ならば若い者の。手のけ目のけのと云ふ最中。申し悪いが太夫様達一年二年買つめても。どこの痛みにも成らぬ身代其氣で育た奴の事。ア、可愛やどうぞしてやりたいと。母がやせがも子の望みも金銀と云ふつはものには。又してもへし付られ。見殺しにする子の命。氣遣するな情と商買になさるゝ吾妻様。歎き申してお盃いたゞのしよ。夫で思ひ切おれと。あいつと連れ附まとゝも子の可愛さ。母が命が一夜さの傾城代にも成るならば。今でも死んで見せませう。押付がましい事なれど。一寸斗のお盃。是であがつて下されと。袖のら曲そ小牢入の徳利に余る親心。のけ盃の蒔繪の猩々笑ひこうじて涙の種。泣こと知らぬ遣手さへ。あちら向くこそ哀なれ。聞程吾妻おしうつむき。粋な祖母さん私が云はふ詞がない。與平様はどこにぞ顔が見たいでざりやせと。呼れて祖母も一時に千年とのぶる門松の。影に隠るゝ難與平。指とくはへて這出る。袖口取て引寄せほれた〳〵と人ごとに。誠もない口癖さへ勤する身は先馨。公平の様な男と煩はしたは此吾妻。嬉しうございす悪い。命にも替身にも替逢通したいものなれど。戀と云ふてはちよつとの詞も交されぬ深い男が有るはいな。

山崎の與次兵衛さんと申て新綴の初床より。面白いと悲しいと譯の有たけ仕盡して。勤めは名斗夫婦と云ふて。今一人と外にはもらす水もなし。と云ふて母御様の御信實。せついお前のお心入立ながらの盃に。汲ながさんも本意でなし。是重山預た物それ爰へ。あいと答て引舟が袂の内の服紗物。色こそ云はね山吹の十兩斗一包。是も可愛ひ山様故わけの有る銀なれど。母御様へ進せまと。與平様の身の廻り立派な大盡に仕立て下さんせ。渡り並の客に身と賣るは傾城の習ひ。枕とこそかはさず共年月の物思ひ。酒でながしてくだんせと渡す小判と難與平。吾妻が膝へどうと投付。胴欲にござる曲がないおりや銀にや惚ぬ。貧な者と侮つて金で口とふさぐのか。我等が宿は庭のけて七疊半。貧乏神の御旅所と云ひそうな住居。師走正月もおんなじ布子一枚なれど。傾城に金貸ふて揚屋へいたと云はれては。此難與平人中へ顔が出されうの。戀にのこて付物取とは目利が違ふた吾妻様。七十に余る母迄各に顔まぶらせ。無念に御坐る免して下され母者人と。聲と忍びて泣きけるが。こよふ思へば恨しは不闘法。追付與次兵衛殿に請出され。奥様にそなはるお身。我等は日陰取内方へ雇はれて。沙汰でもそればお身の爲に悪いと。後と大事に成さるるは尤々。氣遣

なされなふつゝりと思ひ切ました。鼻の先斗りで戀せぬ証據は是なりと。腰の裁刀ひん扱て既に小指に押あつれば。吾妻取付待て下され誤つたと漸に押留め。金進せたは誤りなれど。身の治りと思ふなゞゝ。ろうした身しい吾妻じやない。與次兵衛樣には幼馴染の本妻有り。父御樣は隱れもないしんぢよなり。私のら起るお宿のもや〳〵。悋氣やら御意見やら。跡の極月の廿日前ちよつと逢ふて夫のらは。不首尾〳〵の文斗り駕夫揚屋の付屆け。初紋日の買論も私が獨の胸算用。年の有る上年切ぢし男の耻と包む程。身ぬけのならぬ此苦患。廓で老婆に成る吾妻。可愛と思ふて下されと。耻も哀も打あけて。つがなくこぼす正月の。涙も顏ににくのらず。綾る袂の上二重打掛ぬいで帶ほどく。逢ふ夜の床の暖まり又逢ふまでは冷さとと。深い中着はうば玉の黑羽二重の蛇の目の紋。與次兵衛樣のお小袖暫時も身は放ねど。是が私が心一杯是と着て。表向の客に成て下んせと。小袖渡せば難與平是が誠のお情。私戀はのなふたと押戴いて泣く斗。母は始終つゝくりと。なふお傾城のつゆひらさは。むつのしそうな事やとて。耳とすまずど殊勝なる。與平涙押のごいお前に逢ふて眞實の。涙と云ふ物憂へました。金の草鞋で尋ても。二人とない女郎に思はるゝ與次兵衛殿はあやこのり者。若物も戻しませう。替りには以前の小判貰ひましたと。取る手と母がはつたと打。ヤイ卑怯者今の詞がはや違ふ。難波屋の家に疵付るの。げびた奴めと叱られて頭ふり。いや〳〵身の慾に致すにこそ。吾妻樣と與次兵衛殿是程の深い中。閑捨ては男が立ぬ。此金と此儘おけば揚屋の庭錢。埃になつて癈ります。小判と見れば小判吾妻樣の身の油。金と巳が預つて此方も身のら油商ひ。大儲けそれば大損する。つゐと江戸へ下つて。十兩と百兩百兩のら貳百兩。貳百兩のら五百兩。段々儲けの商ひ拍子。千兩にするは三羽の征矢。關東廻しの商賣の筋道は我等が家。吾妻樣根引にし與次兵衛殿とお兩人悅喜の顏と見て。今日の情の御厚恩とおくらねば。此難與平たゝぬ〳〵。常々金がな〳〵是と買て斯賣てと心當の事ども有り。江戸の道中二歩では高砂のゝみや。母者人は横掘の妹婿に預けりや緩り。其内金も登しましよ難與平が立身。吾妻樣の御出世與次兵衛殿の本望。千里一飛一拍子一器量ある男なり。聞ば聞く程頼もしい御心底。此吾妻に戀ある身で與次兵衛樣に末永ふ添せうとて。俄に江戸の思ひ立。兩人が中の結ぶの神さん。門出の盃じみ〳〵お禮申したし。井筒屋へ伴ひましよ。母御樣はどふじやへ。イヤ與平が望叶へば此

世からの生佛。太夫樣おさらば。彌頼上まさるとと興平が背中しとゝ打。こりやわやのり者嬉しいの〳〵と。與ともたせて和ぐる。母は太皷子は大壺。はつと打たる鼓よりも。太夫が惜いたゞいて歸るさ急ぐ。長持急ぐいそ〳〵賑々く揚屋町。やり引舟がアレ〳〵太夫さん。阿波座からうるさい和郎が見へるぞへ。ほんに〳〵贅こきの彦さん。然もづぶ〳〵醉ふた足元。見咎められては猶悪口と。たぐり寄遊の井筒がもと。内證花車あ吹込ば。こんだと寻り與次兵衛が。小袖とこうりの難與平。見馴ぬ揚屋の大騒ぎ戀ぶるひして見をばらし。足はどれても目角は強き袴肩衣横筋違。町一はいとひよろ〳〵と。直にぐれ込井筒が座敷。吾妻は煙管の吸口とぢ。物も言はずに彼方向く。與平は人に見られじと。火燵の内へ顔差入れ。被く蒲團の純子より。無量の事ぞ思はるゝ。彦介花車と引捉へ。コヤ花車樣め聞き給へ正月は新春の御慶目出度申納候。此〳〵此はなは新酒の醉紛れ積る恨と申姑候。ナなんと嫌か面白いそこな遣手め能聞け。いうな吾妻殿でも太夫樣でも。畢竟直段の高い惣嫁じやないう。なんと嫌の嫌とは申されまい。それに山崎與次兵衛には賣て。此葉屋の彦介にはなせ賣らぬ。一文一錢ねぎらぬ拙者と。いうなる者とこの思ふちん。忝くもくはんむ天皇無体の後胤攝州津の國服部の住人葉屋の彦介。大坂に五間口の店も所持仕る。貸藏も持參つこのまへさ大金持と知らぬかな。ヤ〻慮外乍ら否とは言れまい。都島原上林の高橋に金遣ふて髪切らせた。伏見擂木町升屋の高雄に。又したゝこの遣ふて。心中に生爪とはなしてくれた。まだ鼻も殺でくれた。耳と殺でくれた。大々盡の彦介。山崎の與次兵衛に仕負て藤屋の吾妻に。三度四度ふられては此彦介一分立ぬ。半分も立ぬ今日のら三日ひこづる擂んだ。相場の高い抱嫁の買初仕り。金銀米錢ぐはらり〳〵と撒散したら。吾妻がくるり〳〵と廻らさのけしや。ヤア〻〻買たとしなだれ寄れば。吾妻ひつと頬がまちひつしやりとみしらせ。ヤあた贅ばつた聞ともない。其高橋とやら高雄とやらは。其方の樣なうつそりでも。金さへ遣へば髪も切る爪もはなそ。京や伏見は知らぬが。此新町の傾城は魂が違ふた。恐らく此吾妻はいうな〳〵。一生身上仕暮しても。其方の樣な意地くさりに。小判の手水でも勵く女郎じやないぞや。がや〳〵口聞く男の意地ならば。手拐に吾妻と廻して見やとずんぜ立。ムゝはりの強いに猶惚た。此彦介は吾妻と廻して見しよ。まはるは〳〵。遣手めが頬がぐる〳〵廻るは。爰の家も廻るぞよ。廻るは〳〵山姥が。山又山に山廻り。ゝゝ面白い。何でも

斯でも吾妻殿と奥へ連てと引立る。どれに下地の無息力是はどうぞと引退る。引舟に向ふ風花車は彼方へ押込で。遣手も取てやり梅の落花狼藉。むのし堪へぬ難與平。歯切として也勘忍ならず。彦介が足首と火燵の中よりしつかと取り。うんと絞れば。あ痛たた。やし足首が切るゝはと眼はしのひれを口減ず。此火燵には狼が有るそふなと。けもじるを引倒し滞團押のけつゝと出。熟柿臭い彦介が鼻の先に。澁柿の澁い顔して立はだかり。こいつ何じや。何者とは眼とあけ人じや男じや。男と云ふもの見ておけ。うぬは何者。葉屋の彦介と云ふ男見ておけ。なま臭い男よばり。おけ〳〵おいてくれ。額に毛扱もあてる者が。いとしほげに女郎衆いちつてなんの男。ヤア男が定なら己とせい。ヤアせぬのい。いやせぬのい。男どしの喧嘩といふもの敘へてやろとつゝと入り。小腕捻あげ引擂いてさるとんぶりぎやつと言はせ。づでんどう腹這にはつたとのめらせ。腰骨と七ッ八ッうんといふ程踏つけて。鼻歌に懐手吾妻つさ〳〵可笑さ堪へ。笑ひところす笑止顔彦介漸〳〵起上り。聞へた〳〵。與次兵衛が廻者彦介と踏だぞよ。山崎與次兵衛覺へておれ。したが踏れても此方に七歩の勝。正月早々已が身だい。踏ひろげてくれたな。殊に今年は戌の年。戌は土に寝るもの年八卦に叶ふた。コリヤ人の巳午が惠方ぞと臂を張て立歸れば。踏れてさへあのおとがひ人と蹈だらどふあろと。跡は笑ひの賑ひや。正月買の騒初飾の下では三味引。梯子の影で々は寶引節分豆々蒔年男。槌のこ抱て稲積で若惠美壽に掛鯛。密柑のうじ立花だい〳〵と。祝ふてどこも吉野がや勝栗。嘘でござらぬ本俵。くいつみに土器。さすど盃ちよつと押へて去年より。今年はみづ〳〵〳〵。若みんづりの井筒屋と別て賑々賑はへり。粋のずいとこへたる戀の山崎與次兵衛。鶴籠と飛せて西口より。鶴夫がいきつて旦那ふ出といふより家内。こりや目出度と跳足で飛で門口迄。福の神のお迎ひ。ちやうさやよふさや千歳樂万歳樂。奥の座敷にもうけの火燵。亭主賣菜内儀は銚子娘は土器。午房も身祝太夫樣も御全盛。お影で我らも仕廻はゆるりくはんすで。先大福の口明に變つた咄がどんすると。吾妻は與平と與次兵衛に引合せ。ありし有樣一々と語る詞に與次兵衛。兼て意趣ある葉屋の彦介。どふがなと存る折ふし忝い與平殿。此以後はいつ迄も心安ふ御意得させう。お手上られいと一盞す見馴言馴聞馴ぬ。詞遣ひも第一は足のしびれに難與平。只あい〳〵と斗りなり。御律義で重疊〳〵。江戸へとの思ひ立尤々。吾妻が事は苦になされず。一のぞの

儲して仕合の上洛。門出に夜もすがら飲や諷へや。一寸先は闇の夜と共母が案じておりませふ。いのひ御造作與次兵衛様。吾妻様皆様つもりと遣ひ立た。お暇申すと立出る。余りと云へばけたゝまし。今宵一夜は苦しのるまい。いや〳〵一歩はすの初り。油斷は稼の大毒と帶引解けば吾妻取付。寒い折のら御遠慮のふ矢張小袖と召ませい。道中も大井川とやらいふ川は。いのふ危ない事じやげな。御無事で吉左右待まそる。頓てと別れ與次兵衛も見送つて與平殿。山崎には兄弟ありと此與次兵衛御心便に思召せ。虛外ながら江戸にも兄弟ありと思召せ。互の無事は狀通と別れて跡は。戸障子しめ月も雲井に寢靜り。松に嵐は劇して與平は九軒と。一足二足三番太鼓打止て。曲輪淋しき折こそあれ。待伏したる葉屋の彦介。蛇の目の紋としるべにて。與次兵衛と見るよりも。欺し賺してはたと切る。ひらりと躱し難與平。扨は宵の阿房者意趣返しの待伏のと。つゝと入て蹴倒し小刀と逆手に滅多突。眉間と突れのた打て。ヤレ人殺しと聲立る。見付られては出世の邪魔と。怯ど見せぬ難與平風と追ふてゞ逃失ける。町中俄に騷出し捧よ熊手よ灯燈出せ。大門うてとひしめけば彦介はうろ〳〵と。相手は山崎與次兵衛。井筒屋の客めじやと叫き立れば與次兵衛。聞くより胸にはつしとこたへ。與次兵衛是にと立出る。聲としるべに彦介は後よりしつかと抱とめ。相手は捉へた組伏せた。騷ぐまいと言ければ。吾妻引舟遣手迄。狂ひ出れゞ放さばこそ。〽はつと斗の涙さへ何となる身の

中の巻

おぼつのな。罪なくて配所の月と見んといふ。古人の物好いのなれや。日影も見せぬ座敷牢九軒町の喧嘩葉屋の彦介手負し事。代官所の沙汰となり。相手山崎與次兵衛と訴ふれば。與次兵衛も男の義理難與平とは顯さず。我身の科に引うけ親淨閑に預けられ。相手の疵は養生し死ぬるこの本復この。二ッ一ッの左右次第。我も生る瀬死ぬる瀬と。定め兼たる飛鳥川あすが日知らぬ力なき。一家の内に取分けて女房お菊の物思ひ。一日も氣と詰ぬ人。煩ひも出よふの何がな心慰みと。炙る餅も我胸も共に焦るゝ庭傳ひ。障子明れば與次兵衛。色も青ざめ悄然と氣あひ惡げにうつぶけり。二三日はお食もすゝまぬ。どこぞ惡くば藥でもまいりませ。なたいお前の短氣が私しが明暮苦になつた。もし私に徒らあらば。先の相手と切りも殺しもなさるゝ筈。〽傾城は賣物幾人にも賣いでは。由ない法海惜氣のら此難

巖も起つた。但其吾妻と私と一ッに思ふてくださんすの。こんなと知たらば一寸も出すまいもの。慾氣せいで今では口惜うござんす。恨交りのうろ〳〵涙。いふてたもるな〳〵一天下の人よりも和女一人に耻のしい。去ながら石清水八幡宮も照覽あれ。身は切らぬなれ共意分めが。與次兵衛やらぬ愛へたのと仕掛た喧嘩、身が切たも同然。殊に其切手とは男同士の義理ある中。奈落の底迄此與次兵衛が切たに成て。相手が死んだら切る丶覺悟。とは云へ意分め左程の疵では無れども。ねだつて金にする訴師とは鏡にのけたこと。みす〳〵金で買る丶命。此方の藏の金銀では買れぬそうな。預けられたは母の命日。皆是親に不孝の罰と投首するぞ不便なる。されば私が父様も夫といふて。淨閑が聞へぬ。客いも事による。千兩貳千兩いればとて獨子の命に替らるこの。欲とさへ離るればつゐ埒の明く事。口惜い此治部右衛門浪人の身でなくばと。くい〳〵いふて恨と多分今日も見へませう。父様の袖引て耻しめて言せたら。なんぼ客い親仁様も得心なふて何とせう。アレ父様の聲がする。聽て能と聞せませよ。もういにやるの又後に見廻ふてたも。いとしや淋しのらふのと女夫の顏も打悄れ涙隔て丶引立る。明る障子の燈にも暗む心ぞ哀なる。與次兵衛見廻として毎日淀の渡し舟。梶田治部右衛門は相親家の婿と思ふも娘の爲。老の心と惱せども父淨閑はさもなくて。ヤ治部殿お出。昨日の差のけの將棋勝負付ましよ。ヤこざされ。是は余な淨閑老。拙者が毎日老足と運ぶも。與次兵衛と氣遣ひさ。將棋差には參らぬ。昨日の勝負は何方へなりとつけてお仕廻〳〵と言ども。いや〳〵馬鹿めがとは運次第。昨日の駒動せず置ました。ヤこざれ〳〵。然らば勝ても負ても是一番。夕部のら盤の上とつくと見定め。工夫した相手とさすはては物。お手は御身のヤあそばせ。先飛車さきの歩とつさませう。此なり金してやらふでの。斯うよりませう。淨閑天窓と叩いて。ハヽ、南無三此馬落た。深田に馬と駈落し。引けども上らず打てども行のぬ望月の。駒の頭も見へばこそ。難しもなつたと案じける。お菊盤の傍に寄り是父様。あちらの方が落れば此方も落る。兩方の睨合でいつ迄も埒明ぬ。迷惑する駒はたつた一枚。淨閑樣のお手には金銀が澤山ある。欲と離れて金銀さへお打なさるれば。是此父樣の向ふの淨閑樣の此馬は助うる。どふぞ手にある金銀と打出させます樣に。思案して見さしやんせ。合點〳〵と袖と引ば治部右衛門打頷き。ヤくくよふ智惠つけた呑込だと。云へども淨閑氣も注ず。親じやと思ふて助言云

ふまい〳〵。又ちよつこりと歩でまい致そ。ムヽヂお手に何々。淨閑が手には金三枚銀三枚歩もござる。此歩でまはしたらまだ金銀が殖ましよ。いのひ金持浦山しいの。金持とは此角が睨んでゐる。斯よつたらば金銀出して打ずばなるまいぞ。でも金銀は放さぬ桂馬とあがろ。治部右工門堪へかね。ハテいのひ客ん坊。澤山な金銀握詰て何になさるゝ。來世へ持て往るゝの。是御覽なされ此飛車と斯ひけば。天にも地にも唯ゐ一枚の御身の此王が。片隅へ座敷牢の如く追込られ。今の間に落るが金でも銀でも打散して。圍ふて見る氣はござらぬの。我等が客いは知れたと。座敷牢へ入ろふが都詰にならふが。金銀は手放さぬ。歩あしらひで見しらせう。此方も歩ともつてぶに首とさげらるが悔みはないの。搆はぬ〳〵先逃て居ませう。コレ其内に香車のやりと以て錦玉に上らるが。夫でも金銀出すまいか。勿体ないと錦玉に上られうが。獄門にあがらふが。手前の金銀は放さぬ〳〵と。兩馬つよき欲の皮傍でお菊は氣と揉て。包む涙も手見せ禁命手詰と見へにけり。治部右工門腹立顔盤中の駒掻よせ。引掴み淨閑が眉間に。ぐはらりつと投付たり。お菊はつと驚けども淨閑はびくともせず。治部右工門膝立直し耻と知れ淨閑。相親家はもと他人駒と頬へ投付られ。

咎めもせぬ耻知らずに云ふも國土の費ながら。將棋に事よせ金銀出して曖ひ。與次兵衛命助けよと云ふ當言。合點せぬお主でなし。ぶに首と提られ錦玉に上られても。金銀とては出さぬとは。治部右工門に氣といらせ面白いか可笑の。其方も一人子此方も一人娘。兩方共に掛替なし。婿と子と思ふてゐるが嫁と娘と思はずの。與次兵衛が切れたら可愛や菊が歎のふと。思ひ遣てたもらぬは。ヱ、去とては恨めしい。縁組の時婆々が留めて小身なり共侍に縁組たい。何ぼう富限者金持でも。町人とは馬があふまいと〳〵れ〳〵留た。いや〳〵名にふれた山崎淨閑。武士交りもする仁と。我一人情ばつて此比婆が恨言。お主が客い無慈悲のら五十年添ふ祖父祖母の。女夫合まで不和になる。我子の命に替ぬ金銀。嘸や親類縁者が飢死するとも撰ふまい。我こそ牢人主人持た一家も有り。物知ずと縁と組一門の名と誇す。無念至極と斗にてせきあげ〳〵泣ければ。淨閑もしば〳〵眼。侍の子は侍の親が育てゝ。武士の道と教もる故に武士となり。町人の子は町人の親が育てゝ。商買の道と教もる故に商人となる。侍は利徳と捨て名と求め。町人は名と捨て利徳ととり金銀と貯る。是が道と申すもの。如何なる大病難病も病には療治樣々あり。國法でとらるゝ命には人參

で行水させても。いのな〳〵助のらねど金銀では助のる。命の買るゝ金銀。大事の寶といふことと與次兵衛めが知たれば。此難儀は仕出さぬ。なんぼう惜み貯へても死んでは帷子一枚とは。此淨閑も知たれども。死ぬる迄金銀と神佛と尊ぶ。是が町人の天の道。金の罰の當つた奴。まだ此上に惜げもなふ金出して。如何なる天罰大難にのな遭おろうと。可愛ひ程猶出しのねる。吝い名ととる此淨閑金銀計り惜むでなし。塵灰まで惜い物たつた一人の世帋が命。惜うなふて何とせうと。坊主天窓と將棊盤とんと投伏し泣さけるが。治部右殿のお恨も嬶可愛さとは存すれども。左程に思召すならば。なぜ日頃引寄せて異見もして下さつたら。斯樣のとは出來まいものと。我子の阿房は思はず脇がゝりの恨が出る。子故には愚鈍になり不調法申も存せぬ。奥へ參る治部右殿。ア、死んだ祖母は果報じやと。涙に咽び立ければ舅も恨云ふ事も。なく〳〵表へ立出る。跡にはおきく。將棊盤どこへ取つくしはもなき。淨閑樣のお詞の道理は聞へた樣なれど。金銀無ればお命ない。あの内藏の金箱も用に立ねば將棊の駒も同じ事。ア、慈悲のない親御やと浮世の頼み涙にくれ。無常心や入相の鐘物凄く暮渡り。雁の數よむ朧月。とまり烏の寄邊なき。藤屋吾妻がわくせきの。

思ひとのせて在所駕籠。淀の川水流れの身。行くも山崎歸るも山崎。霞が内の畦傳ひ。ア、もや打渡す丸木橋。見なれぬ目には恐ろしく。駕籠と留めて下立て所体つくるも町風に。譯なき夜半の秘の風。裾吹返し呼交し。戀の山崎そんじやうそこと人の敎へし家並も。所稱なる家作の裏門塀のうゝ迄。扨は爰ぞと知られける。駕籠の衆爰が與次兵衛樣のお屋敷。塀越に見もるがお部屋そふな。いとしやあれに押込られてこそ。私やあそこへ往ぞやちつと隙が入ふとも。必らず待てや戻りも頼むぞや。煙草がなくば進せふの。終往てこふと裾輕く。寄る程塀の高ければ。伸上り〳〵。伸上りても燈火の。影も通さず隙間なき用心嚴しさ内の体。あらしと共に路次の戸と叩いて我が胸踊る耳と壁に押當て。聞けどひつそと音もせず。いつ迄斯して居たとても。誰がしらせの便もなし。吾妻が來たとよばらふのと。たゝずむ足は釘氷身も冷へ渡り冴歸る。答さへなき座敷牢最愛や寢ての起てのと。お菊が見廻ふ駒下駄に飛石傳ふ足音の。ア是じやと飛立計り。與次さんじやないのいな。有るにもあられず吾妻が見舞にさたはいなと。聞くようお菊はつとして。扨も太い傾城めぞふする事ぞ試みんと。内より壁と懷しげにほど〳〵叩けば。ア、聞へたの。定めしどこも

締つて入る事もなるまいと。私が心に思ふと細々と此文にあり。とつくと讀で自筆の返事見ますれば。今生の本望と塀越に投込だり。ア、誰が拾はふも知いで女房のある男の屋敷。遠慮もないと披けば見知たり〳〵。臘月にも見違へぬ吾妻が筆。子細らしい一ッ書。此剃刀は私が研ぐ心の刃。若もの折は必ず〳〵臭しい者の手にのゝらず。清い御最期とり〳〵。時は違ふと日は同日。最期所は變るとも。來世は一ッ蓮葉に。永き契りと目出度〳〵。ヤ、此剃刀の入樣は。どふぞお命助けたさ。女房鼻が泣しみづき。父御樣とも爭ふ程の大事の命。澤山そうに死ねと書た此文に。めでたく〳〵もしは何じやの。男共に云付叩き出してくれふの。ハテ夫程夫の名が立つ。直にあふて云ふて退うと。路次の戸開き立出れば。ヤ與兵樣の懷しやと。絶り寄る手としつぽと取り。音に聞た吾妻殿の。今の文も見ました。私ゆ與次兵衛殿の女房さくといふ者。はる〳〵の所よふでざつたの。定めて主に逢たうろの知らしやる通りの難義で。アレあの座敷に押籠られてはでざれども。已が逢せぬ。ア、此菊が逢せぬ。吾妻殿には疾ふに逢て禮云ふ筈。此方故に大事の家業も余所になり。内は野となれ山となれ。夜と日に繼での里通ひ。親御の無機嫌世上の惡口。此度の難義それ見たのと彌人の嘲り。我とても女の身腹が立いで有るものの。夫の耻辱さがない女房と言はれまいと。嗜んでゐればお菊は氣特な。悋氣せぬ賢女〳〵と。賢女ごのしの拜み倒しに逢ふて。吾妻殿に睫毛よまれて居るはいの。御身と女郎のと思へば鬼の天魔の。此剃刀で人の男に死ねとは。死んでよくば此方一人死んだがよい。大事の男の肌はあらされ。心の底は見探され。世間に惡ふ諷はせ。生る死ぬるの難義も誰故じや。傾城殿和女ゆへ。生傾城の耻知らずと贈る恨の高聲に。與次兵衛も障子そつと明け。彼方も此方も道理詰。道理のないは我計り二人の心思ひやり。顏は焚火の冷汗に消へも失たき計りなり。いの程お恨お叱りもお前に逢ふて此吾妻が。申上ふ詞はない。引手衆多の身の上さへ。悋氣妬みは女の常。お心堅ひ町育ち。誠なき傾城めが欺してのたらしての。憎や〳〵はお道理ながら。與次兵衛樣に逢ましたは女房にならふとも。手のけ妾にならふとも申交した事もなく。勤ばのりも馴染だけ夜と日にますお尤愛さ。女子のなづむ風俗。よい殿御持しやんしたぶる樣。お世話はお前お一人。此度の騒動も人違ひと頼もしづくで。お身の難儀も私のら起る相手も頼て死そなげな。悲いは我身一ッ知せて覺悟もさせましたく。曲輪と忍んで此有樣。見付ら

るれば見せしめに逢ゝ合點。相手が死んだら自害させまし。私もお供と剃刀も用意しました。お主の名も流さず私も情の御恩に。命捨る心ざしお前の御緣は妨げぬ。たつたま一度お顏見せて下さんせ。其眼と直に閉ぎます。ちお慈悲ぞやと懷中の剃刀喉に押あて。姿婆の名殘と涙さへ思ひ切たる哀れさに。お菊は漸胸ひらけ。袖引留めてこれ吾妻殿。義理にも命捨ふ君は僞りにはならぬ事。心底がいとしい主も定めし逢たのらふ。沙汰なしにそつと逢せまし。ア、有難い了簡深いお菊樣。大事の殿御と澤山に抱ておました堪へてや。ナ取返されはせまいし夫だけ御身の仕合せと。心とけたる嬉路の中。おきく〳〵と呼聲は舅の淨閑。鼠取の升落し手に持て嫁はどこにと立出る。アレ爰へ親仁樣折が惡ひ先暫しと。吾妻と塀の小蔭に隱し。まだお寢もあろばさず。夜更てなんで御座りまも。イヤ別の用はない是見やお菊。若い奴らが仕掛て置た舛落し。はつたりと響いた故明て見たれば。鼠は逃て往だと見へて舛の內には何にもない。是でつく〳〵世の中の悟ひらいた。中の餌食と鼠みにして油斷すれば。落しにのゝつてつゐ殺さるゝ。思ひ切て餌と捨。逃ば其鼠が命と助かる事の。親鼠舅鼠女房鼠も有であらふ。此一家一門の鼠共が悅こび。別して老鼠の親鼠が心の安まりは。いの子嬉しのらふぞ。もし若鼠の分別なしが。逃た跡で親鼠が又落しに掛らふのと。由ない意地と立おらふが。いのな〳〵親鼠は老功で。落しにかゝる事じやない。定て伯父鼠も有らふ。其巢へ屈んで爰らさへ影と見せねば。鼠落しも音なしに成て濟む。此度の舛落しによふ懲て。夜毎にけた走り柳走り。盃嚙つたり親の小判噬へて盜んだり。暴廻る事ふつ〳〵止め。後には白鼠の富貴と榮へると。親鼠が見る嬉しさぞう有らふ。阿房鼠の狠狽鼠。此合點がいかぬのと。已や此頃夜が寢られぬと。涙に聲と含ませば。いのにも〳〵。お慈悲な鼠算用成程私が逃しませう。ア、滿足〳〵さつと胸がひらいた。此頃心に此事ばつゝり。持佛へ參つても佛の顏も見へなんだ。嬉しや今宵のら心靜に看經せうと。念佛ちのらの後妻。見るに心ぞやるせなさ。與次兵衛走り出聲としるべの忝け涙。お菊は鼠の足跡と手に戴いて吾妻樣與次兵衛樣。今のお慈悲と聞しやつたの。早ふ爰と退く程がれ心安め孝行。淨閑樣の起臥は此菊が居るのらは。今迄より猶氣とつける。跡に氣遣あそばそなお前に誰ぞ附たいが。ア、何がなと案ずれば。是お菊樣夫には此吾妻が居る。命と捨て出た曲輪二度歸る心はなし。お前さへ御了簡お供せよとあるなれば。私や忝けな

い。曲輪へは歸らぬと思ひ詰たる詞の末。ヤ、そんなりや跡先首尾がよい。ヤア更ぬ先にと引立れば。與次兵衛袖と打はらひ。そうでない〳〵。人の父としては慈にとゞまり。人の子として孝にとゞまるといふ。預り者が欠落し先の相手が死ぬれば。忽ち親は下手人に捕れ首と刎らる。假令先が無事でも取逃したる咎めにて。夫程の罪は親仁樣の身にのゝる。其難と厭ぬ慈悲心親仁は親の道が立。與次兵衛は今日迄始終の氣に違ひ。剩へ親と身代に逃て命助かり。百年千年生る迎人交りもならねば。天地の内には住れぬ。お心ともどくでなく。歎とかくるが面白ふはなけれども。矢張此儘死なせてくれ。命と捨て一生の孝行がして死たいと。聲と上て泣ければ。これも又お道理と兩人も心破りのね。泣くより外の事ぞなさ。淨閑内より聲と上。お菊〳〵。不孝者めが落まいと云ふそうな。ヱ、く情ない哀知らず。七十になる淨閑が。もがられたと云ふ外間惡さ。人にこそ知せね。内證手と入れ二百兩迄扱ふても。足元見て千兩でも聞ぬと云ふ。淺疵とは聞たれども人の生身如何有ふのと親の案じは如何思ふ。將棊で心と紛らせば結句傍うら氣と付て。思ひ出す程胸苦しい。宵うら心殺にはたいた舛落し。量つても討られぬ。親の歎と思ひやれ一生子でもおるまい。

一度は親にもなりおろふ。胸の中が知せたい。落るこの落ぬこの早吐せと。聲荒げても泣顔は壁より外にもれにけり。與次兵衛涙に平伏て。有難いお詞程ぞふも此與次兵衛。爰が立て落られぬ眞平御免と伏沈む。ふゝよい〳〵。年寄た親と持つ者は一日も親と先だて。其身息才で年忌追善。吊ひたいと願ふぞや。汝は親に吊はれ歎がのけて見たいの。ヤ此相口紙腹べ突込で。望の通りにして遣ぞ。南無阿彌陀佛といふ聲に申々落ませう。待て下され親仁樣とさうぞ伏てぞ泣居たる。ふゝしのゝと落るの。何の偽り申そうぞ。ヤ嬉しや落付た今迄の不孝皆免じ。三十年の孝行と唯た一度に受取た。死んだ婆々も嬉しのらふお菊には親が有る。淨閑にはお菊が有る。跡には少も氣遣そな。連の女中が有るそうな。嫌がるとも炙すべさせ。酒呑せて下さるな。馬では人が類と見る高くとも駕籠に乗れ。頼みまするとそこ〳〵に心は千筋百筋の。縞の財布と投出しさらばと斗云さして。跡は涙に咽びけり。與次兵衛猶も有難き親の恩と妻の思ひ。別れの憂さに忙然と。氣抜の如くよろ〳〵と前後も分ず見へければ。是吾妻じや合點か。あれはかゝ樣お菊樣。去らばと切て言んせ。ヱ、氣の弱ひお人やと力と附る我が身も。人目と深く忍ぶ夜のいさ合鴛鴦と眠きて。袖打拂ふ春の霜

駕籠の来おじやと招きけり。お菊の聲もうらがれて。なふ何方に落着ても其儘御無事の便と待。泊り〳〵の朝晩に冷ぬ樣に顧むぞや。何やら言ひたい事ぞもが。胸にはあれど口へ出ぬ。只御無事で息才でと云ふより外は泣ばかり。誠と言はゞ我こそは夫と連て退が道。何しや妬憎んだ人。相駕籠でやゝ妬ましさ浦山しさと悲しさと。涙の筋は多けれど。最愛いばかり一道に。見送る駕籠も遙々と。さらば〳〵のふ去ちばの聲と紛らす後夜の鐘。跡へ戻るは雲の足。先へ急ぐは駕籠の足。切てうたして留もせず。戀の重荷に小附して。親子の哀れ打乘せて別れ行方や

下の巻　與次兵衛吾妻道行

春に育つも花さそふ。蝶は菜種の味しらず。菜種の蝶は花しらず。知られず知らぬ中ならば。浮れ初まひ狂ふまひもの味氣なや。吾妻立寄かゝ、嬉しやお心も解まつたの。アレ御覽せよ蟲でさへ番離れぬ揚羽の蝶。我々も二人連粋なぞうしの中々に。お心弱やと諫むれば。吾妻請出せ山崎與次兵衛。請出せ〳〵山崎與次兵衛。いつか思ひのゞ下紐とけて昔思へば憂や愁や。うやつらや忍ぶ昔もうやつらや。情なや誰あらふ山崎與次兵衛樣迎人々に。おくれぬ髪の亂れ心。吾妻が顏も見忘れて。現なやと制すれば。和女は廉屋の吾妻ぞの。與次兵衛に揉れて。色のわるさよ最愛さよ。近い内にはのならずと。請て樂さしよ世帯して子供もどけて兩人が連て。おちが肩くまおて〳〵が日傘。肩で風さる山崎に。親の御恩と振捨て。和女の世話になり振も。昔には似ぬ男山。今では人もあきしのや。外山の桜よ事とはん。さつが憂いの別れがういう。待る別れもせぬ樣に。親の許した女房は。義理と情の二ふ者て。のけて思へば甲斐もなく。今は野末の旅駒。昨日は吾妻に戀とのせ。今日は故鄙の鳥れ泣。我のら狂ふ秋の葉の。亂れて袖に置もせず。疑もせで戀たま〳〵も。待るとも待身になるな親と子の。便りと淩ぐ山崎の。妻ゆさこそは亂れ髪。いふた嗣が力ぞや。秋が馴染は三重の帶。長ひ夜すがら引締て。妬憎氣の心なく預る物は半分の。主は忘れで居ざんすあ。過し月見は井筒屋で。底意隈なき夜と共に。踊明した面白さ。私や百迄も忘りやせぬ。忘れぬ物よ。見あのぬ君が。外八文字の道中姿。眼振で殺す。所体になづむ。傾城でまめにたらいが女房。請出したらいの底抜て。影も宿らぬきぬ〳〵の。親と悲しみ妻と恐ひ。心一ッと二しなに。名のりて過る時鳥。しやが父に似て父に似ず。子は色

里に初音ふる。冠は被ねど大じんと。花車がとゞろく口舌の門。遣手がたゝく禿が眠り。みな夢の間の境界と。破れぱゞはちも無りけり。斯は知れども柳の糸の。おぞろと亂す山ふろし。烈しき親の諫めの詞。妻が別れの一詞身に染々と懲しやと。互に手に手を取交し聲も惜まず泣居たる。夕陽くさに程もなく。西北に風おこり東南に向ふ空の足。梢木の間もはら〳〵〳〵。小川の水音さら〳〵〳〵。雲のは袖もひら〳〵と。彼方へ靡き此方へ靡き。くるゝ〳〵くる〳〵くるりと。廻り廻るや。月は行けども果しなき。思ひは目前親の親。あたつて碎ぐる男の姿。走れば走り留れば留り。狂はぬ袖も亂れ心命つれなき流れの身。流れ渡りの世の中に。暫し留まる賤が家の。軒と尋ねてなやみけり。難波潟梅に名と取り松茂り。紅葉の錦畫さへや。夜見世と新にお免しと。疾や遲しと見にくるは四筋の町の軒深く。燈火星の如くにて。三五以上の月の顔。さす汐影のわけもよき。局々の手拭は濡ぬ隙ごそなありけり。太鼓は拍で大門に轟く馬の高嘶き。井筒が許へ乘掛の。客は八幡の藪與平。威勢美々しく飛下れば。亭主迎ひの槌で庭。掃まい九郎左見忘れの。當正月には遣作の上。貴殿が世話になん與平。以前は金銀內大臣今日參るは內證に。樣子も金も有

大臣聽通るとつゝと入。誠にそうよお珍し先お茶煙草と輕薄に。油のせたる燈臺もはや立替る蠟燭の。流れの里ぞ氣散じなる。九郎左近ふと招きよせ。知らるゝ如く此正月藤屋の太夫に囉ふた金。直に東都に芽と出して入いためすのぞの儲け。馬の背骨も折甲斐あつて此度聽繰る所。太夫吾妻は曲輪と逃出。關と破りし科人と行方と求め探さる由。道中すがら承はる。恩と受詞とつがひし此與平捨置ては男立ず。彼と騙出し世と廣ふして遣ん。吾妻が年季の證文あらん此方へ貰ひたし。金に替て今宵の內に首尾する樣。九郎左御さはいく〳〵ちよつとの露もしつぽりと家內うるお工計なり。お目出度〳〵御聞と有るうちは申に及ばず。去ながら不思儀な事がござります。今日暮方に田舍めいたる浪人衆。吾妻はでいに居られずとも手形なりとも身請がしたい。金はなけれど一腰の宇多の國行。二尺ヨのだんびら物折紙共に引替と。奥の座敷に居られまし親方へはまだ知さず。お前と一所に親方へ云ふて見ましよと立出る。表の騒は葉屋の彦介どの〳〵と入來たる。珍しい且那。とれたの〳〵。果報な九郎左金儲けうなら我らに廻れ。輕いお出が身請の談合さついか〳〵。知た通り此春早々。山崎の與次兵衛に小髮先とちよつられた。弓矢八幡勘忍せぬ

氣。代官所へも訴へ親淨閑に御預け。内證から手と入れて段々と詫言する。金銀で振へば百萬兩でも聞ぬ男。コレ見よ疵も平癒した。與次兵衛めは憎けれども。親めが心が不便さに許して遣た。其禮とて目くさり金樽代としてよこした。酒戻しはせぬ物もへまあ受取て置たじや。吾妻めが關破りも。與次兵衛がそゝのうしゐ預の内と連て逃た。淨閑は其祟に吾妻與次兵衛等出す迄、道具諸色に封印附嚴い閉門。聞けば與次兵衛めはのたれて死したげな。でれば其儘切る、首仕合ぢやあるまいの。扨談合は吾妻が事。關破りの科人といつが命を助のらぬ。佛性に生れ付たが彦介が病氣やは。是も助けてとらせたい。先吾妻めが手形と請出し。跡では緩々行衛を尋ね。飯でも焚せすゝぎ洗濯。手足按らせ一生は養ひ喪じにをる覺悟。彦介なりやこそ斯も言へ相談して埒明い。コヲヤ現銀じやと五十兩亭主が前へ投出す。與平は始終聞すまし。御免と襖押開き亭主ノ〳〵。吾妻が身請は身が先じや。金子は是ぞと持たせる。千兩包の木地の臺前にずつしり飾らせたり。前後の爭ひなさるれば。此張人者は一番と呼はつて座敷に出。身請の代金此一腰三千貫の折紙と。共に投出す形船幣なのぞは見ねども。與次兵衛が物語の治部右工門。紛ひなしと雖與平。口と閉て伺ひ居る。亭主九郎左は禍德の三方論議に行あたり。兎角は親方了簡次第呼に遣ふの身が參らふ。夫はで九郎左〳〵と獨言して駈出す。跡は互の脫合彦介は手ごりした。與平が顏の氣味惡く心も心ならねども。見つきは強いはつとり育ち。煙草盆引よせて煙り吹出す佛頂頬煙管で迷惑灰吹と叩いて返事と待居たる。吾妻が親方勘右工門亭主に連て座敷に出。樣子は九郎左物語吾妻が手形と身請とは。つゐに曲輪にない格にて。兎角のお返事申がたし。何れへ手形上ましても。此事世間に流布あつて欠落させた跡にても。金さへやれば濟む事と惡い性根と吹こまれ。そこにも欠落爰にも逃た又しては關破りと。曲輪の騷動親方仲間の難儀なり。此相談は成ますまい。一旦吾妻が顏と見て其跡では善樣にと。聞も敢ず聞へた〳〵。余人は知らず此彦介早速吾妻と尋出し。身請は已じや詞とつがふた詐歸るとずんと立。そふはさせぬと難與平。小腕取り引攫ぎてどうど投。脊骨にしつかと打跨がり。逃足も去足も達者に生れ付た男。動のば頭はう碎く合點う。藤屋の勘右尤千万今の詞は聞所吾妻が顏と一目見たれば。其座で身受は違ないが。何の虛言申ませふ。末に年季の少い吾妻。今迄金は儲けて呉る爲りは申ませぬ。ゝ、面白い代官所の首尾も別條ないう。其段も此

方より申おろせば相濟ます。珍重〳〵。下々ぞも其革蔦籠持てこい。亭主二ッと開かれよ
あつと蔦籠の紐とく〳〵。中より吾妻與次兵衛正氣になつて立出る。彦助は愕りし親方亭
主も興醒顔。治部右衛門は包のね。ナレ與次兵衛の治部じや〳〵。無事な顔見て嬉しやと跡
は言ずの悦び泣。與次兵衛も頭とさげ何事も御免あれ。親淨閑へお詫言。頼むに及ばぬ淨
閑の心入も聞てゐる。吾妻もいのひ苦勞めさつた。ナヽ親方此一腰に引のへて。吾妻と身共
に下されと手とつけば。吾妻も久しい九郎左樣。旦那樣へお詫言頼みまするとぬ泣居たる。
與平勇んで彦介と取て引立。おのれよふ聞け此與平が江戸へ稼ぎの根本は。吾妻殿と受出
して曲輪の苦患と助けんと。思ひ込だる一商ひ。五百貫目に間のない金手間際入ず儲け溜
立歸る道とがら與次兵衛殿にもお目にのゝり。樣子は段々聞屆けた。おのれと切たは此與
平。與次兵衛殿に難儀と見せ金銀大分取たな。打のめしても腹慾ぞ。目出度さ時節じやと
つと〻歸れと突放せば。ヽ、有難や正月も此座敷で取て投られ。跡は切れて今日は又。殺さ
るゝのと思ふたがお助けは忝けない。三度の數が合ましたと逃出るゝ治部右工門。腕ひし
ぎに取て投。おのれはぞうも去されぬ。淨閑が言分させ。閉門御免受ねばならぬと手走く
縛りあげ。身受は濟だの與平殿。いやまだ濟ぬ。金子は千兩一枚の。手形に替てとなん與
平親方が前に置く。樹右工門頭ふり。來二月には年も明け身任せになる吾妻。千兩といふ
金取ては人の思はく男が立ぬ。金取ずともと申たけれどよもやそふはなされまい。跡六月と
ば三百兩殘はいらぬと突戻す。與平素より氣散じ者。出來た〳〵。手形は取た金取た吾妻
が身請濟ました。ろつこで請出す三百兩打ておけ。しやん〳〵。ま一ッせい。しやん〳〵
そつゝとせい。ヨヽヤ亭主。此千兩は始より身受にあてた。一錢でも殘しては本意ならず。
三百兩は亭主にはづむ。ヨヽヤ忝けない。二口合せて六百兩。打ておけ。しやん〳〵。四百
兩殘つて氣にのゝる。集て祝へとばら〳〵金は座敷に色替たり。揚屋の男女別ちなく
押あひへしあひ拾取り。皆取込だの目出度い〳〵。祝ふて三度しやん〳〵と手拍子に口拍
子。しあはせ拍子の三々九度。末は千秋万年も。替らぬ妹背と重ねける

山崎與次兵衛壽の門松　終

博多小女郎浪枕

上の巻

近松門左衛門作

船とだしやらば夜深に出しやれ帆影見るさへ氣にうゝる。長門の秋の夕ぐれは。歌に詠むてふ文字がせき。下の關とも名にたゝさ西國一の大湊。北に朝鮮釜山海。西に長崎薩摩灘唐阿蘭陀の代物と朝な夕なに引きうけて。千艘出れば入船も。日に千貫目万貫目。小判走れば銀が飛ぶ。金色世界も斯くやらん。沖に何まつ*檜垣作。十四五端の廻船に。船頭水主ゝぞてら着て足踏みのばす梶枕。四五人の乘衆共やぐらの上につゝくつく。そよと波音舟影に心と付る蚤取眼。物案じ顔も類すいたる。中に頭の毛剃九右衞門。生れゝ長崎國訛り。コリャうん達まだ市五郎三藏が船ゝ見へいろ。心元なのばい。心たまざりや夜ざとく成つて。身だまんじりともせない。首尾よのらふば筑前さなへ此船まはし。柳町のしやう〳〵てい共請出いて。上方さなへつゞばしる。表の間借り切た上唐人。船頭が名染筑前まで乘せなけりやならぬと云ふ。仕果せにや筑前へゝ往のぬふね門出よの〳〵。よの便さのふばい。表の乘衆呼ふでわたい咄ぞもして紛らさん。あゝと答へて平左衞門呼びにおるれば。其跡ゝ鬼

*原文何字に似たれども不明

とも組ひべき男共。あん。へら取て敷のすやら。茶出しに唐茶つまみ込ひつぎ出す色い面けれぞ。頭と頭と敬ひし禮義ぞ仲間の花香なる。表の乘衆小町屋惣七。生得慇懃都育ち。呼れて櫓にわり膝し。船頭名染に押付ての便船。御尋なくとも御挨拶申す筈。無禮御免と手と突けば。ヲ、堅い〳〵同船いたし一ッ釜の食事喰るは一門同然。サア御手あげられ。此五人は我らが仲間。他事なふ咄明す中。近付になつてお咄なされ。斯ふ申某は長崎者。九右衛門と申てそつといたゐた唐商賈。是は同國彌平次と申す仁。次は上方小倉屋傳右難波や仁左。其元呼に參つたは。阿波の德島平左衛門と申て髮月代いたさるゝ。船中の事のさ心おのずとお頼みなされ。して其元は何國何方。我らも生國長崎。世悴の時分親につれて生れ所と引こし京住居。父が名は小町屋惣左衛門。同名惣七と申者。賣買のため筑前へは毎年の折のぼり。どなたも船中平ぐわい御免。よいお近付もとめしと。禮儀しまへば膝くづれ。詞なとせば寢腹這ひ。早千年の名染はど。心解けたる朝霜の奥底もあく成りにける。九右衛門顏色打とけて船中の寂さ。物語程伽に成るものはない。ゐんどもが廿七の年。薩摩者と喧嘩した咄。虚しやなのばん聞のつしやれ。九月の七日九日は氏神殿の祭。本踊いろ唐兒踊ひろ見事なとばん。元のうせん町といふ所で石五器に一二はい。肝のたばねへ諸白といつのけた薩摩二さい。肥薄男であつたばん。諏訪へ踊みがい行く行違ひに。ながゝ赤鰯の鎔がくさのゐんどもが脇腹さなへ當るが最期。引抓んで壁へのいなすちふと思ふて。鎔と逆手にやつくるり。それは〳〵見ごとな事であつたがのふ。他國者に投げられては國へ歸つても成敗。死ぬる命はどこでも一ッと。二尺八寸引ぬいた。コリャン吠だゆるなと又引のづいて投げたがの。角の有る溝石でくさ。頭のさらが粉小微塵に打破れた。ヲ、船では破れたと云ふは忌々しい。頭の皿がはしつた〳〵。血が走るいろ涙がでるいろ。頭のゝへてやといどにのろわれ。小宿さなへいんだがの。今で思へばむごうらしげに。そがいゐせでも大事なのたん。上方衆は氣がよのけん。こがいなとは有るまいと。仕形まじりの高咄皆あんのんと聞き居たる。ヲ京のお客お咄しなされ。次第〳〵に所望せん。上方は色所定めて深い譯があろ。お咄しあれと口々に。乘すれば乘つてされば〳〵。親惣左衛門吟味つよく。京大坂ではびたひらなの我物で我儘ならず。毎年の筑前通ひ。幸に柳町の小女郎といそも〳〵より互にのぼり。是非當年ゝ請出して。女房に持るゝがてん持つ約束と半分

聞いて。ア、おつしやるな聞く主でない。我らも博多へ參る者。此一座五人が小女郎殿の身請の率頭。大盡くわつとおはづみと。毛剃が起て膝立れば。よふ〳〵身請の大盡樣こりや誰が大じんぞ。小女郎樣の大じんと。一坐がはらりと取廻し。座興も過ればひつとして。なぶるの但侮るのと。心くる〳〵せきたぐる胸と押へて。ゑへん〳〵今朝のら風ひき頭痛いたす。跡の咄しは後刻〳〵。どなたもこれにと挨拶し。思ひなやみつ立煩ひ。漸々下へ這いれるゝ。身請する程内證があたゝうので。風引たとはどこやら足らぬ和郎そふなとわる口若口小倉口より。波押切てくる早舟。此舟目的の一もんじ。眞黒に成て漕ぎ付たり。九右衛門初め立ち騒ぎ。ナア三藏市五郎。首尾は〳〵。近年の拍子よく。荷物受取金渡しあつちも機嫌こつちも仕合。荷數手形に引合せ渡しませふと聞く嬉しさ。船頭起よ水主もこい。荷物請とれまつのせと。心も勇む虎の皮百五枚。仕合すれば氣の藥。海老での人參五箱で卅斤。仕損ずるは手廻しの緞子七櫃二百本。船のら舟へうつしの麝香四十臍。なんと遠見に見付られはせなんだの。けも無いと言わしや編紹が十五箱。去ながらむりやうの繻子が十二丸。世話入た漆七桶。運の強いゝ一昨日の夜の月影照のよい鎧甲百斤。先のう仕濟し歸りました。天地の恵み明星程な珊瑚珠が八十粒。手形の表是迄渡し仕した。此一通は來夏船の割符。迎ひ舟にお出なされとの言傳と。渡せば取てふし戴き。手拍高名休みめされ。二人の衆にも酒おませ。お目出度いお頭さま。御褒美としつのりと。御酒も祝ふて下されうと。皆本船に乘り移る。九右衛門相仕等招きよせ。小聲ゐ成ていづれも見ずや。荷物を船へ積む折のら乘合の京の奴。のきだつより顔指出し。合點ゆのぬと思ふ類付。生て置たら頼げた叩き。後日の難儀見る樣な。切殺しては大事の門出血と見るが忌々しい。絞殺して海へほたり込。下人めも有そふな。油斷するなまつのせてんだ。皆の衆ぬのるな心得たと。鉢まきたすき尻のらげ。腕ぼねだめし力だめし。合の舳さうと小猶にて時分と窺ひすこいと。櫓おるゝも忍び足。所は沖津汐風の外は一味の舟の中。聞く人もなし見る人なし。人ゝ知らじと思ふこそ。けつく身の上知らずなり。下人が喚くまつのせ聲。櫓の上へ跳り上ると追つゞいて。弼平次傳右衛門二人が中に取まいて。宙に差上げ是わいなと投り込む浪の。哀れや下人底の水屑と成りにける。ナア一人ゝしてやつた。惣七めが見へぬ捜せ〳〵。こりゃ〳〵爰にてんま込にと云ふ聲に。惣七水掉追取て狂ひ出。ナア海賊めら樣子一々

見届けた。死ぬるとも一人死なふのとそつぽうめつぽう打立る。後へ廻つて市五郎。隙と窺ひ掴みつけば取て投げ。投られながら足首としつかと取り。眞倒にずでんどう。どうと響く浪音に捲りのけ。大勢のゝつてだんぼらぼ。ぼとりも知れぬ海の中眞倒に打込で。ナヲ仕濟した目出度いと笑ふ聲。惣七はつと心付見れば傳馬の中々に。物音せば惡のらんと。纜といて艪と押立て。惡魚毒蛇の口よりも通れがたき塞と通れ。一反斗り漕ぎ出〳〵。ヲ皆々骨ぶり〳〵。惣七是のら加護申す。此返報ゝ重ねてと心急げばゑいさつさ。ゑいや運いてんまに有り、おすや櫓腕の續くだけ命かぎりと。いひきにて〳〵すいちやゑんちや。すゝひすふいてう。ひいたらこはいみさいはんや。さんろうわうわう〳〵。こゝおきや〳〵なふ慾市殿。其拍子でゝ踊られぬ。錢だいこの三味線。知らずば知らぬとあたまのら言ふたが能い。長崎の伊左衛門樣とゝ違ふた物。もう踊らぬぞや。それで藝が上る物ゝ。三味線引やひまで〳〵く踊りやと言ひければ。イヤなんぼでも踊らぬ。三味線止めて此方も石臼のゝ跛足ひのしやれ。何じや跛足ひけ盲目と思ひ侮づるな。目二ッ持たゝのれらにいで物見せんと。三味線ふりあげ聲とあてどに追廻す。亭主奥田屋四郎左衛門臺所のら立出。こりや何じや慾市。こゝたしなめ大人氣ない。況共もあがいたら遣手に告て叱らすぞ。ナイ重の丞。今日ゝ小女郎樣の母御の十三年忌。追善のため身揚して。小女郎樣は奥の間に經念佛して御座るでないの。ついて居る太夫樣の親御の事。線香でもたてふと思ふ氣ゝるふて。盲人相手に何事じや。いる〳〵私共二人錢だいこ稽古して居たりや。慾市の三味線で邪魔しやりんす。其錢だいこが猶わるい。物の稽古も時が有る奥へゐてついてゐよ。二人ながらとつと〳〵往け。コリヤ慾市表の二階にさいふの源樣が來て御座る見廻たの。やつちや一角せしめんと。人の巾着あてにして。貰ゝぬ先の締めく〳〵りさいふの客へと取りに行く。百年經ねど衰へゝ今身の上に小町屋惣七。下の關の大難に命一ッと拾ひ得て。博多へ憧れ著しのぞ身に付く物ゝ手足より。外にゝ何のあてもなく。知音の方へも身と耻て訪音づれゝ絶へしのぞ。小女郎が情忘られず。懇しさ風の吹立る柳町にゝ來たれども。金銀なければ肩すぼりかのれと心奥田屋の。門と覗いつ退いてみつ案じたゝずみ居る風情。内にゝ乞食ととがり聲。余り物ゝ遣てしまふた通りや〳〵とつのうぞなり。扨ゝはや物囂ひと人目にゝ見ゆるよな。成果たりしなしたり。此風俗で小女郎に。逢ひたいと云ふたりとも聞いれじ。聞

入れてゐら小女郎が班。思ひ切た顔見まひと立歸る後より。チヽ待ちや〳〵と重の丞。コレ今日ハ太夫様の志の日にあたり。施しの一錢と指出しながら。ハテ此食乞ハお絹布と着てゐると顔さし覗いて。サテお前ハ京の惣七様。なふ太夫様惣七様の乞食に成つてどんしたと。呼ハればうい振て逃ると去さぬ待んせと。帶に縋つて留むる間に。家内も驚き駈出る小女郎ハ表に走り出。笠のなぐつてはんにそふじや。嬉しやよふ來てくだんした。此有様ハどふぞいのと。何の様子も聞ぬさきのら泣く涙。コレ四郎左様奥へつれまして叱たふござんす。いのにも〳〵お馴染の惣七様。御用あらば御意なされと。亭主が情に打つれて。入るより早く縋り付。懇し床しハ言わいでも知れた二人が中。此お姿ハ親御様の御勘氣でも受ての事の。様子がなふてハ叶ハぬ筈。お前の心に此小女郎ハまだ傾城じやと思ふてゐ。此身ハ曲輪に居るとても心ハ疾のら女夫ぞや。肩裾むすび手と引て。人の戸口に縋る共交した詞遣やせぬ。今日ハ阿母様の十三年の命日。お前に逢ふたハ親達が彼の世のら手と取ての引合せ。女房さめに暮したのと一口云ふとならぬのと。眞實見ゆる涙の玉。男もはら〳〵聲ふるひ。小女郎息才にあつたの。一年ぶりに顔と見て。能い姿も見せ能いとも聞するとの。ニヤ聞てたも。毎年の如く諸色と仕込で下る所。下の關にて海賊船に乘り合せ家來ハ眼前海へ沈めさせ。我命さへはう〳〵の仕合にて此所まで逃のび。商賣の荷物衣類ハ共まゝ舟に捨て置き。肌に一錢貯へなければ二度に二ッの下着と賣て。今日までの露の命と繋ぎしぞや。此度の下りにハ受出し。女房に持んとの深き契約。ろの金銀も人手に渡し。詞と違へ望と叶へぬ我本意なさより。和女が恨みハ心の不便さに。言譯やら顔見にやら。見苦しき身も恥ぢず爰へ來て。面目もなき物語と涙に聲と曇らせり。よふ打明けて下んした。寶ハ湧物ふ命さへあるなれば。私や嬉しう御座んする。私が心でお前一人ハどうなと成る。おいとしや肌寒のろお顔がたんと細つたと。着ながら上着ふハと着せ。抱き締めてこそ泣き居たる。表に血氣の下男。大盡様の御來臨と鳴り喚く。ヤレ人が來る此方へと。男の手と取り身と寄せて奥の一間に入りにける。客ハ過つる海賊共。眞先立て毛剃九右衛門。彌平次傳右仁左平左市五三藏サテ御座れと。引する雪駄の銀にあのした衣裳付。おの〳〵さるせらしやすためん。ゐるさいらんけん孺子天鵞絨。下着上着も渡り物。頭ハ日本胴ハ唐との襟ざのい。ちくら手くらの一夜撿校終に目馴ぬ出立ばへ。奥田屋に勤ぎ込み。

座敷に居ながれ毛測が諸色受込んで。差配らしげに勿体顔。亭主うす〳〵見知りが有らふ。曲輪の縦横十文字。昨日迄端せゝりした我々。俄分限い見らるゝ通り今日のらい太夫狂ひ。來る道すがら見て置た一文字屋の江口。丸屋の勝山同じ家の薄雲。油屋みさは和泉やおぐら。車屋の大磯。此六人と請出して。是れに居らるゝ人々の物いひ伽。明日迄待ぬ今日の中に首尾させい。是ゝきついと四郎左衛門飛んで出るとやれ待て〳〵。亭主が留守でゝ興がない。云付て呼びにやれ。長つたと硯引よせ書付て。呼びにやる足走り書。早う往てこいおすい物。大座敷も一ッにせい。子供泣すな女房どもに薬飲ませ。ヤ何じや花車が煩ふの。それ狭箱持てこい。油斷めされな人参用ひて養生が第一。持合せたはづもふと蓋押開き一包。一ッ選りの大人參一斤余り投出し。四郎左子供ゝ幾人ある。娘が一人男が二人御座ります。ヲ、よい子持小けれども此珊瑚珠。ついで悪目が八匁二人の子に提さしやれ。おひすが若物に有合せた緞子三本繻子五本。此緋縮緬裏によのらふ。綿の代まで相添へて。投出すほり出す戴くに亭主が腕ぞくたびれける。四郎左衛門ぎよつとして。お藏より先肝が潰るゝ。いつの間に此様な大分限者にお成りなされたと。問詰られて間に合詞きついの〳〵。江戸商賣まだるく。さよの中山無間の鐘。撞あてたふく〳〵長者。去ながら。此鐘撞くにゝ行法がむづかしい長者經とて。寺に傳ゝる緣起の目錄聞せたいと打笑へば。亭主横手とはたと打ち扱有がたいお經。我らも些とあやかる樣に。其お經授け下されとせがみ立られ。然らば聽聞仕れと何やら知れぬ懐帳。殊勝らしげに取出し。吝いとの虚八百長者經となどらへ。聲はり上て讀みにけり

長者經

抑此無間の鐘の濫觴と尋ぬれば。天竺の大金持月蓋と名に高き。さつても吝い長者あり。佛是に示さんため朝な〳〵の頭陀の行。はつち〳〵も空耳つぶし。うん共すん共云いれぬ佛の方便にて。光ゝ宛ら一分小判の山吹色。金と見るより吝嗇長者。佛の箔とはがさんと。慾のら入る手の内と釋迦の手管にしのけられ。惜やこのなしや南無阿彌陀佛。此撞鐘と建立す。去れば汚ない長者が心未世の今に留まつて。先祝夜の鐘と撞く時ゝ。諸行無常に惜しや〳〵と響くなり。後夜の鐘とつく時ゝ是しやう。めつはうな事と響くなり。晨鐘の響きゝ。しやうめつ滅多に入用知れず。寂滅いらざる鐘の聲。一文惜しみの百八煩惱此鐘

の音と聞く人ん。現世にてん分限の金持。未來にてん無間の釜入。斯る不思議の撞鐘とおろそのに撞くべのらず。扨行法の次第といつは絹も紬も着るとならず。木綿布團も榮燿の至荒薦ひいて起臥の。身んならんしよならちやがい。精進潔齋菜いらず。ちうやにたつた二度の節季ん尻のらげ。往來の中とちよこ〳〵走り。ちよこ〳〵〳〵〳〵ぬけて。落て有る物唯置くな。轉ても土と掴んで起るん七ッ起。質ととらずば金のすな欲者ん買はぬが德。月夜に夜仕事んせぬが損。稼ぐに追付貧んなし。弁子と千にも割木の焚き樣。必ず灰と取るとなのれ。捨る物ん何にもない。鍋の墨でん細眉つくり。しべのきれん痿痹の妙藥水なき井戸んはしごの入れ物。鼠の尾まできりのさや。指せ干せ傘人に貸すな鰹節。櫛木櫛鉢砥石石臼藥研迄。目にこそ見へね貸す度に。へらずに戻る例んなし。扨其外ん愛敬突合。始末たくんへ讀書算盤秤目の。上と見ればはうづがない我より下と手本として。右の條々守るに於てん微塵積つて山と成り。長者の金言疑ひなし無間の鐘とん名斗りにて。現世も未來も背のねば。自然と榮へる福德緣起。聽聞あれと語りけり。いや共おゝ共申されぬ。世界中が此通りに身持たら。私らが商賣ん取ふくだやとぞ笑ひける。座敷の隔てん障子一重。彼方の騷ぎひし〳〵と小女郎が身にてたへゞ有る所にん有る物のな。五人六人の太夫達請出そふ。何やろのやろ是やろと。金銀財寶ん塵はこり。父樣や母樣の貧な暮しと見た時も。能んぬ金が欲いとん夢程も思んすして。今日と云ふ今日彼方の身請が羨山しく。私や金が欲ふ成りました。仕合のよい人と妬むん道でなけれども。どんな男ぞ顏見てやと。障子の隙より指覗き。ヤアのりや私が近付。さきさのの時ん心便に成りましよと。力と付てくれた人。金借つてきやせうと進み出ると引留め。近付ん內證人も聞く。女郎の口のら金貸してと身の耻と思んずの。耻と包ひも事によるたつた今云ふたと。來月ん筑後の客が私と請出すと。出口の佐渡屋とうす約束。お前の下りと月よ星よと待ち受けたりやこんな首尾。人手へ渡れば私や生きて居ぬぞや。金借つた迎返却せば恥にもならぬ事。私次第と振切れば遣るも涙行く涙。隱して座敷へくり歩み。毛剃が傍へ座ればつと衣の香の。あたりの人んうろ〳〵と。顏と見合す荒男俄にたしなむ衣紋付。鬼が花見る風情なり。毛剃さん久しいな。私やこな樣へ無心に來た。此方に大きなものが出來て。急に身請として囉んねばならぬ首尾に。成つたれど肝心の物がない。のねん〳〵の詞も有る此方の才覺調ふせ

で。私が身請の成る程金貸して下んせ。頼みやすると云ひければ。日本一の粋さま金貸してくだんせとゝ云にくいと。二言と聞のぬ。お前の用なら千兩でも万兩でも。コヤナ亭主。小女郎様も一所に身請往きたい所へ道りまする。金ゝ毛剃がのみこんだ。女郎方の見もる内小女郎様借りました。飲めや謠へと騒ぎ立つ。マ待たんせ〳〵あの障子の彼方に。今云ふた大事の男が來て居さんす。連れて來て禮いゝせます程に。毛剃さん詞違へて下さんなと。男名利商ひ名利虚言ば座らぬ。お供なされの詞にいそ〳〵立歸る。大夫様御出と呼ゝる聲。門にうら色の摑み取。勝山江口大磯に寄せ來る波の大騒ぎ。座敷に一ばい入りこんで。湖雲さん採さんおぐらさん。三人ゝお跡のう夫りやこそおてきと色めいて。毛剃が連れども現とぬのし。顔に余念ゝなのりけり。九右衛門聲のけ〳〵亭主。爰にゝ些と用が有る。妓様方口の座敷へ。跡のう見もる太夫方も爰へゝ無用。おつと此方へ來給へと亭主に連れて立廻る。女郎も田舎ゝおんとなる。出るもいゝ出ぬもいゝ。小女郎にひられて惣七ゝ障子押開け。立出る顔と顔互に見合せ。マ小女郎が剽染の男。今思ひ出した其方がとな。マ己らに逢ひたのつた。マ人ゝないう此奴らゝ下の關の。跡云ゝせじと毛剃が連れども大聲上げ。ほうげた聞すな打殺せと。蹴立る盃燭鍋のこけて壓にだぶ〳〵〳〵。濕れうら起つた喧嘩そふな。大事にゝなるまいのと上そる女子下男。うろつく顔も青ざめて生た心地ゝなのりけり。毛剃一寸動きもせず。マ騒ぐまい〳〵此九右衛門が思案がある。彌平次。殘らず女郎衆の側へもけ跡ゝ已が受取た。いやそふでない我々が相手になる。親仁一人心元ない。マこの毛剃ひけとる男と思ふう。わいらが居れば喧しい。とつとゝ行けと睨付れば。そんなら行きます親仁次第と打連て表の座敷へ出にける。小女郎ゝ跡先知らず。惣七にひつ添ふて二人の目元に氣と配る。コレ若い人惣七殿。此中の事一言云ふても物がないぞおつしやるな。此方共の商賣云ゝずとも見られた通り。何事も身が大事と思ふうら。此中の事堪へさしやれ。いやと言ゝしやりや事に成る。マ堪へさしやれ。小女郎と此方へ請出すと此方の詞が反古になり。小女郎も可愛やこなた〳〵と心中と立て通し。女郎の口のう金貸せと迄耻と捨ての志。無にしてやらしやるゝ夫やいうひ邪見。惡い事ゝ云ふまいこちの仲間へ入らしやれ。小女郎もこなたに添せ五十貫目や百貫目の金ゝ取り換へて。親御の息がうゝらずとも物の美とに取立ましよ。仲間が多ふなるほど此方ゝ損なれど。

運と力にする商賣運弱ふてゝ埒明のぬ。此中の樣な場と免れた命冥加な運つよい此方。九右衛門が力になる人と見てコレ手と下げる。仲間へ入てくだされと詞ゝ下げても居合腰。いやと云ゝゞ切のけんづ氣色面に見へすいたり。惣七も手詰の返事仲間へ入れば家の大事命の仇。いやと云へば小女郎と人手に渡すのみならず命迄取らるゝ。いづれの道にも死ぬる命國法とや愼むべき。小女郎にや添ふべきと。二ッの心身一ッに定めのねてゞ居たりける。申これ惣七樣。彼方の商賣ゝ知らぬが。駕籠に乘る人駕籠昇く人。品ゝのれゞ行く道ゝおなじと。金も取のへ何のら何まで世話やのふとの心入。お身に惡いとでもなし。わつと云ふて仲間になり。早う私しと起臥と一所にしようとゝ思さぬの。お爲にならぬ筋ならばいやと返事と云切しやんせ。こなさんに添れねば生て居る小女郎じやない。女房にしなと殺しなといやのおふのゞ生死の。大事の返事でござんする。急く事ゝないぞやと懷に手と差し入れ。ヲ、此汗ゝいと鼻紙有りたけ拭捨る。濡れて破るゝ人の身のたしなみがたき道ぞのし。惣七はつと打頷ずき。得心致した。只今より仲間になり御指圖ゝ背くまい。承り及ぶ長崎にゝ物のゝためゝ血酒飲むとや。僞りでない惣七が心底。腕ひいて盟約と見せんと。片肌ぬげば。ヲ、見へました〳〵。人にこそよれ何の此方に僞り有ん。改めて盃ごと皆こい〳〵と呼集め。小女郎殿嬉しのろ。亭主身請の總代金何程ぞ。書付是にと指出す。追取てさらゝと讀み。小女郎殿共七人の身請代金千四百五十兩な。端金が有て喧ましい五十兩ゝ亭主に遣る。千五百兩これ受取れと。壹兩二兩の七百五十兩万目出度い仲間入。皆兄弟より他事なふなされ謠へ〳〵。れんちが在所ゝの奥山のてゝうちの。でんぐり〳〵栗の木の。木の根と枕にころび寢。此小女郎戀する山家の品物で。なまいだぶつ帶解ひて。是ぞされ抱てころび寢。ふもしろいぞと樂しみける。町の夜番遽たゞしく。人と殺め法と背いた科人が。此曲輪へ入込だと上の町のら客改め。一人も客衆外へ出るとなりませぬ。捕手の衆がはや爰へと云捨て。亭主とつれて駈出る。動せぬ自慢の九右工門はじめ六七人がぐんにやり〳〵。俄に顏色いで菜の樣に悄々と。堪らぬぞうぞ船へ行く道ゝ外にないの。金の出るにゝのまゝぬ。土の底へゝ入られず。天へ登る梯子ゝないの。隱れ簑隱れ笠がゝら欲しやと。我身一ッと片付のねて慄ひ居る。惣七小女郎が手と取つて。門口に氣と配り片唾とのんで居る所に。内の隣のぐゝた〳〵〳〵。捕た〳〵と叫く聲なふ悲しやと一

同に。腰とぬのして魂の身に添ふたるゝなのりける。亭主四郎左立腰りゞ、氣遣ひないく。此博多の殿町で飛脚殺して金取た奴。壁隣の揚屋で捕へ代官所へ引さした。此方の事でゝない〳〵と言へば一度に顔と見合。ゞ、有がたいゞ、添ない。あつたら肝と潰したと太息はつとついだるゝ。世並の惡い疱瘡に二番湯のけしごとくなり。長居ゝ無益惣七殿。京へ上ろゞゞ皆々いなふ〳〵。女郎衆ゝ駕籠で舟場まで。一口云ふても八人が亭主去らばと立出る。七人一度に身請とゝ聞きも及ばぬ大々盡。お一人びとり顔に番付張つけたい。ゞゞはりつけと聞くもぞゝがみいやゝ〳〵。お手拭のお名が顯れう。顯れるゝ猶氣がゝり。なんにも云ふなと出て行く。男自慢ゝ七人の鼻に顯れ

中之巻

市たてゝ屋財家財のくずし賣捨賣に相場なし。戸柳箪笥塗長持蝋臺椀家具反物袴。魚盤佛壇何や狩野の三幅對。表具斗りも百貫に編笠ちやうちん。なんさんの八反ゝら九反ゝ。鍋に見込の中脇差。鍋も釜もふすぼりぐゝんすも。盥も上げてゝら道具。簀子の竹のこま道具。有りとゝある物塵も灰も。猫も直打ににゝん反。五分と飛んで時鳥守本尊掛硯。鉄瓢箪も罷出で。のねになれとゝや口々に付てせる〳〵競市に。町内騒ぎ喧ましゝ。家主菱屋嘉右衛門興醒顔にて駈け來り。是ゝ〳〵狼藉千万何ごとしゝや。此家ゝ我らが貸家。主ゝ小町屋惣七といふ。西國商人夫婦づれで十日斗の逗留で大坂へ下る。跡にゝあの婆たつた一人。留主のとゝゝ家主頼みをすといひ置き。今日の明日ゝ戻られふ。お姥もお姥留主居とゝ何のためゝ是親仁。先わどりよゝ誰なればよい年として。京の町の作法知らぬゝ。町所へも斷なく人の留主に踏込。疊ぢで賣拂ひ。捌ゝなんとすると。此心清町一町のたばねとする年寄。則家主呆然と見てゐよゝ。姥も一所に詮義する隣が町の會所。ゞゞ歩びやと喚けども。姥ゝ涙に顔傾ぶけ親惣左衛門手とつゝのね。お家主と申れ年寄御尤々。我らゝ惣七めが舘。小町屋惣左衛門と申して生國ゝ長崎。廿ケ年此うた上方居住致せども。資本なければ商賣もはゝのぞらず。山科邊に逼塞いたし。故郷力に惣七めが西國通ひ致せども。仕合したとの便もなく。どうの斯うのと思ひ暮す折節。はし〳〵人の取沙汰小町屋の惣七ゝ。西國で大きに儲うけ。博多の傾城請出し。心清町に檜の木作り節なしの見世とはり。風体ゝ無人の暮しでも。内證の繁榮ゝ千貫目持と。爵する程心得がたく。夜前始めて尋ね參り沙汰に

違はぬ内の諸道具。代物にびつくう致し。姥めに向ふても詳しき樣子ハ知らぬと申す。お
のゝも商人我らも七十八まで商で喰た者。どうがへしの利なればとて儲けるにハ方圖が
有る。僅の十兩十五兩儲けてさへ。吹聽して悦ばせた正直孝行な物七め。一人の親に隱す
うらハろくな銀とハ存せぬ。後に募つてお町内お家主へも難義とかけ。其身も人並の死と
せぬ奴。今斯う致すも親の慈悲。不正の銀ハ身に附ぬと申すと。骨身に染みて思ひ知らせ
。憂しは踏んで正道の商に取付く心付んため。俄に道具屋へ走るやら古鉄買と呼ぶやら。
心急いてお町内へ無禮。お家主へ附屆け申さぬハ。まつぴら〳〵幾重にもお詫言。貸家札
出して下されませ。お家ハ明ます〳〵主りにて。下るハ臘梨頭なり。御親父の言分承り
とゞけた去ながら。物七殿にハ口合家請も有る仁。後日の念に御親父の一札。留守居の姥
も判と取る。寺會所へ同道いざ御座れと門の戸はたと引閉て。天の岩戸にあらねども爰に
も紙の貸家札。殘らぬちはや古道具明家とこそ成りにけれ。博多小女郎ハ町風に。馴し夫
の物七があぶなき分限波の上。何百里とも不知火の心つくしと過し身ハ。京大坂ハ隣にて
夫婦打連れ歸りしが。暖簾はづし大戸と締めて墨黑々に貸家札。こりや如何じやつ〳〵と云

ふより詞なく。耳門押明け入つたるに濁水と飲んだ錦釜も。憂もあげてかんこ鳥。泣くにも
泣れず興醒めはて口と開たる斗りなり。物七心ハ足の裏の疵に堪もる小笹原。貧子にどう
と座しければ。小女郎急いて是申。ゆるりとして居さんす所で有るまい。念比にする家主
殿。内儀樣と私とも親うて先度下る時にも。萱苣に大坂のみよし下駄頼むぞやとれしやん
した。夫れ程他事ない中で譯の惡い仕方。私やつきと詰開のふと。走り出ると是々々。女
子の云ふて濟ぬと貸家と云ふハ名斗り。破損家と手まへ普請横も追付張る筈で板も買置く
。家賃といへば二ヶ月三ヶ月先へハやれど滯らず。町儀付合おろのもなき身。家財迄とら
れ姥が行衛も知れぬハ。どうでも下の沙汰でなし。方々に預け置し金銀荷物についての事
の。いづれの道でも命有る内一夜も爰では明されず。こゝ是非に及ばぬ物七が運も是迄。て
りや女子ども男共。見る通の仕合力に叶ハぬ。主從の緣も是限り。大坂の遣ひ余り一歩て
まがぬ少々有り。三人寄て分て取れ隙とやる。さらば〳〵金ざらさの財布と共に投出せ
ば。お笑止共何ともお辭儀申するれ慮外。又の御緣と口上とひねつて見れば手に纏る。一
歩小判も八九兩。はつと羅耳に水くさき。半季一季の名殘なく連立表に出にけり。物音隣

へ聞もれば姥が會所と脱て來て。なふおとましや〳〵。昨日の晩のら親父樣がお出なされ。中々でもないと。淺ましい慾心に海賊の仲間に入り。道に逢ふた銀儲どけつこな事と思ひおる。木の空にひつはらるゝ今の事。菜大根肩に置ても正道な儲い三文でも。身に付くと言聞せた詞反古にして。なんで出來た屋財家財。是が我子の敵じやとおいとしぼや涙かた手に道具屋あつめ。二足三文に賣捨家もあげてその上に。隣の會所で町衆の前に畏り。何やらといり云ふたり。皆お前もへの御苦勞と涙ぐめば涙ぐみ。これ姥掛硯に入置し割符の手形。是があれば一大事入物共に道具屋の手へ渡つたう。いや〳〵掛硯は賣れたれども。其割符は殘して親父樣の鼻紙入に納めてじや。そんな事氣遣せず早う町へ退ましたい。ヲ會所のら呼そうな姥はもう往まする。命あらば御緣次第お二人共に御無事でやと歸るゞ是も名殘なる。忙然として惣七。親父の耳へ入るのらい。世上に知れたに極つた。四日市にい思ひ寄る方も有る。伊勢路へ向けて遁るゝだけは遁れて見ん。最う七ッに下つた。ナヲ用意と云ふ所に。惣七宿にの早い門のさし樣と。耳門と明けてつゝと入るい毛剃九右衛門。惣七ちろたへゝ珍らしい何と思ふて。先々是へと煙草盆持てこい。茶もて來いよと云ふ程九右衛門うさん顏。獸りや〳〵惣七大坂で逢ふたい四五日まへ。退付登る京で逢ふと言合せ。こりや宿がへと見へた。何としたしだらで何方へ立退やる。氣遣なりと云ひければ。イヤ〳〵氣遣などでない。たつた今登つてまだ洗足も遣いず。老体の親別住居もいな物と。一所につぼむ談合で諸道具と引くやら。取込んだ最中旅宿はどこぞ其中こちらら便宜せう。休んでいきやと出んとす待ちや〳〵。ヲさよろ〳〵と夫婦ながら飲込ぬそぶり。これ頓で商賣時分こちも明日國へ下る。仲間中のら預けた島の割符受取に來た。其割符と渡していきや。ヲ、いのにも〳〵其割符は大事にのけ。箱に入れ封と付け親父に預けた。退付是のら持せて遣らふと。云ふより九右衛門色とのへ。三千里と股にのける此仲間。命がへの割符と親父に預けたとい。何處へうまいと云ふな〳〵。仲間と脱けて獨儲しようでな。音沙汰なしの俄宿がへとてうど算盤があふた。此割符は其肌に付て居る。知れたと受取て見せうと。大戸耳門の鈎鉄樞確と閉てのし上れば。小女郎遽てこれ九右衛門樣。魚と水とのお仲間なんの虚がござんしよ。此割符は二三日中私が急度渡しましよ。先歸つて下さんせと。押出す小腕むずと取り。ヲ、めんだう事と賀子にどうと投つくる。卑怯な女と痛

めずとも。云ふとは身に云へと脇差に手とのくれば。ヤ反と打て嚇しても割符と取らずに置ふのと。ずばと拔ば惣七も飛退つて拔合せ。兩方腕は狂いねども繩目も弱き古賣子。まばら朽たるしのべ竹。踏ん込ひ足と踏とめて。右へ拂へば左へのぶり。左と切れば右とふん込。打合ふ切先春の日に解やく氷踏むごとく。小女郎は中に身と捨る掃溜の鍬箒。持てひらいて相手の刄物打落さんと立廻る。裙と簪子にしがらみて。のつはと轉ぶ頭の上ひらめく刄ぞ危けれ。あたり隣に聞付ても恐れてわざと知らぬ顔。堪りのねて惣左衛門何と云ふも子の可愛さ。割符と渡す負傷すなと。表へ廻り門の戸と。押せども叩けども明くにこそ。穉の穴のら覗いていふ〳〵悲しや危なやと。もがいて裏へ駈け廻る。内にい小女郎障子とはづし中の楯。相手の刄物と押へんと。前にふさがり後に開き。隙間と見て打つくる。足踏みためず障子と我身に負ながら。どうと伏せば九右衛門すのさすのくるのた足と。がばと踏んでみ小女郎が上に重なり伏し。障子越に突んとす。突たら已一打と。上にさらめく惣七が切先危うさ中の危うさなり。親い憧がれ隣の壁打こぼち〳〵手の出る程に壁下地引破り。割符と出しひらめのす親の手態の物云ふ計り。惣七きつと見つけ。ヤイ九右衛門聊爾すな。割符渡す言分有るまい。此方もさす。ヤア指せと鞘に納めて眼前に。助うる命も親の慈悲と手共に取て押頂だき〳〵。是々慥に受とれと。渡せばとつくと見屆け。ヤ、別條ない受取たこれ惣七。互ひに命がけの身過。魂と磨く仲間の法。切結んだ劒の下のら睦ましう成るも魂。意恨い殘らぬ氣苦勞の有る顔色じや。山が崩れのゝつても。狽狽ぬ心持たねば此商賣はならぬと。例の時分に又くだりや。國で逢ふと暇ごひ出て行くこそ肝太けれ。惣七小女郎と引起し。今のと見ての忝ない。親の慈悲此壁の崩とせめて拜みやと泣さければ。ヤ、有がたい御恩德慈悲心と受ながら。壁一重彼方の舅御の面体見ることも叶いぬのゝへく息切れて物いはれぬ。水でも湯でもと苦めども。茶碗一ッ杓一本あら氣の毒何としよと。云ふ聲隣に響き入り。茶碗に溫湯壁越に。情の親の手態と見て。ヤ、冥加ない有がたいと夫婦わつと泣出し。茶碗に絶り手に絶り。お盃とも藥とも氏神の御神酒とも。此上の有るべきのと二人頂き飲換し。申お手いとれどもお顔い知らぬ。私いお免なければお前の嫁。どうぞ御機嫌直して惣七樣とも詞と交し。一期の見始見納めにお顔と拜せ下されと。舅の手と我顔に押あて〳〵泣く涙。親の悲歎も現れて腕振ふぞ哀なる。盡させぬ涙の手と振放

し。銀財布一ッ投出し。早う出て往け〳〵と云ぬ計りに門の方。敎もる手さへ引入るれば今ゝ親よ舅よと便る名殘も切れたるのと。又絶へ入て泣さけるが。ナフ不孝至極の惣七に是程のお慈悲。路銀迄下さるゝお心背くゝ猶不孝と。財布と女夫が頂だき〳〵。はや人顏も見へまい是が本の名殘じやと。互ひに身用意裾引あげ泣く〳〵表に出けるが。隣の門とはるのに見入れ。ヤレ姥たゞ一目親父樣と小女郎に見せてくれ。路銀のお禮も申たいと小聲に云ふも聞きつけて姥が出れば惣左衛門。こりや姥何ととぼ〳〵する。今の銀ゝ隣の道具賣つた銀。すぐに隣へ投こんだ禮受ける筈がない。惣左衛門が子供にゝ商賣こそ敎へたれ。非道の身過する子ゝ持ぬ。淺ましや不便や天道も日月も。神も佛も罰ゝあてゝなされねど。此方のら罰の下へあたりに往とゝ知らぬのや。生身にゝ餌食有り人間一人生るれば。乳房と云ふ天道の御扶持方。正道の家職勤むれば分限相應〳〵の。天の乳房が備ゝる。正道にない金儲け。榮耀するやうなれど天道の乳首に離れ。三界の捨子と成り野倒死するゝ幾人の。猫ゝ火燵に寢臥する犬ゝ土邊で物喰へど。火燵な猫の眞似せぬゝ。身の分量と知つたるもへ。畜類に劣つた身の程知らず。なれの果と思れ不便さに腹がたつわいやと。包みのねたる涙なり。ヤイ惣左衛門が子に成りたくば。手鍋提げても正道に。淺ましい死とせぬ樣に。命まつたふ何とど親と先に立て。惣左衛門が葬禮に喪服と着て供して見せ。其時ゝ我子じやと棺の中のら悅ぶ。早ふ失ふと斗りにてわつと泣入り泣く聲の。耳に殘ると形見にて別れ行くこそ

下の卷　惣七小女郎道行

懇と小袖ゝ一摸樣。身に引しめて合てこそ。寢心もよく着心もよく。よく〳〵見限果てられて追出されし我宿の。あたりに顏と見られしと。戸口も見世も明けやらぬ。星も夜深さ親の恩重ねて着たる其時ゝ。いとゞ心も輕のりし。今朝肌うすく行く道ゝ。肩脊くるしき身の行衛。心がらとゝ云ひ乍ら。情なじみの京の町。三條小橋で知る人に栗田口のと思ひしも。先へ心の關寺に身の衰微の耻のしき。今の小町屋惣七ゝ。博多小女郎がならし竹いつも心に掛て置く。親のゐいきに綾にしき。もはや都と見んとも。又と成るまい限りと云へば。共に泣く〳〵うき黑繻子の。糸の切れざる辨がら縞の。愚痴なさら〳〵そふでゝないに。らしやもないと云ゝしやりんすな。先へ行く子に尋ぬれば。扱參宮のゐしら字が耳

に留まる神心。守り給へと再拜の袖に神樂の鈴鹿山。八十瀬の川に濡初し。已と和女が初戀に。二世も三世ものいらじと登りつめたる坂の下。今落魄の身と知らば。さつと淺黄に染ふもの。うら表ない心のうら僞紫の色わるふ。憔れ顏見る悲しやと絞る袂の涙の露。野邊の草葉も色付ぬ。泣て心とみだせとの。方樣ならで。頼む博多の小女郎がなくば。世帶の花もちりめんと。こんな姿に爲まいもの。ぬめまぼろしの此世のう。未來〳〵も夫婦ぞと。縋り付でぞ泣居たる。關のお地藏ん親よりましと聞くなれど。まさらぬ此世の見御の。横嫌直して給れと頼みと直に救ひ乘せ。共に助のる駕籠昇の。駕籠遣りませふと歩みくる。尾張へ行く者先の宿ぞで駕籠賃いくら。石藥師までん道ん二里有る駕籠賃ころり。ころりん知らぬ知らずば錢百。それん高い負けて行きましよ。七十〳〵。よいん負けたと駕籠下す。道ん一筋駕籠二挺。兩人思ひと抱き乘せて。打見るよりん肩重く。小川じやそこせい肩せいまつのせ。杖つき坂小谷大谷打過て。日影も我も行く空の末果てしなき旅衣。昨日今日とん思へども。都と出て日數さへ。四日市にも程近き迫分にこそ着にける。まさしのれと心中に頼みとのけし辻占の。駕籠昇が詞のはづれ惣七が胸にこたへ。のゝらぬ縄に氣と縛られ向の人ん下れども。我が心のう身とすくめ。ふりもやらずコレ小女郎。先和女のう乘換て先へ行きや。左樣ならお先へ參ります。四日市とやらで待つて居よ。駕籠の衆早う連れましてやと。おりゐの駕籠の河合村。小女郎ん何の氣もつのず駕籠に任せて乘めへ行く。石藥師のう來る駕籠の者聲のけて。女中の連衆乘せた駕籠ん これの。うちも聞た駕籠換よい。おつと幸いナたてい。旦那殿換へまする。おりて下されと駕籠の簾と打上ぐる。相手ん駕籠とはやおりて提げたる風呂敷つゝみ。身輕い出立の袷股引桃牙脚絆に身とのためめ。腰に早縄見るのうらぞつと惣七が。余所見る顏ん我顏と見せじと忍ぶ頬のぶり。心ばやにおり立て駕籠の衆太儀と乘のもる。駕籠の簾我手に取て引おろし。急ぎの者じや增やらふ。ナヲ駕籠遣つたと云ふ聲ん人の耳にも振ひけり。小町屋惣七捕たと聲と打のける。駕籠により芋の細引綱。中に是ん と蹴けども翼なければ飛れもせぬ。駕籠の鳥のや惣七ん。中に音と泣く牙りなり。豫て相圖の小屋の者十手引提げくる〳〵と追取まき。科ん心に愛へがあらふ。其方共に仲間八人と分明の仰と請け。我々捕に向ふたり。尋常に召捕るゝう。」踏付て縄のけふのと云へ共念佛の聲の外。何の答もわらざれば。爰ん途中次の宿ぞで此儘

連行き。縄のけて國へひけ。それ駕籠やれ心得さした。迎も通れぬ命じやに爰で縄とのゝらいでと。つぶやき〳〵立寄て。駕籠舁さ上ればがば〳〵と。駕籠のら漏れて流るゝ血ゝ大地に毛氈引くごとく。乘人ゝうん〳〵喚くにぞ。やれ駕籠の内で自害した。出合へ〳〵と駕籠投げ捨て恐れて傍へ寄り付ず。役の者共立ゐゝり網引のけ。籠あぐればこゝいのに。一尺五寸切刃ぎゝまで突込で。刃先ゝ弓手の脇腹に虫の息眠ゝざろ〳〵。悶れて詮方なうりけり。」斯る所へ小女郎が身にもゐゝつた縛り縄。引れて來る身の悲しさより此有樣と見る悲しさ。流れし血汐ふみしだき。駕籠の内へ顔さし入れ。小女郎が來ました私も今縛られた。縄のゝりさしたぞや。夕迄も一ッ枕に起臥て。一所と契り交したに。こなん一人が先立て生存へ物と思へとか。苦しうござろじもつないうと。云ふも涙に搔きくれて前後も覺へず泣き居たり。惣七苦しき眼と見ひらき。ヤ、縄ゐゝつたゐ小女郎。國法と破り親に不孝の大悪人。廣い世界にせばめられ。所の住居もならぬ樣に身と持なし。落付く方なく當迄なく此所迄迷ひ來て。天の網地の縄に搦められし此惣七。故郷へ引れ死罪に逢ゝゞ一門の類に血とそゝぎ。親ゝゝ不孝の上塗と思ひ定めての自害。毛剃九右衛門が海賊に組し

今迄身に纏し縮子縮緬。和女に着せた綾錦の冥加につき。鷹のぶる身に成り果た。夫に連るゝならひ迎和女まで縄とのけ。名と流させ憂目と見するゝ我一心より事起る。此惣七が無りせば今の憂目ゝ見せまい物。不便や嘸悲しろろ。永くも添ぬ物ゆへに命のゐい迄なしたよな。免してたもれ小女郎と。云ふ聲もはや息ぎれし。頼みすくなに見へにける。するゞく見もる捕手共。獄屋へ渡していゝ叶ゝぬと人ゝ互。兩方名殘惜ませよと了簡するこそ優しけれ。聞けば聞く程猶悲しく。其起りゝ誰がさすぞ。小女郎と人手に渡すまいとのふ心のら。親にこうへ命に換へ女房に持て下されし。其はゞ私が可愛ゐ。冥加ないとも添ないともお前に禮と云ふ詞。日本ゝおろゐのなと唐土天竺にもよも有るまい。此手が自由に成るならば。拜んで死とふござんすと。夫の膝に顔さしよせ。消入り絶入り咽せ返れば此世で逢ふゝ今計り。來世もゐゝらぬ女夫ぞや。南無阿彌陀佛彌陀佛の。聲も微のに脇差ぐつと拔くより早く息絶たり。小女郎わつと聲と上。待て下され連立たい。遲いのといゐ殺さるゝ我命。皆樣お慈悲に今爰で殺して下され殺してと。狂ひわなゝゐ駈け廻る。斯る所へ撿非違使の何某ゐつ先立。爰彼處にて召捕たる海賊原。傾城交り縄付共一度に彼處へ引來

たる。撿非違使一札押開き。囚人共に申し聞する趣有がたくも承れ。一沖がゝりの大船に通路ともとめ。浪とくゞり水底とぬけ。舟へ近付諸色と奪ひ取し事。國法と背く大罪。武士に仰せて死罪有るべき處。當今御即位の御悦びに依て。死罪一同と勅免なると。聞さも果す縄付きも。蘇生たる心地して一度にあつとぞ勇みける。重ねて領城ぐもに打向ひ。汝らゝ流れの身。彼奴らに添ふゝ勸めのならひ科にあらず。行く先迚も捕ひなし。縄と免せと有りければ畏つて雜式共。立寄りはぐく縄の跡吹さすり撫さすり。王様のいさのたゝ又格別な物じやないの。此手が自由になつたれば曲輪の門と出た様なと。笑ひ悦ぶ其中に小女郎ゝ始終しく〳〵涙。止め兼たる顔ふりあげ。連合の惣七殿斯る御慈悲と待受ず。私と捨て此世彼世へ飛び去りて。比翼の鳥の片羽がい今がはうたの此小女郎。生て甲斐なき命ぞや。お慈悲に殺してたべのふと聲も惜まず泣居たる。ゝ、尤々。夫惣七同類とゝ云ひながら。色に迷ひし若氣の至り。罪の輕重明白たり。自害せしい其身のふじやう汝夫に成ゝいり。親惣左衛門に孝行盡くし後世と吊び得さすべし。勅に任せ彼奴ばらろれ追拂へ。重ねて惡事ととめ炙の。顔に燒がね入墨。耳、そぐ鼻そぐ血みどろちんがい追拂ふ隣國他國萬

人博多小女郎が物語。語るも聞くも後代の永き噂と殘しけり

博多小女郎浪枕終

紙屋治兵衛
紀伊國屋小春

天の網島

近松門左衛門作

さん上ばつのらふんごろのつころちよころふんごろで。まてとつころわつのらもつくるく〳〵。誰が笠とわんがらんがらす。空がくんぐる〳〵も。れんげ〳〵ればつのらふんごろ。妓が情の底深さこれのや戀の大海と。替へも干されぬ蛇川。思ひ〳〵の思ひ唄。心が心留むるは門行燈の文字が席。浮れ忽行の仇淨瑠璃。役者物眞似なやれ唄。二階座敷の三味線に曳れて立よる客も有。紋日過れて顏隱し仕過しせじと忍び風。伸居のきよが是と見て三保の谷が着たりける。頭巾の鍛と取外し〳〵。二三度逃延たれ共思ふ嫖客なれば通さじと。飛懸り揉り惡酒落。でんせと止たる女景清鍛と頭巾。ついふみ冠る客も有。橋の名さへも梅櫻花と揃へし其中に。南の風呂の浴衣より今此新地に戀衣。紀の國やの小春とは此十月に仇し名と世に遺せとの兆のや。今宵は誰の呼子鳥。慶東なくも行燈の影もさ遣ふ妓の立蹄。ヤ小春樣の何といの互ひに一座も打絶。貴面ならねば使も聞て。氣色がわるいの顏も細り窶れさんした。誰やらが咄しで聞ば紙治樣もへ。內のち數度客の吟味に遇んし

て。何處へもむざと送らいの。いや太兵衛樣に請出され。在所とやら伊丹とやらへ往のんすはゞ共聞及ぶ。何樣で御坐うやすと言ければ。ア、もう伊丹〳〵と云ふて下んすな。夫で病入ばいな。最惜なげに紙治樣と私しが中。左程にもあい事と。あの誘口の太兵衛が浮名と立て云散し。客といふ客は退果。内のらは紙屋治兵衛殺じやとせく程に〳〵、文の便も吁はぬやうに成やした。不思議に今宵は武士衆と河庄方へ送らるゝが。斯往く道でも若し太兵衛めに逢ふのと。氣遣さ〳〵緞持同前の身持。なんと其邊に見へぬのへ。ヲヽ〳〵夫ならちやつと外さんせ。あれ一丁目のらなまいだ坊主が。惡戯念佛申て來る其見物の中に。のんこに髮結て野良らしい。伊達衆自慢と云そな男。慥のに太兵衛樣のと見た。あれ〳〵爰へと。云ふ間程なく炮碌頭巾の青道心。墨の衣の環襷見物ぞめきに取卷れ。鉦の拍子も出合ぢん〳〵。ほでてん〳〵ど念佛に仇口噛交て。樊噲流は珍らしのらず。門と破るは日本の朝比奈流と見よやとて。貫木逆茂木引破り右龍虎左龍虎討取て。難なく過る月日の關や。なまみだなまいだ〳〵〳〵。迷ひ行共松山に似たる人なき浮世ぞと。泣つゝ〳〵ワハ〳〵〳〵。笑ふつ狂亂の身の果何と淺猿やと。芝と褥に伏けるは眼も當らぬ風情。なまみだなまいだ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。ゑい〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵紺屋の德兵衛。房に原來淚染込の。内の身代灰汁でもはげず。なまみだなまいだ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。ア、是坊樣なんぞ。ヱヽ忌々しい漸々此頃此廓の心中沙汰が鎮つたに。夫れいて國姓爺の道行念佛が所望じやと。杉が袖のら報謝の錢。たつた一錢二錢で三千餘里と隔てたる。大明國への長旅は。あはぬだ佛あいぬだ〳〵〳〵。ぶつ〳〵云ふて行過る。人立紛れにちよこ〳〵走つゝと河内屋に駈込ば。是は〳〵早いお出お名さへ久しう云なんだ。やれ珍らしい小春樣〳〵はる〳〵で小春樣と主の花車が勇む聲。是門へ聞へる高い聲して小春〳〵と云ふて下んすな表に否な李韜天が居るわいの。密のに〳〵願みやすと云ふも洩てやぬつと入たる三人連。小春どの李韜天とはない名と付て被下た。先禮のら云ましよ。連衆内〳〵咄した心中よし意氣方よし床よしの小春どの。頓て此男が女房に持の。紙屋治兵衛が請出すの。張合の女郎近付に成て置やと跋扈よれば。ヱイ聞共ない得知れぬ人の仇名立。手拍にならば精出して云はんせ。此小春は聞共ないとついと退けば又摺寄。聞共なく共小判の樣で聞せて見せう。貴さまもよい因果じや。天滿大坂三鄕に男も多いに。紙屋の治兵衛二人の子の親。女

房は徒弟同士姑は伯母聟。六十日〳〵に問屋の仕切にさへ追るゝ商賣十貫目近い金出して請出すの根曳のとゝ。蟾蜍が斧で御座る我ら女房子なければ。姑なし親もなし伯父持ず。身すがらの太兵衛と名をとつた男。色廓で潜上云ふ事は治兵衛奴には叶はぬ共。金持た斗は太兵衛が勝た。金の力で押たらばなふ連衆。何に勝ふも知れまい。今宵の客も治兵衛奴じや貰と〳〵。此身すがらが貰ふた花車酒出しや〳〵。ヱ何おしやんす今宵のお客はお武士衆。押付見へましよお前は何處ぞ他で遊んで下さんせと。云共はたへた顔付にて。ハテ刀指の指ぬの武士も町人も客は客。何程指ても五本六本は指まいし。よふ指て刀脇差たつた二本。武士ぐるめに小春殿貰ふた。扨つ隱つ成れても縁有ばこそお出合申すなまいだ坊主のれ蔭。アヽ念佛の功力有がたい。こちも念佛申すぞや鉦の火入煙管鐘木面白い。ちやん〳〵ちや〳〵ん。ゑい〳〵〳〵〳〵。紙屋の治兵衛小春狂ひが杉原紙で。一分小判紙塵々紙で。内の身代滝破紙の。鼻もゝのまれぬ。紙屑治兵衛。ヱなまみだ佛なまいだ。なまみだ佛なまいだ〳〵〳〵と。暴亂狂く門の口八目と忍ぶ夜るの編笠。ハアヽ塵紙わせた。ハテきつい忍びやう。何故這入ぬ塵紙。太兵衛が念佛怕くば南無編笠も貰ふたと。引ずり入れたる姿と見れば。大小撲素だ武士の正眞。編笠越にぐつと睨たる。眞丸眼玉は敲鉦念共佛共出ばこそ。ハアヽと云共痰まぬ顔。なふ小春殿此方は町人刀差いた事いなければ。已が所に澤山な新銀の光りにゝ。少々の刀も捻曲めふと思ふ物。塵紙屋奴が漆漉程な薄元手で。此身すがらと張合ふゝ慮外千万。櫻橋のら中町下り忽行いたら。何處ぞでい紙屑蹂躙つてくりよ。皆おじや〳〵と身振斗ゝ男と磨く。町一ばいにはぐこのつてこそ歸りけれ。所柄馬鹿者に擯ゝす堪る武士の客。紙屋〳〵と善惡の噂小春が身に應へ。思ひ顔れ恍惚と無挨拶なる折節。内のら走つて紀伊國屋の。杉が氣疎顔付にて。只今春樣送つて參りし時。お客樣まだ見ねずなぜ見屆けて來なんだと。酷う叱られ升慮外ながら一寸と。編笠押上面体吟味。ムヽ夫でない〳〵氣遣なし。跡詰てしつぱりと小春樣。したゞる樽の生醤油花車樣さらば後に青柴の浸し物と。口合たら〳〵立歸る。至極聖出の武士大きに無興し。こりや何じや。人の面と目利するゝ身と茶入茶碗にするこの。嬲れにゝ來申さぬ。此方の屋敷ゝ書さへ出入のたく。一夜の他出も留守居へ斷り帳に付。六ゝの數掟なれ共お名聞て戀慕ふお女郎。何樣ぞと一坐と願ひ。小者も連ず先刻參つて宿と賴み。何でも一生の思ひ出お情

に預らふと存じたに。いのな莞爾と笑顔も見せず。一言の挨拶もなく懐中で銭よむように扨々伏向て斗。首筋が痛ん致さぬの何と花車殿茶屋へ來て産所の夜伽する事ん。竟にないづと諡諒ば。れ道理々曰と御存じない故御不審の立はづ。此女郎にん紙治様と申す深いお客がござんして。今日も紙治様明日も紙治様と。他のら手指もならず外のお客ん嵐の木の葉ではら〳〵〳〵。登り詰てんお客にも女郎にも泥て怪我の有物。第一勤めの妨とせくん何處しも親方のならひ。夫故のお客の吟味自然と小春様もお氣の浮ぬん道理。お客も道理〳〵〳〵の中取て。主の身なれば御機嫌よこれが道理の肝賢肝文。サアはつと呑のけわさ〳〵わつさり頼升。小春様はる様と。云共何の返答も涙ばろりの顔振上。あのお武士様同じ死ぬる道にも十夜の中に死んだ者ん。佛に成と云ひ升が定のいな。夫と身が知る事の旦那坊主にお問なされ。眞に左様じや夫なら問たい事有自害すると首くゝるとん。必定此喉と切のたが澤山痛いでござんしよの。痛むの痛まぬの切てん見ず大方の事問んつしやれ。アゝ小氣味の悪い女郎じやと。流石の武士もうてぬ顔。エゝ春様初對面のお客にあんまりな挨拶。些と氣と替ぎりや此方良人尋て來て酒にせふと。立出る門ん宵月の影傾ふきて雲のわし人足薄く成にけり。天満に年ふる千早振る神にんあらぬ。紙様と世の鰐口にのる斗。小春に深く大稜麻の腐り合たる御注連縄。今ん結ぶの神無月。せのれて逢れぬ身と成果。われん逢瀬の首尾あらば夫と二人が最期日と。名殘の文の云のんし毎夜〳〵の死愛悟。魂抜てとぼ〳〵忙々身と焦す。煎賣屋で小春が沙汰武士客で河庄方と耳に入より。サア今宵と覗く格子の奥の間に。客ん頭巾と顔のいでく斗に聲聞へす。可愛や小春ん燈に背向た顔のあの痩た事ん。心の中ん皆已がこと愛に居ると吹込で。連て飛なら梅田の北野のエゝ知らせたい呼たいと。心で招く氣ん前へ身ん空蟬の脱殼の。格子に抱付わせり泣。奥の客が大叱。思ひの有女郎衆の御伽で氣がめいる。門も静な端の間へ出て行燈でも。見て氣と晴そふ。サアでざれと連立出れば。南無三寶と。格子の小陰に肩身とすぼめ隠れて聞共内にんしらず。なふ小春殿宵のうちの素振詞の端に氣と付れば。花車が咄の紙治とやらと心中する心と見た違ふまい。死神付た耳へん異見も道理も入まじとん思へ共。去とん愚痴のいたり先の男の無分別ん恨ず。一家一門其方と恨み憎しみ。万人に死顔晒す身の恥し親ん無のも知らね共もし有ば不孝の罰。佛ん愚の地獄へも暖のに二人連でん墮られぬ。痛

敷共突止共一見せから武士の役見殺しにハ成がたし。定て金づく五兩十兩ハ用に立ても助たし。神八幡侍冥利他言せまじ心底殘さず打あけやと。嚇ば手と合せ。アヽ忝けない有がたい馴染よしみもない私。御慥言での情のお詞涙がこぼれて忝けない。ほんに色外に顯るでござんする。如何にも〳〵紙治樣と死ぬる約束。親方にせのれて逢せも絶指合有て今急に請出す事も叶ハず。南の元の親方と爰とにまだ五年有る年の中。人手に取れては私は素より主は猶一分立ず。いつそ死で呉ぬの。アヽ死にましよと引にひのれぬ義理詰に風と言替し。首尾と見合せ相圖と定め扱て出やう扱て出よと。いつ何時と最期共其日送りの敢ない命。私一人と鰯の母樣。南邊に賃仕事して裏家住。死んだ跡では袖乞非人の飢死もなされふのと。是のみ悲さ私とても命は一つ。水臭女と思召も恥のしながら。其恥と捨て死に共ないが第一。死なずに事の濟やうに何樣ぞ〳〵鰯やすと。語れば點頭く思案貌。外にハいつと聞慧く思ひがけなき男心。木のら落たる如くにて氣もせき狂ひ。扨は皆嘘のヱヽ腹の立二年と云ふ物化された。根生腐りの狐め踏込で一討の面恥のゝせて腹ゐようと。齒切きり〳〵口惜涙。内に小春が嘶ち泣。臆性な飆み事ながらお武士樣のれ情。今年中來春二三月の頃迄私しに逢ふて下んして。彼の男の死に來る度毎に邪魔に成て。期と延し〳〵自のら手と切ば。先ず殺さず私しも命助ゐる。何の因果に死ぬる契約し死事ぞ。思へば口惜ふでざんすと膝に凭れ泣く有樣。ムヽ聞屆けた思案有風も來るハや見ると。格子の障子ばた〳〵と。立聞治兵衛が氣も狂亂。エヽ流石賣物安物め。奴性骨見違へ魂と奪はれし巾着切め。切ふの突ふのゞふ障子に寫る二人の横貌。エヽ打擲たい踏たい。何吐すやら點頭合拜ひ嗤く哮るざま。胸と押へ摩つても堪へられぬ堪忍ならぬ。心もせきに剛の孫六一尺七寸扱放し。格子の挾より小春が脇腹。爰ぞと見極めゐいと突に座は遠く。是はと斗り怪我もなく透さず客が飛のゝり。兩手と攫んでぐつと引入刀の下緒手ばしりく格子の柱にがんじ搦み腕のと締付。小春騒ぐな覗くまいぞと。云ふ所に亭主夫婦立歸り是はと驚けば。アヽ苦くない障子越に扱身と突込暴亂者腕と障子に括り置く思案有繩解な。人立あれば所の騒ぎサア皆興へ。小春おじや往て寐やう。あいとゝ云へゞ見しり有脇差のつのれぬ胸にはつと貫き。醉狂の余り色廓には有ならひ。沙汰なしに往なして遣らんしたら。ナアア河庄さん私よさそうに思ひやそ。いのな〳〵身次第にして皆這入や。小春こちへと奥の

間の影は見ゆれど縛られて。格子手がせに悶焦ば締り。身は煩悩に繋るゝ犬に劣つた生恥と。覺悟極めし血の涙しぼり泣こそ不便なれ。忽行戻りの身すがら太兵衛。扨てこそ河庄が格子に立たゝ治兵衛めな。投て呉んと襟ゐい握で引搦ぐ。あいたゝ。あいたとゝ卑怯者。ヤヤこりや縛付けられた。扨ゝ盗ばざいたな。ヤ活掬賊め胴掏賊めとてゝ磊と打擲。ヤ頑盗めヤ梟首めとては蹴飛ゐし。紙屋治兵衛盗して縛れたと呼ゝり喚けば。行通ふ人。邊近所も駈集まる。内より武士飛で出盗人呼りゝ汝の治兵衛が何盗んだ。サア吐せと太兵衛と搔攫み士にぎやつと令偃せ。起れば踏付踏のめし〳〵引捕て。サア治兵衛踏で腹いよと。足元に突付ると縛れながら頬車。踏付〳〵踏さがされて土塗れ立上て睨まゝし。四邊の奴輩よふ見物して踏せたナア。一々に面見覺へた返報する覺へてとれと。へらず口にて逃出す立寄人々をつと笑ひ。踏れてもあの顴橋のら投て水食せ遣な〳〵と追駈行。人立すれば武士立寄て縛めとき頭巾取たる面体。ヤア孫右衛門殿兄者人。アッア面目なやと。どうと座し土に平伏泣ゐたる。扨ゝ兄御様のいのと走り出る小春が胸ぐら取て引居へ。畜生め狐め太兵衛より先うぬと踏たいと足と上れば孫右衛門。ヤィ〳〵〳〵其愚鈍のら事起る。人と聽すゝ遊女の商寳今目に見へたゝ。此孫右衛門ゝ只た今一見にて女の心の底と見る。二年余りの馴染の女心底見付ぬ狼狽者。小春と蹈足で狼狽た自己が根生となせ踏ぬ。エヽ是非もなや弟とゝ云ひながら三十に押掛り。勘太郎おすゑと云ふ六歳と四歳の子の親。六間口の家踏しめ身代潰るゝ辨別なく。兄の異見と請ることの勇は伯母聟。姑ゝ伯母じや人親同然女房おさんは我爲にも從弟。結合々重々の縁者親子中。一家一門參會にもおのれが曾根崎通ひの悔みより外余の事ゝ何もない。最愛ゝ伯母者人連合五左衛門殿ゝにべもない昔人。女房の甥子に倒され娘と捨たおさんと取返し。天滿中に耻ゐゝせんとの腹立。伯母一人の氣扱ひ敵に成味方に成。病に成程心と苦しめおのれが耻と包まるゝ恩しらず。此罰たのた一ッでも行先に的が立。斯てゝ家も立まじ小春が心底見屆。其上の一思案伯母の心も安めたく。此亭主に工面しおのれが病の根元見屆くる。女房子にも見變しゝ尤も。心中よゝの女郎ァゝお手柄結構な弟と持。人にも知られし粉やの孫右衛門。祭の練衆の狂亂の竟に差ぬ大小ぼつこみ。藏屋鋪の役人と小詰役者の眞似として。痴と盡した此刀捨所がないいやい。小腹が立やら可笑やら胸が痛いと齒恕し。泣貌のくす皺面に。小春ゝ始終噎

咽り皆お道理と斗にて。詞も涙にくれにけり大地と叩て治兵衛。誤つた〳〵兄者人三年前よりあの古狸に見入られ。親子一門妻子迄そでになし身代の手縄れも。小春と云ふ鑽倉賊に賺され後悔千万。ふつゝり心殘らねば尤も足も蹈込やと。ヤイ狸め狐め鑽倉賊め思ひ切た證據是見よと肌に掛たる守袋。月頭に一枚宛取換したる起請合せて廿九枚。戻せば戀も情もない是や受取と礑と打付。兄者人彼奴が方の我等が起請數改ため請取て。貴方の方で火に爇て下され。サア兄貴へ渡せ。心得やしたと涙ながら投出す守袋。孫右衛門押開き。ひいふうみいよ十廿九枚數揃ふ。外に一通女の文是や何じやと開く所とアゝそりや見せられぬ大事の文と。取付と押退け行燈にて上書見れば小春様參る紙屋内さんより。讀も果す左有ぬ顔にて懐中し。是小春最前は武士冥利今は粉やの孫右衛門商買冥利。女房限つて此文見せず我一人披見して。起請非に火に入る誓文に違ひない。アゝ丞けない夫で私が立ますと又伏しづめば。ハア〳〵〳〵うぬが立の立ぬとは人がさしい。是兄者人片時も彼奴が面見ともなし。いざ御座れ去ながら此無念口惜さ何様もたまらぬ今生の思ひ出女が面一ツ蹈御免あれと。つゝと寄て治郎太踏ェ〳〵。しなしたり足のけ三年戀し床しも最愛可愛も今日といふ今日只た。此足一本の暇乞と額ぎゝとはつたと蹴て。わつと泣出し兄弟連歸る姿もいた〳〵敷。哀と見送り聲と上げ歎く小春も苛らしさ。無心中の心中の眞の心い女房の其一筆の奥深く。誰文も見ぬ戀の道別れてこそは歸りけれ

中之巻

福徳に天滿神の名と直に天神橋と行通ふ所も神のお前町。營む業も紙店に紙屋治兵衛と名ど付て。千早振程買に來るのみゝ正直商賣ゝ所がらなり老舗なり。良人が巨燵に轉寐と祝屏風で風ふせぐ。外ゝ十夜の人通り見世と内と一締に女房ふさんの心配り。日ゝ短うし夕飯時市の側迄使にいて。玉ゝ何して居る事ぞ此三五郎めが戻らぬ事。風が冷たい二人の子供が寒のらふ。お末が乳の呑たい時分も知ぬ。阿房にゝ何が成辛氣な奴ぢやと一人言。母様一人戻つたと走り歸る兄息子。チゝ、樹太郎戻りやつたのお末や三五郎ゝ何とした。宮に遊んで乳呑たいとお末のたんと泣やりました。左様こそ〳〵こりや手も足も釘になつた。父様の寐て御座る巨燵であたつて暖まりや。此阿房めぬふせふと待兼見世に駈出れば。三五郎只一人のら〳〵として立歸る。こりや愚鈍お末ゝ何處に置て來た。アゝほんに何

處でやら落してのけた。誰ぞ拾たおしらん迄。何處ぞ尋て來ませふの。おのれさあ〳〵大事の子と怪我でも有たら抑殺すと。喚く所へ下女の玉お末と呑なのに。れふ〳〵最愛や辻に泣て御座んした。三五郎守するならろくにしやと。喚き歸へれば。ヲヽ可愛や〳〵乳呑たのらふのと。同じく巨燵に添乳して。是玉其阿房め憂へる程打擲しや〳〵と云へば三五郎掉頭。いや〳〵たつた今お宮で密柑と二ッづゝ食ゐせ。私も五ッ食ふたと。阿房の癖に輕口だて苦笑するばのうなり。ヤ阿房にのゝつて忘りよとした申ふおさん樣。西の方のら粉やの孫右衛門樣と。伯母御樣伴立てお出なされます。是ゐ〳〵夫なら治兵衛殿起そのふ。旦那殿起さしやんせ。母樣と伯父樣が伴れ立てござるげな。此短のい日に商人が盡中に寐た振と見せてゐ又機嫌が惡ものらふ。おつとまのせとむつくと起。算盤片手に帳引寄二一天作の五くつちんがさつちん。六ちんがにつちん。七八五十六に成伯母打伴て孫右衛門内に入ば。ヤ兄者人伯母樣是いよふこそ〳〵先これへ。私ゐ只今急な算用いたし掛り四九卅六夕三六が一夕八分で二分の勘太郎よお末よ。婆〻樣叔父樣お出じや煙草盆持ておゑや。一三が三夫おさんお茶上ましやと。口ばやなり。いや〳〵茶も煙草も呑には來ぬ。是おさんいのに年若とて二人の子の悪。結構な斗りみめでいない。男の性の惡いゐ皆女房の油斷のら。身代破り夫婦別れする時は男ばのりの那じやない。ちと目とあいて氣に張と持やいのと云へば。伯母樣愚なと。此兄とさへ欺す不靈者女房の異見なぞ暖のに。ヤイ治兵衛此孫右衛門とぬく〳〵と欺し。起請迄のやして見せ十日も立ぬになんじや請出す。ヱヽ汝ゐナァ小春が借錢の算用お置かれと。算盤押取庭へ瓦落理と投捨たり。是ゐ近頃迷惑千万。先度より後今橋の問屋へ二度。天神樣へ壹度ならでゐ歌居より外出ぬ私。請出す事は扨置思ひ出しも出すにこそ。云やんな〳〵夕部十夜の念佛に講中の物語。曾根崎の茶屋紀伊國屋の小春といふ白人に。天滿の深い大盡が外の客と退退。直に其大盡が今日明日に受出すとの是ぎた。賣買高い世の中でも金と愚鈍ゐ澤山なといろ〳〵の評判。此方の親父五左衛門殿常〻名と聞ぬいて。紀伊國屋の小春に天滿の大盡とゐ治兵衛めに極つた。嗅の爲にゐ甥なれを此方ゐ他人娘が大事。茶屋者請出し女房ゐ茶屋へ賣おらふ。着類着そげに疵付られぬ間に取返してくれふと。沓脱半分下りられしとなふ騒々敷神妙ゐも成と。明さ開さ開旭て上のとと押寄め。此孫右衛門同道した。孫右衛門の咄しにゐ今日ゐ昨日の治兵衛でない

。曾根崎の手も切れ本人間の上々と聞ば跡のらはみのへるそもいのなる病ぞや。其方の父親ゝ伯母が兄最愛や光譽道清往生の枕と上。錠なり甥なり治兵衛がと頼むとの一言い忘ねど。其方の心一ッにて頼まれし効もないいのと。岸波伏て恨泣治兵衛手とうち。ハアヽよめた〳〵取沙汰の有小春ゝ小春なれど。請出大盡大きに相違兄貴も御存。先日暴亂で踏れた身すがらの太兵衛。妻子春屬持ぬ奴金ゝ在所伊丹のら取寄る。とつくに彼奴めが受出すと私に押へられ。此度時節到來と受出すに極つた。我ら存知も寄らぬ事と云ばおさんも色と直し。假令私が佛でも男が茶屋者請出す。其鼠負せふ筈がない是斗りゝ此方の人に微塵も吁詐ゝない。母様證據に私が立かすと。夫婦の詞割符も合さては左様のと手と打て伯母ゝ心と安めしが。ムヽ物には念と入うこと先々婚敷とてもに心落付ため。のたむくろの親父殿疑がひの念なきやうに誓紙書すが合點の。何が扨千枚でも仕ちム。いよ〳〵滿足則ゝち道にて求めしと孫右衛門懷中より。熊野の午王の村烏比翼の誓紙引のへ。今ゝ天罰起請文小春に縁切思ひ切。偽ゝり申すにおいてゝ上ゝ梵天帝釋下ゝ四大の文言に。佛前へ神前へ紙屋治兵衛名としつのり血判とすへて差出す。ア、母様伯父様のお蔭で私も心落付。子中なしても竟に見ぬ堅め事皆喜悅んで下さんせ。チ尤々此氣に成ば堅まる商事も繁昌しよ。一門中が世話のくも皆治兵衛爲よのれ。兄弟の孫共可愛さ。孫右衛門おじや早ムム歸つて親父に安堵させたい。世間がひへる子供に風ひのしやんな。是も十夜の如來のお蔭是のら成共お禮念佛。南無阿彌陀佛と立歸る心ぞ直に佛なる。門送りさへそと〳〵に敷居も越や越ぬ中。巨燵に治兵衛父ころり被る蒲團の格子縞。まだ曾根崎と忘ずのと呆れながら立寄て蒲團と取て引退れば。枕につたム涙の滝身も浮ばのり泣ゐたる。引起し引立巨燵の樽につき居顔つく〳〵打詠め。あんまりじや治兵衛殿。夫程名殘惜くば誓紙書ぬがよいいの。一昨年の十月中の亥の子に巨燵明た祝義とて。まあ爰で枕並べて此のた女房の懷中にゝ鬼が住の蛇が住の。二年と云ム物果守にして漸々母様伯父様のお蔭で。瞑じい夫婦らしい寢物語もせム物と。樂む間もなく眞に酷いつれない左程心殘らば泣しやんせ〳〵。其涙か蜆川へ流て小春の汲で呑やらふぞ。エヽ曲もない恨めしやと。膝に抱付身と投伏口說たてゝぞ歎きける。治兵衛眼と押拭ひ悲しい涙ゝ目より出。無念涙は耳ゝら血共出るなちば云ずと心も見すべきに。同じ目より溢るゝ涙の色の變らねば。心の見へぬゝ尤も〳〵

。人の皮着た畜生女が名殘も絲瓜もなん共ない。意恨有身すがらの太兵衛金は自山妻子はなし。請出す工面しつれ共其時迄い小春めが太兵衛が心に隨いず。少も氣遣なされな假令てなさんと緣切れ添れぬ身に成たり共。太兵衛めにい請出されぬ若し金せきで親方のら遣るならば物の見事に死んで見しよと。度々詞と放ちしが是見やのいて十日も立ぬうち太兵衛めに請出さるゝ腐れ女の四足めに。心い夢〳〵殘らぬ共。太兵衛めが隱言吐治兵衛身代息盡ての金に手詰つてなんぞゝ。大坂中と觸廻り問屋中の突合にも。面とまふられ生脚うく胸が裂る身が燃る。エゝ口惜い無念な熱い涙血の涙。ねばい涙と打越へ熱鐵の涙が溢るゝとぞうと伏て泣ければ。はつとおさんが奥さめ顏。ヤア夫なれば最愛や小春い死にやるぞや。ハテサテなんぼ利發でも流石町の女房じやの。あの無心中者なんの死なふ。炙とすへ藥呑で命の養生するいいの。いや左樣でない私が一生云ふまいとは思へ共。隱し包でひざ〳〵殺す其罪も怖ろしく。大事の事と打明る小春殿に無心中芥子程もなけれ共。二人の手と切せしい此さんが機關。てなさんが浮々と死ぬる氣色も見へし故。あまり悲さ女は相見互ひ事切れぬ所と思ひ切良人の命と。鮑む〳〵とのさ口說た文と感じ。身にも命にもうへぬ大事の殿なれど。引れぬ義理合思ひ切との返事私や是守に身とはなさぬ。是程な實女がてなさんとの契約違へ。ゐめ〳〵太兵衛に添ふものこの。女子い我人一むきに思ひ返しのないもの死にやるいいの〳〵。アヽアヽ瓢なる事サアサアサ何卒助て〳〵と。騷げば良人も敗亡し。取返した起請の中しらぬ女の文一通兄貴の手へ渡りしい。おぬしのらいた文なら。夫なれば此小春死ぬるぞ。アヽ悲しや此人と殺してい。女ごしの義理立ぬまづこなさん早ふ行て何卒殺て下さるなと。夫に縋り泣沈む。夫とても何とせん半金も手附と打棄とめて見る斗り。小春が命い新銀七百五十匁呑さねば此世に止むる事成ず。今の治兵衛が四ッ三貫匁の才覺。打みしやいでも何處のら出る。なふ仰山な夫で濟ばいと安しと。立て算筒の小抽匣明て惜氣もないませの。紐付袋押開き投出す一包治兵衛取上げ。ヤ金の然も新銀四百目こりや何樣してと。我置ぬ金に目覺る斗りなり。其金の出所も跡で語れば知れると。此十七日岩國の紙の仕切銀に才覺いしたれ共。夫い兄御と談合して商賣の尾い見せぬ。小春の方い急なとそこに四〳〵の一貫六百匁と。ま一貫四百匁と大抽匣の鎖明けて算筒とひらりと飛八丈。京縮緬の明日いない良人の命しら茶うら。娘のお末が兩面の紅絹の小袖に

身と焦す。是と曲てゝ勘太郎が手も綿もない袖なしの。羽織も交て郡内の仕末して着ぬ浅黄裏。黒羽二重の一張袤定紋丸に蔦の葉の。のきも退れもせぬ中ゝ内裸でも外錦。男銚の小袖迄さらへて物数十五色。内端に取て新銀三百五十匁よもや貸ぬと云とゝ。無い物迄も有顔に良人の恥と我義理と。一ッに包む風呂敷の中に情と籠にける。私や子供ゝ何着いでも男ゝ世間が大事。請出して小春も助け太兵衛とやらに一分立て見せて下さんせと。云へ共始終差俯向しく〳〵泣て居たりしが。手附渡して取とめ請出して其後。園でおくの内へ入るにしてのら。其方ゝ何と成とぞと云れてゝつと行當り。アッア左様じや。ハテ何とせふ子供の乳母の飯焚の。隱居成共しませふとわつと叫び伏沈む。余りに冥加恐敷此治兵衛にゝ親の罰天の罰佛神の罰ゝ當らず共。女房の罰一ッでも將來ゝよふない善免してたもれと。手と合せ口説歎けば。勿体ない夫と拜むとこゝいの手足の爪と剝しても。皆良人の奉公紙問屋の仕切銀。何時のらの着類と質に間とわたし。私が簞笥ゝ皆明殼夫惜い共思ふにてそ。何云ふても跡へんでゝ返らぬ。サア〳〵早ふ小袖も着のへて完爾り笑ふて。往このしやんせと。下に郡内黒羽二重縞の羽織に沙綾の帶。金拵らへの中脇差今宵小春が血に染とゝ佛や知召さるらん。三五郎爰へと風呂敷包肩に負せて供につれ。銀も肌身にしつのと付立出る門の口。治兵衛は内にお居やるのと毛頭巾取て入と見れば。南無三寶則五左衛門。是ゝ扨折も折よふお歸り被成たと夫婦ゝ頓倒狼狽る。三五郎が負ふたる風呂敷摂ぎ取てどつのと居り尖り聲。女郎下にけつのらふ。舞殿是ゝ珍らしい上下着飾り脇差羽織天晴よい衆の金遣ひ。紙屋とゝ見ゝぬ新地へのふ出の御精が出ますする。内の女房いらぬ物おさんに暇遣や伴に來たと。口に針有苦い顔。治兵衛は兎角の言句も出ず。爺様今日ゝ寒いによふ歩行しやんす。先お茶一ッと茶碗とし。ほに立寄つて。主の新地通ひも最前母様孫右衛門様お出なされて。段々の御異見熱い涙と流し。掛紙と書ての發起心。母様に渡されしがまだ御覽被成ぬこの。チヽ誓紙とゝ此とかと懷中より取出し。阿房狂ひする者の起請誓紙ゝ方々先々書出し程書ちらす。合點が往このぬと思ひ〳〵來れば案の如く。此態でも梵天帝釋この此手間で去狀書と。寸々に引さいて投捨たり。夫婦ゝあつと顔見合呆れて詞もなのうしが。治兵衛手とつき頭とさげ。御立腹の段尤も共れ詫ゝ以前のと。今日の只今より何事も慈悲と思召し。おさんに添せて下されのし。譬ば治兵衛乞食非人の身と成。諸人のはしの

余りにて身命ゝ繋ぐ共。おさんゝ急度上に居憂め見せず辛いめさせず。添ねばならぬ大恩有其譯ゝ月日も立私の勤方身上持直し。おゝ目に悪れば知るゝと夫迄ゝ目と塞いでおさんに添せて給れと。はら〳〵溢す血の涙壁に喰付詫ければ。非人の女房にゝ猶ならぬ去狀書〳〵。おさんが持參の道具衣類數改めて封つけんと。立寄ば女房あはて着物の數ゝ揃ふて有。改むるに及ばぬと駈塞がれば。究退ぐつと引出し。コリヤぞふじや又引出してもちんがらり有たけこたけ。引出しても。繼切れ一尺あらばこそ葛籠長持衣裳櫃。是程のらに成つたのと馬ゝ怒の眼玉も居り。夫婦が心ゝ今更に明けて悔歌浦島の。巨燵蒲團に身と寄せて火にも入たき風情なり。此風呂敷も氣遣と引解き取散し。さればこそ〳〵是も質屋へ飛すのの。ヤイ治兵衛女房子共の身の皮はぎ。其金でおやま狂ひ活胴拘。賊め女房共ゝ伯母甥なれど此五左衛門とゝあのの他人。損とせふ好味がない孫右衛門に斷り兄が方のら取返す。サア去狀〳〵と七重の扉八重の鎖。百重の圍みゝ通るゝ共通れ方なき手詰の段。ヤ、治兵衛が去狀筆でゝ書ぬ是御覽せ。おさんさらばと脇差に手とのくる。縋り付てなふ悲しや。鎧樣身に誤まり有ればこそ段〻の詫言。あんまり利運過ました。治兵衛殿ころ

他人なれ子供ゝ孫可愛ふゝ御座らぬの。わしや去狀ゝ受取ぬと。良人に抱付聲と上泣叫ぶこそ道理なれ。よい〳〵去狀いらぬ女郎こいと引立る。いや私や往のぬ厭も厭れもせぬ中と何の恨に昼日中。夫婦の恥ゝ晒ぬと澄詫れ共聞入ず。此上に何の恥町内一杯喚いて行と。引立れば振放し小腕とられ丁々と。蹌跟足の爪先に可愛や磯と行あたる。二人の子供が目と覺し。大事の母樣なせ伴て行祖父樣め。今のら誰と寢やうぞと慕ひ歎けば。チヽ最愛や生れて一夜も母が肌と放さぬもの。晩のらゝ爺樣と寢しや二人の子供が朝ふさ前忘ず。必らずくは山呑せて下されなふ悲しやと。云ひ捨る跡に見捨る子と捨る。敲に夫婦の二股竹永き別れと

下之巻

戀情爰と瀬にせん蜆川。流るゝ水も行通ふ人も。音せぬ丑滿の空十五夜の月冴て。光りゝ暗き門行燈大和屋傳兵衛と一字書。眠り勝成る擊柝に番太が足ぢり千鳥足。ごよざ〳〵も聲更たり。駕籠の乘いのふ更たのと上の町のら下女子。迎ひの駕籠も大和屋の。潜り瓦落〳〵つゝと入。紀伊國屋の小春さん借やんしよ。迎ひとばのりほの闇へ跡ゝ三ッ四ッ拶挨

の程なく潜りによつと出。小春様ゝ御泊じや鶴籠の衆直に休ましやれ。ア、云ひ殘した是花車さん。小春様に氣と付て下さんせ。太兵衛様へ身請がすんで金請取たりや預り物。酒過させて下んすなと。門の口のら明日待ぬ治兵衛小春が土に成る。理時ちらして歸りける。茶屋の茶釜も夜一時休むは八ッと七ッとの間にちら付短樂の。光も細く更る夜の川風寒く霜みてり。まだ夜が深い送らせましよ。治兵衛様のれ歸りじや小春様起しませ夫呼ませと亭主が聲。治兵衛潜りとぐわさと明け。コレ〳〵傳兵衛小春に沙汰なし耳へ入ば夜明け迄括られる。夫故よふ寐させて抜て往ぬる。日が出てのら起していなしや。我等今のら歸ると直に買物の爲京へ登る。大分の用なれば中拂ひの間に合やうに歸るゝ不定。最前の金で其元の算用合も仕廻。河庄が所へも後の月見の拂と云ふて四ッ百五十匁請取とつて給らふしと。福嶋の西悦坊が佛檀買た奉加銀一枚回向しやれと遣つたも。其外に懸り合ゝハア夫よ〳〵。磯市が花銀五ッ是斗じや仕舞て寐やれ。さらば〳〵戻つて逢ふと。二足三足行より早く立歸り。脇差忘たちやつと〳〵。なんと傳兵衛町人ゝてゝが心安い。武士なれば其儘切腹するであろの。我ら預て於てとんと失念小刀も揃ふたと。渡せば取つてしつゝと差。是さへあれば千人力もう休みやれと立歸る。追付お下り被成ませよふ御座りまも、そこ〳〵に跡は樞械とごつとりと。物音もなく鎮まれり。治兵衛ゝつゝと去ぬる顔。又引のへす忍び足大和屋の戸に縋り。内と覗いて見る内に間近き人影瞰驚して。向ひの家の物影に過る間暫時身と忍ぶ。弟故に氣と碎く紛屋孫右衛門ゝ先にたち。跡に丁兒の三五郎が春中に甥の勘太郎伴れ。行燈目的に駈來り大和屋の戸と打叩。ちと物問ませふ紙屋治兵衛ゝ居りませぬの。一寸逢せて下されと呼ゝれば。扨ゝ兄貴と治兵衛ゝ身動きもせず猶忍ぶ。内のら男の寢ぬれ聲。治兵衛様ゝまちつと先に京へ登とてお歸り成れた爰にでゝ御座らぬと。重て何の音信も涙ばら〳〵孫右衛門。歸らば道で逢そなもの京へとゝ合點がものぬ。ア、氣遣ひで身が慄ふ小春と伴てゝ行ぬゝと。胸にぎつくり横たゝる。心苦しさ堪へゝねば又戸を叩ば。夜更て誰じやもう寢ました。御無心ながらま一度お尋申たい。紀の國屋の小春殿ゝお歸り被成たのもし治兵衛と連立て行ゝ成れぬの。ヤ、何じや小春殿ゝ二階に寢てじや。ア先心が落付た心中の念ゝない何處に躍んで此苦とのける。一門一家親兄弟が片唾と呑で臓腑と揉とゝよも知るまい。見の恨に我身と忘れ無分別も出やうゝと。異見の種に

勘太郎と連て尋ぬる甲斐もなく。今迄逢ぬゝ何ととほろ〳〵涙の一人言。隱るゝ間だの隔てねば聞へて治兵衛も息と詰。涙呑込斗りなり。ヤイ三五郎阿房めが夜る〳〵うせる所外にゝ知らぬかと。云へば阿房ゝ我名ぞと心得て。知つて居れど爰でゝ恥の敷て云ゝれぬ。知て居るとゝサア何處じや云て聞せ。聞た跡で叱らしやんな毎晩ちよこ〳〵行所ゝ一の側の納屋の下。大白痴め夫と誰が吟味する。サアこい裏町と尋て見ん勘太郎に風ひうすな。どくにも立ぬ父めと持て可愛や冷たいめとするな。此冷たさで仕舞ば好がひよつと憂めゝ見まいう。憎や〳〵の底心ゝ不便〳〵の裏町といざ尋んと行過る。影隱たれば駈出て跡懷のしげに伸上り。心に物と云ゝせてゝ十惡人の此治兵衛。死に次第共捨置れず跡のら跡まで御厄介勿体なやと。手と合せ伏拜み〳〵。猶此上のお慈悲にゝ子供がとと斗りにて暫時涙に咽びしが。兎も覺悟と極しうへ小春や待んと。大和屋の潛りの透間さし覗ければ。内にちら付人蔭ゝ。小春じやないの待としらせの合圖の咳。エヘン〳〵うつち〳〵エヘンに柏子木打ませて。上の町のら番太郎がくる〳〵丸ぐる風の夜ゝ。せき〳〵廻る火用心でよさ〳〵〳〵も。人忍ぶ我にゝ辛き葛城の。神隱れして遣り過し透と窺ひ立寄ば。潛り内のら密と明く。小春の。待ての治兵衛様早ふ出たいと氣と急ば。せく程廻る車戸の明ると人や聞付んと。しやくつてあくればしやくつて響き。耳に聽く胸の中治兵衛が外のら手と添ても。心震ひに手先も震ひ。三分四分五分一寸の先の地獄の苦みより。鬼の見ぬ間と漸々に明て嬉しき年の朝。小春ゝ内と抜出て互ひに手と手と取のゝし。北へ行よう南への西の東の行末も。心の早瀬蜆川流るゝ月に逆らひて足とはのりに

名ごりの橋づくし

走り書。謠の本ゝ近衛流野郎帽子ゝ若紫。悪所狂ひの身の果ゝ斯なり行と定さりし釋迦の敎も有とこの。見たし憂身の因果經。明日ゝ世上の言草に紙屋治兵衛が心中と。仇名敷り行櫻木に。根彫葉ぼりと繪双紙の版摺紙の其中に有共しらぬ死神に。誘ゝれ行も商賣に疎き報と觀念も。とすれば心ひうされて歩行惱ひぞ道理なり。頃ゝ十月十五夜の月にも見ぬ身の上ゝ。心の闇の曇のや。今置霜ゝ明日消る果敢なき譬の夫よりも。先へ消行閨の中最愛可愛と締て寢し移香も何と流の蜆川。西に見て朝夕渡る此橋の天神橋ゝ其昔。菅相丞と申せし時筑紫へ流罪給ひしに。君と慕ひて太宰府へたつた一飛梅田橋。跡老松の緑橋。

別れと歎き悲みて跡ゐ憧るゝ櫻橋。今に咄しと聞渡る一首の歌の御威徳。のゝる尊き荒神の氏子と生れし身と持て。其方も殺し我も死ぬ元ゝと問へば分別の。あの可憐な貝殻に一杯もなき蜆橋。短のき物ゝ我々が此世の住居秋の日よ。十九と廿八年の今日の今宵と限りにて。二人命の捨所爺と婆々との末迄も。まめで添ゝんと契りしに。九三年も馴染いで此災難に大江橋。あれみや浪花小橋のら舟入橋の濱傳ひ。是迄來れば來る程ゝ冥途の道が近付と。歎けば女も縋り寄りもう此道が冥途のと。見ういす顔も見へぬ程落る涙に堀川の橋も水にや浸るらん。北へ歩行ば我宿と一目に見るも見歸らず。子供の行衛女房の哀れも胸に押包み。南へ渡る橋柱數も限ちぬ家〻〻。いのに名付て八軒家。誰と伏見の下り舟若ぬうちにと道急ぐ。此世と捨て行身にゝ聞も恐し天滿橋。淀と大和の二川と一ッ流の大川や。水と魚とゝ伴て行我も小春と二人連。一ッ刃の三ッ瀬川手向の水に受たやな。何の歎のん此世でこそは添ず共。未來ゝ云ふに及ず今度の〳〵。つゝと今度の其先の世迄も夫婦ぞや。一ッ蓮の蕾みにゝ一夏に一部夏書せし。大慈大悲の普門品妙法蓮華京橋と。越れば到る彼岸の玉の臺に乘とへて。佛の衣に身となり橋泉生濟度が儘ならば。流の人の此後ゝ絶て心中せぬやうに。守りたいぞと及びなき願ひも世上の世迷言。思ひやられて哀れなり。野田の入江の水煙り山の端白くほの〴〵と。あれ寺〻の鐘の聲こう〳〵斯していつ迄。とても存命はてぬ身と最期急ん此方へと。手に百八の珠の緒と涙の玉に綵ぢせて。南無阿彌陀の大長寺數の外面のいさゝ川。流れ漲る樋の上と最期所と着にける。なふ何時迄うの〳〵歩行ても。爰ぞ人の死に場とて定めしし所もなし。いざ爰と往生場と手と取土に坐しければ。されば〻こそ死に場ゝ何處も同じとと云ながら。私しが道々思ふにも二人が死に顔並べて。小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば。おさん様より頼みにて殺して呉るな殺すまい挨拶切と取替せし其文と反古にし。大事の男と晩しての心中ゝ流石一座流の勤めの者義理しらず僞り者と。世の人千人万人よりおさん様一人の下見。恨み嫉みも嘸と思ひ遣り。未來の迷ひゝ是一ッ。私しと此處で殺してこなさん何處ぞ所とのへついと脇でと。うち靠れ口說ば俱に口說泣。〻愚痴なと斗りおさんゝ眞に取りのやされ。暇と遣ぢば他人と他人。離別の女になんの義理道すがら云ふ通り。今度の〳〵ずんぶ今度の先の世迄も夫婦と契る此二人。枕と並べ死るに誰が讖り誰が嫉む。サア其離別ゝ誰が所爲私しよりこなさん猶愚

痴な。身體があの世へ伴立う所〻の死にとして譬へ此身體ハ爲島につゝうれても。二人の魂ゐ付纏わり地獄へも極楽へも連立て下さんせと。又伏沈み泣ければ。ヲヽ夫よ〳〵此身體ハ地水火風死れば空に歸る。五生七生朽せぬ夫婦の魂滅れぬ驗合點と。脇差ずばと抜はなし元結際より我黒髪ふつゝと切て。是見や小春此髪の有内は紙屋治兵衛と云ふおさんが良人。髪切つれば出家の身。三界の家と出妻子珍寶不隨者の法師。おさんと云ふ女房なければおぬしが立る義理もなしと。泪ながら投出す。アヽ嬉しふござんすと小春も脇差取上げ洗ひつ漉つ撫付し。酷や惜げも投島田はらりと切て投捨る。枯野の芒夜半の霜俱に亂るゝ哀れさよ。浮世と逝れし尼法師夫婦の義理とは俗の昔。迚ものとにさつぱりと死場も替て山と川。此廻の上と山と淮らへ和女が最期場。我ハ又此流れにて盜る最期ハ同じ時ながら。捨身の品も所も替ておさんに立扱く心の道。其抱帶此方へと。若紫の色も香も無常の風に縮緬の此世彼の世の二重まわり。廻の俎木にしつゝと括り先と結んで。待場の雉子の妻敵我も首締縊る罠結。我と我身の死拵へ見るに目も呉心くれ。こなさん夫で死なしやんすこの所と隔て死ぬれば側に居るも少しの間。此處へ〳〵と手と取合乃で死ぬるは一

思ひ嘸苦痛なされうと。思へば最愛〳〵と止めのねたる忍び泣。首くゝるも喉突も死ぬるに愚ごの有物ごの。よしない事に氣とふれ最期の念と飽さず共。西へ〳〵と行月と如來と拜み目と放さず。只西方と忘りやるな心殘りの事有ば云ふて死にや。何もない〳〵こなさん定てお二人の子達の事が氣にのゝろ。アレ驅な事云ひ出して又泣しやる。父親が今死ぬる共何心なくすや〳〵と。可愛や寢顔見るやうな忘ぬハ是ばつゝりと岸波と伏て泣しづひ。聲も爭そふ群鳥栖はなれて鳴聲ハ。今の哀れと問ふやとていとど涙と添にける。なふあれと聞や二人と冥途へ迎ひの烏。午王の裏に誓紙一枚書度に。熊野の烏がお山にて三羽づゝ死ぬると。昔より言傳しが我と其方が新玉の歳の始に起請の書初め。月の始月頭書し誓紙の數々其度事に。三羽宛殺せし烏ハ許多ぞや。常にハ可愛〳〵と聞今宵の耳へハ其殺生の根の罪。ひくひ〳〵と聞もるぞや報ひとハ誰故ぞ我も名辛さ死ととぐる。免て呉と抱き寄れば。いや私故と締寄て顔と顔とうち重ね。泪に閉る鬢の髪野邊の嵐に水けり。後に襟く大長寺の鐘の聲南無三寶長き夜も。夫婦が命短の夜と早明渡る晨鐘に最期ハ今ぞと引寄て。跡迄殘る死顔に泣顔殘すな殘さじと。莞爾笑顔のしろ〳〵と霜に凍て手も慄ひ。

我のら先に目も眩み刃の立ぢも泣涙。アヽ急まい〳〵早ふ〳〵と女が勇むと力草。風誘ひ來る念佛ハ我に勸むる南無阿彌陀佛。彌陀の利劍とぐつと刺され引居ても反返り。七顛八倒こわいのに切先咽喉と外れ。死にもやらざる最期の業苦俱に亂れて苦みの。氣と取直し引寄て鍔元迄差通したる一刀。剝り苦しき曉の見果ぬ夢と消果たり。頭北面西右脇臥に羽織打着せ死骸と繕ひ。泣て盡せぬ名殘の袂見捨て抱帶と手操寄せ。首に罠と引掛る寺の念佛も切回向。有縁無縁乃至法界平等の聲と限りに樋の上より。一遂托生南無阿彌陀佛と陷ハづし暫時苦む生瓢。風に搖るゝ如くにて次第ゐ絶る呼吸の道。いきせきとむる樋の口に。此世の縁ハ切果たり。朝出の漁夫が網の目に見付て死んだヤレ死んだ。出逢〳〵と聲々に言廣めたる物語。直に成佛得脫の誓ひの網島心中と目ごとに涙とうけにけり

天の網島　終

女殺油地獄

近松門左衛門　作

船は新造の乘り心ヨイヨエ。君と我と我と君とは。圖に乘つた乘つて來た。しつとんとん〳〵しととん〳〵。しつとゝ逢せの波枕。杯は何處いた。君が杯いつも飲たや武野の。月の。月の夜すがら戯れ遊べ。囃し立てたる大騷ぎ。北の新地の料理茶屋。主人なけれど咲花や。後家のおかめが請こんで。客の變名は郎九とて生れは陸奥會津にて。名代ながさぬ金遣ひ。此頃浪華此里へ。登りつめたよ天王寺屋。小菊を思ひ思はれたさに。なまづ川よりゆら〳〵と。野崎參りの屋形船。卯月中旬のはつあつさ。末の閏に追繰て。未だ肌寒き川風を。酒に凌ぎてそゝり行。しやくざいれうせん妙法華。金際西方妙阿彌陀。娑婆示現觀世音。三世の利益三年續き。去々年戊亥の春は。うらやせどやに罪深く。針櫛箱や珠數袋。そこに日の目も見ず知らぬ。一文不通の衆生迄。千手の御手の攫み取り。紫摩黃金の御肌に忽ち那智の觀世音。去年は和州法隆寺。聖德太子の千百年忌。これ又くせの大悲の化身。續いて今年此薩埵。櫻過にし山里の。誰れ訪べくも無かりしに。老若男女の花咲さて。足をそら〳〵空吹風に。散らぬ色香の伊達參り。大人童も歌ふを聞ば。行るちんつ歸るちん

つ。又來る人もちんつちりつて。チリテツテ次手を頼みの乘合船は。俳切よりも得著堤共に舳を濃付て。他所も一つの船の中。客は是見よ顔自慢。動ともすれば痴話ごとの。夫に任せた身の上も。人も耻かし氣詰りと。小菊は陸へ一飛に。ひらりぽうしのふかゝと。眉は隱せどとりなりの。町で名古屋の胸高帶は。小笹に露のたまられぬ。儉約算用世智辨も。人にこそよれ品にてそ。よれつもつれつ道草に。人の言草ア、むつかしく。うるさく憎く嫌らしく。我が供船を小手招き。是の見さんせナ愛宕の山にヨヱ。ぢんの。ぢんの煙が三筋立つ。四筋に別れ玉鉾の。是より辰巳奈良街道。丑寅隅は八幡道。玉造へは未申。西は元來し京橋や。野田の片町大和川。爰は名にあふ壽命の松。御代長久の岡山を。歌には忍の岡とも詠み。佐良々山口一ッ橋。渡して救ふ御願力。無量無邊のじゆふくかく。慈眼視衆生念彼觀音。身得度者の御誓。問ふも語るも行く船も。徒歩路ひろふも諸とも。迷ひを開く腰扇。御堂に念珠を繰返へす。所をとへば本天滿町〻町の幅さへ細々の。柳腰やなぎ髪とろりとせいも種油。梅花紙こしゑの油。夫は豐島屋七左衛門。妻の野崎の開張參り。姉は九ッ三人娘。抱手引手に見返る人も。子持とは見ぬ花盛り。吉野の吉の字を取つて。お吉とは誰が名付けん。お清は六ッ中娘。母樣茶々が飲たいも。折節傍の出茶屋見世。爰借りますと憩ひぬ。是も同町筋向ひ河内屋與兵衛。未だ二十三親がゝり。同商賣の色友達。刷毛の彌五郎。皆朱の善兵衛。野崎參りの三人づれ。萬事を夢と呑みあげし。寢醒提重五舛樽坊主持して北うすむ。小菊めが客と連立。よし〳〵と下向するも此筋と。のさばり返つてくる道の。茶見世の中より申々與兵衛樣。爰へ〳〵と呼懸られ。ヤお吉樣子共衆連ての參りか。存たら連に成ましよ物。七左衛門殿は留主なさるゝか。いや此方の人も同道二三軒寄る所もあり。追付爰へ見へる筈。お連衆もマア是へ。平に〳〵と强られて。煙草一服致さうかと。腰打かくるものんこらし。何と與兵衛樣。御繁昌な參りでは無かいの。よい衆の娘子達やお家樣がた。アレ〳〵彼處へ桔梗染の腰變り。島縞の帶しやじやはひの〳〵。ソレ〳〵〳〵其處へ島縮に鹿子の帶。慥に中の風と見た。又一位見事では有るぞ。如何樣若いお衆が此樣な折に。あんな見事な者引連れ。贅の遣たいは道理。こな樣も連立たい者があろ。こんな折に新地の天王寺屋小菊殿か。新町の備前屋松風殿か。なんと能知つて居るが。何故連立て參らんせぬと。ばつと乘すればふはと乘り。殘り多い天晴今

日は物の見事なことで。參々の群衆に目を醒させうと。此中からもがいたれど。備前屋の松風めは先約が有て。貰ひも貸もならぬと吐す。天王寺屋の小菊めは。野崎へは方が惡い誰樣の御意でも、參らぬと言さる。夫に聞て下され。小菊めか今日會津の客に揚られ。早天から川御座で參りおつた。田舍者に仕負ては此與兵衛が立ぬ。小菊めが歸るを待て一出入と。咄の内から二人のつれ。腕押もんで力みかけ。鬼とも組べき勢なり。それ〳〵問ふには落ず語るに落ると。利口そうに夫が信心の觀音參りか。喧嘩師ののら參り。買しやんすお山も傾城も。何やの誰何屋の誰と。親御達が能知ていとしぼや。其許は與兵衛めが間がなすきがな入浸て居る。異見して下されと。私等夫婦に折入て口說ごと。我夫の七左衛門殿もいやらぬ事は有るまい。定めしこな樣の心には。所こそあれ野がけの茶見世で。若い女子のざまで入子鉢の樣な。面々の子共の世話斗やきおらず。小さし出たと憎かろが。此諸萬人の群衆を。突のけ押のけ目に立つ風俗。本天滿町河内屋德兵衛といふ。油屋の二番息子。茶屋〳〵のわけも碌に立ず。あの樣見よと指さしするが笑止な。こうとうな兄御を手本にして。商人といふ物は。一文錢もあだにせず。雀の巣もくふにたまる。隨分稼いで親達の肩助けと。心願立さんせ。脇へは行ぬ其身のせうごん。〳〵氣に入らぬやら返事がない。姉おじや早ふ參らふ。道でこちの人に逢しやんしたら。本堂に待て居ると言て下さんせ。茶屋殿過分と。袂より置く茶の錢の八九文。四分におもく五分には。輕々し氣の物參り。別れてお吉は通りける。惡性に上塗する皆朱の善兵衛。彼の女は與兵衛が筋向の内儀樣でないかい。物ごしもどこやら戀のある美しい顏で。扨々堅い女房じやな。然れば年もまだ二十七。色は有れど數の子程產廣げ。所帶染て氣がこうとう。好女房にいかひ疵。見懸斗りで美味の無い。飴細工の鳥じやと笑ひける。斯くとは如何でしろうとの。田舍の客に揚られて。連て主人の後家交り。かはりちんつの國訛り。やつしは甚左衛門幸左衛門が思案ごと。四郎三が憂い事。ちんつ〳〵ちんちりつてつて。日本一の名人樣。やつちや〳〵と譽る歌より。褒さする金ぞ諸藝の上手なる。そりや〳〵來たぞと三人が。手ぐすね引たる顏色小菊遠目にはつと驚き。申花車さん。同じ道斗氣が尽きる。始の船に乘たいと。那かい取て立息らふ。前に與兵衛帆柱立ち。跡に二王の張番立ち。與兵衛せくな。女郎と詰開ひて男立い。會津蠟燭が光だてしたら。此方二人が心切て踏消してくれると。草履を腰に腕卷

り。客は頭倒花車も下女も狼狽。小菊を圍ふてうぞふるふ。小菊殿かつた。馴染の河與が かるからは動せぬと。茶屋の床机に引ずりすゑ。是賣女樣安お山樣。野崎は方が惡い。誰 樣の御意でも參らぬと。此河與と連になるを嫌ひ。好た客と參れば方も搏ぬか。其譯聞ふ と理屈ばる。目玉のきもん金神もなぞやかに。河與樣角か取れぬの。小菊といふ名が一つ 出れは。與兵衛といふ名は三つ出る程。深い〳〵と言立られた兩人の中。連立て參らぬも。 皆なこな樣の最愛さゆへ。人にそだてられ。嗾けられ何んじやの。妾が心は誓文かうじやと。 ひつたり抱き寄せ染々囁く。色こそ見へね河與が悦喜。ニ忝けないと伸た顔付。客は堪ら ず傍にどうと腰かけ。小菊どのお身は聞へぬ。如何なる緣にか會津樣はど最愛い人は。大 坂中に無いと言つたぞよ。國元の外聞身の大慶と。大事の金銀を湯水の樣に川遊び。ちよ がらかされにや來申さない。其男か聞まへで。夕べの如く云はないけりや。どや〳〵通り のひや〳〵の關。二度と越し申さない。どうだ〳〵と責せちがふ。言合せし二人の連つか 〳〵と寄て。ナイもさめ。此女郎此方へ貰ふ置て歸れ。但東土產に川の泥水振舞はふかと。 兩方より立はさみ。擲て吳んず面搆。阪東者のどう强く。何さぶい〳〵共。人囃の腕に色

〳〵の彫物して喧嘩に事よせ。懷中の物取ると聞及ぶ。貧乏と云ふ棒に脛を叩られ。腰膝も 立ぬ、遊女狂ひ。上方の泥水より泉州者の泥足くらへと。つゝと寄り蹴上る足首。刷毛が頤 ひ蹴ちがへられ。どうとまろんでころ〳〵〳〵。小川へだんぶと撥落され。是はと取付皆 朱が大事の命の玉。縮み込程蹴付られ。鳶がかけた南無三と。惘れて空をみち〳〵〳〵。 腹ばい〳〵逃て行衛は無りけり。友達投させ見て居ぬ男。倒まにうへて吳れんと。ひづと 摺めば振放し。ナちよこざいなげさひ六。ゑら骨ひつかいて吳れべいと。くらはす拳を請 除しては擲返し。敲き合ひ掴み合ふ。なふ氣の通らぬ是どうぞと。中へ小菊がかせに入り。 ナ、怪我爲しやんすな。大事の身と花車が圍へば。下女も手を引立隔つ。そりや喧嘩よと諸人 の騷ぎ。茶屋は店を仕廻ふやら。二人は絶体絶命の。擲合ひ組合ひ。堤の片岸踏み崩し。 小川にどう〳〵落ちわかれ。濆屑泥土まいごみ砂。互に投げかけ摺かけ。打あい打付伸裁人 無き相手勝負。氣根較べと見へにけり。折こそあらめ島上郡高槻の家の子。お小姓達の出 頭小栗八彌。馬上に上下御代參の徒士若黨。揃羽織の濃梯に。智惠の輪の大紋。手振の先 供はい〳〵〳〵の。聲をも聞かず與兵衛が。たぐりかけて打つ泥砂。出合拍子に馬上の武

士の。給上下皆具迄ざつくと掛るも時の運。栗毛忽ち泥付毛はいがい鞍もしづまらず。與兵衛もはつと驚く所。それ逃すなと徒歩の衆。ばら〳〵と取まく中。相手は川を渡越し。小菊も花車も手ばしかく。參りの諸人に紛れてのく。徒士頭山本森右衛門。與兵衛が兩脛かいてぎやつとのめらせ。膝を脊骨にひしぎ付る。ァ、お侍樣。けがで御坐る御免成ませ。お慈悲〳〵ど泣面かく。ヤ此奴慮外者。お小袖馬具に泥をかけて。けがと云ふては濟ぬ。面を上いと首ねぢ上げ。ヤァ森右衛門殿伯父じや人。ム、與兵衛めかと。互ひにはつと驚きしが。ヤイおのれは町人。如何樣の耻辱を取ても疵にならぬ。旦那より御扶持を蒙り。二字を首に懸たる森右衛門。慮外者を取て押へ。甥と見たれば猶助けられぬ。討て捨る立ませいと。小腕を取て引立る。馬上の主人。ヤイ〳〵森右衛門。見れば其方が大小の鞘口。つめやうが緩さうな。ふと鞘走つて。けがでもして。血を見れば殿の御代參叶はず。歸らねばならぬ。下向迄は隨分鞘口に心を付て。森右衛門供をせい〳〵。ハァはつとお詞丞なく。おのれ下向には首を討。暫の命と突はなし。隨分おぢが目に懸るなと。云ひたけれども侍氣。聲せぬ夏の手振驚はい〳〵〳〵。武家のいきかたなづまぬ御馬足を早めて急がるゝ。與兵衛

うつとり。夢か現か醉たるごとく。南無三伯父の下向に斬るゝ筈。切られたら死ふ。死たらどうしよと。心は沈み氣はうはもり。遁てくれうと駈出で。ハァから行ば野崎。大坂は何方やら方角がない。こつちは京の方。あの山は闇峠か但比叡山か。どこへいたらば遁れうと。眼も迷ひ狼狽。ァ、どうかせう何と加賀笠。お吉と見るより地獄の地藏。ヤァお吉樣下向か。我や今切らるゝ助けて下され。大坂へ連れてゐて下され。後生で御座ると泣おがむ。イヤこちや未だ下向じや無はいの。七八町往れど余まり人せり。こちの人待合せに爰迄歸た。エ、けうとなげな。身も顏も泥だらけ。氣が違ふたか與兵衛樣。尤〳〵喧嘩して泥を攫み合。はね馬に乘た侍に其泥が懸つて。それで下向に切らるゝ筈。賴ます〳〵と立去ず。エ、惘れはてた。親御達の病になるがいとしぼい。向ひぢしのけん〳〵共ならず。茶屋の內借て振濯いで進せましよ。顏も洗ひとつとゝい。大坂へ歸つて。以後を嗜ましやんせ。又爰かりますお清よ。父樣が見へたら。阿母に知らしやゝと。二人莖簀の奥長き。日影も正午に傾けりさぞや妻子が待らんと。辨當かたげかた〳〵に。姉の手を引豐島屋の七左衛門。咽喉が乾けど呑間も急ぐ。茶屋の前にて中娘。ァ父樣かと縋り寄る。ヽ、待兼たか。阿母は何處に

と尋れば。阿母様は爰の茶屋の内に。河内屋與兵衛様と二人。帶解て衣服も脱て〻御さんする。ヤ河内屋與兵衛めと。帶といて裸体に成てじや。エ、口惜い目を抜れた。そうして跡はどうじや〳〵。そうして鼻紙で拭ふたり洗ふたりと。聞よりせき立つ七左衛門。顔色かはり眼もすはり。門口に立はだかり。お吉も與兵衛も是へ出よ。但し出ずば其處へ踏ごむと呼はる聲に。こちの人か子供がお畫の時分も忘れ。何處に何していさしやんしたと。出る跡から與兵衛が。七左衛門殿面目無い。ふとした喧嘩に泥にはまり。色々お内義様のお世話。是も七左衛門殿のお蔭。忝けないといふ小袖さき。髪の髷も泥まぶれ。身は濡鼠腹立やら可笑いやら。挨拶もせず是お吉。人の世話もよい比に爲たがよい。若い女が若い男の帶といて。そうして跡で紙で拭ふとは。尾籠至極疑はしい。餘所のことはばからかして。サア〳〵參らふ日がたける。チ〻〳〵待て居ました。委い事は道すがらと。姉が手を引おとは抱く。中は爺親肩車に。のりの敎も一っは遊山。群衆をわけてゞ急ぎける。與兵衛一人茶屋の見世。茫然として居る所に。亭主を始め。近邊在所の者共五六人。先にから爰な人は參りか下向か。一っ所にうろ〳〵と。合點いかぬヤ通つたと追立る。折からはい〳〵〳〵の。聲に交はる轡の音。小栗八彌下向の徒歩立。與兵衛うろたへ逃損い。押わる供先伯父の目に。懸るふしやうの出合頭。引捉へ捻する。最前は御參詣。今は御下向愼みなし討て捨ると。刀の柄に手をかくる。待て〳〵森右衛門。その者討て捨てんとは何故〳〵。彼奴は最前の慮外者。他人ならば少々は見遁しにも致し。御免なされ下し置るゝ樣の。取成をも申すべき所。彼奴が母は拙者が兄弟。現在の甥。何とも助け難しと申しも敢ぬに。其咎といふは何ごと。御尋ねに及はず。御服に泥を投かけ。御身を穢し汚したる科。イヤ〳〵此八彌が身を汚せしとは心得ず。是見よ着類の何處に泥か付たるぞ。イヤ召換られぬ以前の御小袖。されば〳〵着換れば。泥をかゝらぬも同前では有まいか。御意とは申しながら。已に御馬の鞍鐙も泥に染み。お徒歩でお歸り成るゝは。旦那に耻辱を與ゆる。慮外者と申上れば。默れ〳〵。馬の皆具には泥のかゝる物もへに。障泥といふ字は。泥をへだつと書く。泥の懸ちぬ物ならば。何しに隔つるといふ字の入るべきぞ。耻辱も慮外も咎も無し。武士たる者の耻辱とは。只一滴の濁水も。名字に懸るは洗ふにおちず。すゝぐに去らず。あれら体の雜人。身が目からは泥水。泥より出て泥に染ぬ蓮の八彌。名字は汚れぬ助けてやれ。ハはつと。

又有難さ御意を大事に。振る手を揃へ足そろへ。行列立てゝぞ。

中之卷

掲諦〳〵〳〵。波羅掲諦。波羅僧掲諦掲諦〳〵。波羅掲諦波羅僧掲諦。おんころ〳〵せんだりまとうき。おんあびらうんけん。おん油屋仲間の山上講。俗体乍ら數度のお山。院號請けたる若手の先達。新さやくまじり十二とう組。吹出す法螺のかい〳〵しげなる金剛杖。腰に腰當首に珠數。巾着代の水のみ。河内屋徳兵衛店前に立寄り。何んと與兵衛内にか〳〵。講中何事なふ。お山勤めて有難い。今日の下向は知た事。念比な友達は桑津まで迎ひにじや。お主一人見へぬは氣色でも惡いか。添けない御利生見て來た。是が土産先づ話さふ。西國者とやら。兩眼つぶれた十二三な旨が。大願かけて山上し。行者樣を拜む中。兩方共にくはつと開き。おざゝの坂を杖もつかず。つゝつと下る。お山の衆が考へゝ有がたい。此秋から世の中直る御告。あれ合點いかぬか。ちいさい旨は小旨。則はち米藏開いて。やす〳〵と下り坂は。下り口とのおしへ手際なら夕方お出。色々お山の咄で。旅の疲をはらそうぎやてい。ぎやてい〳〵と馬めきける。親徳兵衛走出。若衆下向か殊勝にござる。こちの治郎めは山上參りの行者講のと。今年も身共が手から四貫六百。順慶町の兄太兵衛から四貫。以上十貫近ひ錢取て。どれどこに迎ひにも出をらぬ。神佛の罰も思はぬどろく者。友達甲斐に引しめて。異見頼みますといふ所へ。奥より母親兩手に茶碗。なふ〳〵目出度下向。ヤ一ッつゝまいれ。こちの與兵衛が。山上樣へ虚言ついた其咎が。妹娘のおかちが十日斗風引て枕あがらず。醫者も三人替て今に熱がさめ兼。節句は近付婿を入る談合極り。先からは急いで來る。何かに付て夫婦の苦勞。皆與兵衛ののらめが。行者樣へ虚ついた祟り。お若衆お詫の祈禱頼みますと。しみ〴〵語れば講中の先達。いや〳〵お山の祟りなれば與兵衛に罰が當る筈。役の行者どもいはるゝ佛が。若輩らしう何の脇がゝりなされう。娘ごの熱病は又外のこと。その樣な煩らいには藥も醫者もいらぬ事。皆樣知らずか。あんまり奇妙で。異名を白稲荷法印と申す。今の世の流行り山伏。與兵衛も定め し知つていよ。此法印を頼めば。本服はたつた一加持。是から直に立寄。頼むに否は有まいと語れば悦び。ナフ〳〵添ない。是も行者のおしらせ。私は醫者殿へ參ります。是で綏りとお休み〳〵と立出れば。いや我々も面々の親々妻子の顔も見たし。互に無事で悦びの。

貝吹く降伏惡魔を除ふ眞言の。聲も散〳〵はら〳〵ぎやてい。おんころ〳〵に別れ歸りけり。きやくな弟に似ぬ心。順慶町の兄河内屋太兵衛。用有げにも浮ぬ顏付。太兵衛來てか。おかちが氣色見廻か。書出し何か忙しい時分。見廻には及ぬ事と。いへば太兵衛傍近く寄り。母には道でお目に懸り。立ながら委う物語致せしが。高槻の伯父森右衛門樣から。たつた今飛脚の狀に。もつけな事が云ふて來ました。見さつしやれ跡の月。御主人の供して野崎參りの折節。ごくどうの與兵衛めも參り合せ。友達喧嘩に攫み合ふひやうし。御主人へ段々の慮外。當座に與兵衛めを斬殺し。ぬしも腹切合點の所。御主人の御了見穩しく事相濟。歸つて後御家中町屋是沙汰。のめ〳〵と頬さげて奉公ならず。暇を願ひ浪人し。四五日中に大坂へ下り。二度侍の立べき思案せずば。此ぶんで刀は差れぬとの文体なりと。いふよりはつと膝を打ち。扨こそな。何處ぞで大事仕出さふと思ふつぼ。かてゝ加へて。おかちが煩ひ。おぢの難義未だ此上に。冶郎めが何を仕出さふやら。分別にあたはぬと頭をかけば。イヤ分別も何もいらぬ。追出して退さつしやれ。ぢたい親父樣が垂れるい。私と與兵衛めは。お前の種でないとて。あまり御遠慮が過ぎまする。腹に宿つた母者人と。連

添ふお前眞實の父と存る。やがて婿を取程脊丈伸た。おかちは擲叩き成れても。あんだらめには拳一つ當ずほたゑさせ。萬事に遠慮が皆身の仇。叩出して此方へこさつしやれ。どれぞ酷い主にかけ。矯直して呉ませふと。云へば親仁は無念顏。ヱ、口惜い。尤も繼父なれば迚親は親。子を折檻するに遠慮は無い筈なれど。其方衆兄弟は身共が親方の子。親旦那往生の時は。そなたが七ッのらめは四ッ。坊さま兄樣。德兵衛どうせいこふせいと。云ふたを彼奴が屹度覺へて居る。母も始はおか樣の。內儀樣のといふた人。おぢ森右衛門殿が了見で。其方が家を見棄てゝは。後家も子共も路頭に立。兎角森右衛門次第に成てくれと。だん〳〵の賴もへ。親方の內儀と此如く夫婦に成り。親方の子を我子として。守立し甲斐あつて。其方は自分の獨稼ぎもめさるゝ。與兵衛めに商賣の手を擴げさせ。手代も置き倉の壹軒も立る樣にと。あがいても尻のほゞけた錢さし。籠で水汲ひ如く跡からぬけ。壹反まうければ百反遣ふ根性。異見一言言ひ出せば千言で言返す。元が主筋下人筋の親と子。釘ごたへせぬ筈。身の境界が口惜いと。齒を嚙ひしばれば。そなたの其正直を見透て。どろく者めが爲度甲斐に踏付る。親仁樣の蔭でこそ。親子三人橋にも寐ず。人の門にもた

丶す。名跡立て丶下された。其恩德は本の親にも變らずと。毎度母も其悔み。子共に遠慮あるからは。現在腹に宿した母にも。氣兼が有かと思はぬ心置る丶。因果さらしの物にならずに飽果てた。太兵衛頼む江戸長崎へも追下し。死をらば死に次第。二度面も見とふない。みぢんも愛着殘らぬと。如來かけての母が言分からは。何御遠慮。勘當なされと評議の聲に目を醒し。ア、づ丶無ひ阿母樣〳〵か丶樣は未歸らずかと。おかちが苦しむ屏風の內。門にはものもう。河內屋德兵衛殿は此方か。山上講中頼みにつけ。稻荷法印御見廻申すと案內す。扨はおかちが祈禱なさる丶か一だん〳〵。私は高槻の返事が急ぐ。お暇申すと表に出。德兵衛宿に罷ある早々御出忝けなし。あれへお通り遊ばせと。太兵衛歸れば法印は端の間にこそ通りけれ。踏締も無く世の中を。滑り渡りの油屋與兵衛。賣溜錢は色狂ひ。絞り取れて元も利も。かすも殘らぬ油桶。重氣に見せる汗はなつ。中はすゝしき明樽を。擔ふて宿へ歸りしが。ヤ珍らしいお山伏。こなたは見知た白稻荷殿。妹が病氣禱の爲か。あの付物が其方衆の禱でのいたら。此與兵衛が首がけ。母者人は藥取にか。着婆でもいかぬ死病。いはれぬ氣骨おらる丶。ヤこれ親仁殿。おかちが煩ひより。何より大事が有る。

其當座に母者人には云ふたれど。夫よりはつたりと打忘れ。今日ふつと思ひ出し。商賣やめて歸つた。跡の月野崎で。おぢ森右衛門樣に行合。わざ〳〵飛脚もやる所。幸ひの使親達へ云ふてくれ。主人の金四ッ寶三貫目餘り引負ひ。此節季にたてねば。切腹か縊首一生の無心。兄太兵衛は義理も法も知らぬ奴。沙汰なしに三貫目調へ。與兵衛に待せて下されと。段々の傳言。二貫目や三貫目で伯父に腹切せて。此方衆の外聞世間が立まい。今日は二日。際といふて明日明後日。萬事を差置き今日の中。三貫目調へて渡さつしやれ。あす夜明にかけ出せば。晝までに往て戻ると。たつた今直筆のおぢの文の裏表。憎く可笑く。如何な伯父でも。主の金引あふ樣な侍。腹切らせたがまし。何ンじやごたくさんに三貫目。三匁もおしやらぬ。お主が商賣。去年から一文も見せぬ。算用したら。三貫目や四貫目は殘る筈。遣たくば其金やれ。追付婿を呼入る大事の娘が病氣。どんな評定する隙が無い。ヤ法印樣お待遠。おかちが樣躰。御覽なされ下されと。余のといふて取あはず。チ、〳〵手柄に婚が呼れふば呼で見や。見物せうと親の前に足踏伸し。そろばん枕の胸算用。ぐはらりと違ふて見へにけり。父がそろ〳〵抱起す。おかちが顏の面やつれ。法印篤と見。年

は幾才。十五。病付は。跡の月十二日。ム、藥師如來の緣日。十五はあみだと。悔中の書籍繰ひろげ。指を折り仔細らしき聲付。そも〳〵。ほうざうびくの淨瑠璃に曰く。阿彌陀と藥師は御夫婦と云々。即ち此病は一時も早く婿殿を呼入。夫婦になりたいと思ふ氣病に。少し外の見入ありと。いふより徳兵衛尤も顔。法印圖に乘り。稻荷大明神の使者。白狐の敎髮筋程も違はぬ禱。かぢも藥同然。神佛にもその役〳〵。熱病さまし冷すには。比叡山の二十一社。温むるには熱田明神。あたまの病は愛宕權現。足の病は阿閦佛。走り人竊盜動かせぬは不動の鉄縛。がいきを禱るは風の宮。老人達の老病には。白髭明神白髮藥師。若衆の病の禱には。大慈大悲の地藏菩薩。かるたのゑの付祈禱に。麻布の明神釋迦牟尼佛。どう取の禱は四三五六しや大明神。八ッどうなゝの社。別して此法印が得物。錢小判俵物の相場商い。上げふと下げふと高下は自由。持のお方が價上したい祈りには。强氣に上り高間が原の八百萬神。旗下衆のさがりを禱るは。高きお山を時の間に麓に下るさがの釋迦。やすいの天神。持と旗と兩方一度の禱には。高からず安からず中を取て。河内の國高安の大明神。法力のあらたなこと。たなな物取て來る如く。禱物は大方三十兩何時でも受取。いで一禱と錫杖振立。いらたか珠數。さらり〳〵と押もんだり。印をも未だ結ばぬに。病人重たき顔を上。なふ祈りもいらぬ祈禱もいや。おかちが病愈すには。婿取りの談合止てたも。あの與兵衛が若氣もゑ。借錢に責らるゝ。其苦しみが冥土の苦患。是ぞ呵責の責となる。ながれ勤の女子なりとも。與兵衛が契約の思ひ人を請出し。嫁にして此所帶を渡してたも。是非に婿を取りなば。おかちが命は有まいぞ。思ひ知たか思ひしれと。あたりをきよろ〳〵睨廻し。ゝづゝない苦しいと。悶へ悩なきそゝろごと。父は驚き色違へ。法印少しもおくせず。汝元來何處より來る疾く去れ〳〵。行者の法力つくべきかと。鈴錫杖をちりゝんがら〳〵。急々如律令と責めかくる。與兵衛むつくと起き。何を知つて去れ〳〵。どう山伏措おれと。落間にがばと突落せば。ヤ、山伏の法を知らぬか。印を見せずば置まじと。駈上りん〳〵鈴りん〳〵。引ずり下せば又駈上る。不動の眞言ぞたくたぐはつたりばつたりだ。引ずりおろされ山伏も。錫杖がら〳〵命から〳〵歸りけり。與兵衛親の傍に膝まくり。是れ親仁殿。今のそゝろ言耳へ入つたか。死んだ人を迷はせ。地獄へ落しても。此與兵衛が好た女房持せ。所帶渡すことは否かならぬか。ヤ姦しいあたり隣もある

ぞかし。余程にほたへあがれ。此德兵衛は。死んだ人の跡式とらひでも。五人七人は。もるりと過る術しつたれど。年忌命日もとふらひ。地獄へ落さず迷せまい爲に。名跡ついで苦勞する。わごりよが好たお山請出し。女房に持たせ。半年もたゝぬうち所帶破て。親方の弔ひもならぬ樣には得せまひ。扨は是非嬶取て妹に所帶渡すな。、渡す。ム能云ふた道知らずめと立ち上り。俯ぶけに踏のめらし。肩骨脊骨うん〳〵〳〵と踏付る。なふ悲しや淺ましい兄樣と。妹が縋れば。おかち構ふな。彼奴が腹の慰る程。存分に踏しや〳〵と。身も働かず座も去らず。妹堪へかねあんまりな兄樣。私は何も知らぬ者。死靈のついた顏して此よに〳〵いふてくれ。其からは商賣も精出し。親達へ孝行盡し。逆らふまいとの誓文立。それが嬉い斗に。病ほうけた此姿で。こはい〳〵恐ろしい死人のまねして嘘吐せ。父樣を踏づ蹴つそれが親孝行か。年よつた父樣目でも眩ふたら。それは〳〵。聞事じやないぞと。縋り取付泣わめけば。いき女郎め。吐すまいと誓文立てゝ口がため。憎いはうげた。死靈より此與兵衛といふ生靈の苦しみ。憂へておれと同じくがばと踏伏せたり。病疲た妹を踏殺すか。畜生めと取付父親はつたと蹴とばし。腹のいる程踏といふたな。是で腹をいるわいと。顏も頭もわかちなく。さん〳〵に踏む最中母立歸り。はつと斗り藥投すて。與兵衛がたふさ引攫んで。横投にぞうとのめらせ。乘り懸り目鼻も云はせぬ握り拳。ヤイごう洒しめ。だいばめ。如何な下人下郎でも。踏の蹴るのはせぬこと。德兵衛殿は誰じや。おのれが親。今の間に其胚が。腐つて落ると知らぬか。罰あたりおとましや〳〵。腹の中から旨で生れ。手足かたわなものもあれど。魂いは人の魂い。己れが五體何處を不足に生付た。人間の根性何故さげぬ。父親が違ひしゆゑ。母の心がひがんで。惡性根入ると云はれまいと。さす手引手に病の種。おのれが心の釼で。母が壽命を削るわい。おのれ先度も高槻の伯父御が。お主の金を引おひしと。よふも〳〵此母をぬく〳〵と瞞したなるたつた今兄太兵衛に行合。おのれが野崎のあばれゆゑ。伯父は侍一分たゝず。浪人し大坂へ下るとの便。已れが虛言が顯れた。其の時母がづか〳〵と親仁殿へ咄し。跡で知れては。扨は親子の言合せと疑はれ。夫婦の義理もかけはてる。內でも外でも己れが噂。碌なことは一度も聞ぬ。その度毎に母が身の肉を一寸つゝ。削で取樣な因果晒しめ。半時も此內に置ことならぬ。勘當じや出てうせう。出され〳〵と擲つゝくはせつ。たゝく片手に押ぬぐふ。涙手のひま

なかりけり。此與兵衛が爰を出て。どこへ行く所がない。ヲ、己れが好たお山が所へ出てうせうと。小腕取て引出す。ノフ兄様追出し私は此跡取こといや。堪へて進せて下されと取付ば。何知つてのいておれ。是れ徳兵衛殿。きよろりと見て居て誰れに遠慮。ヱ、はがいひ。殴き出して呉れんと。枴追取振り上くれば。ひらりと外しひつたくり。此枴でわごりよを打と。はた〳〵と打ちつくる。徳兵衛飛かゝり。枴捩とり。つゞけ打に七ッ八ッ息もさせず擲ちすゑ。はつたと睨む眼に涙。ヤイ木で造り。土をつくねた人形でも。魂入れれば性根がある。耳あらば能聞。此徳兵衛は親ながら主筋と思ひ。手向ひせず存分に踏れた。腹を借た生みの母に今の様。脇から見る目も勿体なふて。身が震ふ。今打たも徳兵衛は打たぬ。先徳兵衛殿冥土より。手を出してお打なさるゝと知らぬかやい。おかちに入婿取といふは。跡方もないこと。ヱ、無念な。妹に名跡續せては。口惜と耻入り根性も直るかと。一思案しての方便。あの子は餘所へ嫁入さする氣遣ひすな。他人どし親子と成るは。よく〳〵他生の重縁と。可愛さは實子一倍。疱瘡したとき日進様へ願かけ。代々の念佛捨て百日法華に成。是程萬面倒見て大きな家の主にもと。丁稚も使はず肩に棒。稼ぐ程遣ひはつく。己れ今の若盛り。一働きかせぎ。五間口七間口のかど柱の主人にと。念願を立てゝこそ商人なれ。たつた一間半かの門柱に念かけ。母に手向ひ父を踏。行さき偽り騙ごと。其根性がつゞいたら門柱は思ひもよらず。獄門柱の主にならふ。親は是が悲しいと。わつと叫び入ければ。ヱ、もどかしい徳兵衛殿。石に謎かける様に口でいふて聞く奴か。出てうせ〳〵。うぢ〳〵ひろがば町中よせて追出すと。又追取て母がつゝはる枴の先。怖ひめ知らぬ無法者。町中と云ふにぎよつとして。と胸つきたるけでん顔。なふ兄様出して我は跡に殘らぬと。縋る妹を押留め。きり〳〵うせう。枴が喰ひたらぬかと。振上こすり出されて。越ゆる敷居の細溝も。親子別れの涙川。徳兵衛つく〳〵と後姿を見送りて。わつと叫び聲を上げ。彼奴が顔つき背格恰成人するに從ひ。死なれた且那に生寫。あれあの辻に立たる姿を見るに付。與兵衛めは追出さず。且那を追出す心がして。勿体ない悲いわいのと倒ぜ伏。人目も耻す泣聲に。憎い〳〵も母の親。嗜む涙堪へ兼。見ぬ顔ながら仲上がり。見れども餘所の繪幟に。影もかくれて

吹きなれし。年もひさしの。蓬莨蒲は家ごとに。幟の音のざはめくは。男子持の印かや。娘斗の豐島屋は。亭主は外の掛一まさ。内のしまひと小拂ひと。油賣たり舞たりに。三人の娘の世話。まあ姉からと。櫛笥取出しとさぐしに。色香揉込み梅花の油。女は髪より形より。心の垢を漉櫛や。嫁入先は夫の家。里の住かも親の家。かがみの家の家ならで。家といふ物なけれども。誰世に許し定めけん。五月五日の一夜を女の家といふぞかし。身の祝ひ月祝ひ日に。何事なかれ撫つけて。髪引ゆづの妻櫛の齒の。ア悲し一枚折れた。惘れてとんと投櫛は。別れの櫛とて忌ことをと。口には言はず氣にかゝる。何ぞのつげのお櫛かや。掛も十をに七左衛門。大かた集て中戻り。ア、思ひの外早い仕舞。内の拂ひもさらりとしまひ。兩替町の錢屋から。燈油二舛梅花壹合。今橋の紙屋から通帳持て燈油一舛。當座帳に付て置。まあ洗足して早うお休息。明日はとふから禮に出さしやんせ。いや〳〵早う休まれぬ。天滿の池田町へ往ねばならぬ。ア きやうとい最ふ宜わいの池田町は北の端。近所の掛さへ寄たらば過てのこと。こな人何いやる。節季に寄らぬ金の。過て寄た例は無い。今日暮てから渡さふと詞つがふた。つい一走往てこふ。此うちかひに新銀五百八十目。財布の錢も戸棚へ入れて錠おろしや。やがて歸ろと立出る。申々そんなら酒一つ。姉それ燗して進じやと。立て戸棚へ德利から銚子へうつせば。ア、こりや〳〵燗せいでも大事ない。肴も盃も入らぬ。中がさ添て持て來い。夜が短かい氣がせくそこからつげ。あいとは云へどとどしでは手もとゞかねば立上り。つゞも受るも立酒を。お吉見付てそりや何ぞ。忌々しい子共は頑是がないにもせい。立酒のんで誰を野送り。ア、氣味わると。云はれて夫もちやつと腰掛取直し。掛乞に行門出にはか行の立酒。此世に殘らぬ〳〵と。祝ふ程なを哀世の永き別れと出て行く。母を見習ふ姉娘。夜るの襖をしき〳〵に。御座よ枕よ。蚊帳の釣手は長けれど。屆かぬ足の短か夜や。おでんをろくに寢させて。母樣もちとおやすみと云ひければ。ヲ、でかしやつた。父樣もまだ遲かろ。蚊帳の内から表は母が氣を付る。我身もねゝしや。いゑ〳〵。わたしは眠たうござらぬと。云ひつゝ眠るもおとなしゝ。此節季越にこされぬ河内屋與兵衛。手筈の合ぬ古袷心斗が廣袖に。提たる油の二升入。一しやう差ぬ脇指も。今宵こじりの詰りの分別。勝手知つたる豐島屋の。門の口窺く後より。與兵衛殿じやないか。ヲ、與兵衛じやが誰じやと。振返れば上町の口入綿屋小兵衛。ア こなたは順慶町へ

行けば。本天滿町親御の所へと云はるゝ。親御へゆけば追出した爰にはいぬと有。貴樣は留主でも判い親仁の判。新銀壹貫目。今宵延ると明日町へ斷る。〻爰な人はいきかたの惡い。手形の表こそ壹貫匁正味は二百目。今夜中に濟せば別條ない約束では無いかいの。されば明日の明六迄に濟ば二百匁。五日の旭がによつと出ると壹貫匁。元二百匁を壹貫匁にしてとれば。こつちの徳の樣なれど。親仁殿にひごうの金を出さするが笑止さに。こなた最負でせつくぞや。今夜屹度濟しやや。小兵衛こりや念いるゝな。河内屋與兵衛男じやゝあてが有る。鷄の鳴く迄には持て行く。眠むたくと待てもらを。はて今宵すまして入用なれば。明日又直に貸はいの。此方も商賣一貫目や。二貫目は何時でも。其男氣を見屆けたと。詞で與兵衛が首しめる。綿屋小兵衛は歸りける。與兵衛見事に請合は請合しが。一錢のあてもなし。茶屋の拂ひは一寸遁れ。拔差ならぬ此二百匁。有所にはあらふがな。世界は廣し二百匁なぞは。誰ぞ落しそふな物じやと。後を見れば小提灯。河といふ小文字は。此方の親仁南無三寶と。差たる店に平蜘蛛の。ひつたり身を付身を忍ぶ。徳兵衛は氣も付ず。豐島屋のくゞりそゞと明け。七左衛門殿お仕廻かとつゝといれば。是は〳〵徳兵衛樣。此方は未だ仕舞ず。天滿の端まで行かれます。私は取紛れお見廻も申さぬに。よふこそ〳〵。此際は與兵衛樣の事に付。いかひお世話でござんしよと。蚊帳より出れば。されば〳〵。御身は稚い娘御達の世話。我等は成人の與兵衛に世話を燒く。何れの道にも子に世話やむは親の役。苦勞共存せぬ共。引付て一所に有中は氣も落付。あの樣な無法者を勘當すれば。やけを起し明日火に入も搆はず。謀判似せ判。壹貫匁の銀に十貫匁の手劵して。一生の首繋がるゝ例もある事と思ひながら。生の母の追出すを。繼父の我等輕薄らしう留られず。聞ば順慶町兄が方に居るとやら。若此あたりへ狼狽て見へましたら。七左衛門殿御夫婦言合せ。父親はがつてん。隨分母に謝言いたし。胴姓骨入替。二たび内へ戻る樣に。御異見偏に賴み入。こちの女房お澤が一家一門皆侍。其習はかしか思ひ切ては見返らず。義理がたい生れ付其に似ぬ道樂者。本親の旦那もぎやうぎつよく。義理も情も知つたる人。二人の子供に心をつくすは皆故旦那への奉公。今與兵衛めを追出し。一生荒ひ詞も聞ぬ親方に。草葉の蔭より恨を受くる。無果報は此徳兵衛一人。推量なされお吉樣と。烟草に涙をぎらして。むせ返るこそ道理なれ。〻思ひやりました。こちのも追付歸られう

逢てお話しなされませ。いや〳〵何家も今夜のこと萬事のお邪魔。是此錢三百女房が目顔を忍び。つい懐へ入て出た。與兵衛めがうせたらば追付正氣に赴き。さつぱりと肌の物でも買おれと。ゆめ〳〵我等の名を出さず。七左殿の心付か如何なりとも。御機轉賴入ると差し出す。後の門口。お吉樣お仕廻かと。おとづるゝは女房お澤が聲。德兵衛びつくり。ハッ逢ふては氣の毒隱れたい。卒爾ながら御免なれと。かくるゝ蚊帳のうしろ影。是々德兵衛殿。我女房に隱るゝとは何事と。聲かけられて夫も敗もう。お吉もどまぐれ挨拶なく。そとには與兵衛。サア母のかまがわせた。何いはるゝとくるゝの穴。耳を付てゞ聞いたる。女房お澤腰打かけ。エ、德兵衛殿。七左衛門樣もお留主といひ。內のことはそこ〳〵に。何時あはふと儘の向ひゞし。互に忙しいきはの夜さ。爰へは何の用が有。惡性する年でもなし。ムサ又與兵衛めが事くやみにか。如何に繼しい子なればとて餘りに義理過た。しんじつの母が追出すからは。こなたの名の立ことはない。此三百の錢與兵めに遣るのか。つね〳〵に身をひづめ。儉約してあいつに遣るは淵へ捨るも同然。其あまやかしが皆毒飼。此母はさうでない。サア勘當といふ一言口を出るが其限り。紙子着て川へはまらふが。油ぬつて火にくばらふが。奴が三味惡人めに氣を奪れ。女房や娘は何になれ。ナ〳〵さきへ歸しやれと。引立る袖をふりはなし。エ、女房むごいぞやそうで無い。生立から親は無い。子が年よつては親と成。親の始は皆人の子。子は親の慈悲で立。親は我子の孝で立。此德兵衛は果報少なく。今生で人は使はすとも。いつでも相果し時の葬禮には。他人の野送り百人より。兄弟の男子に先與跡與昇れて。あつはれ死光りやらふと思ふたに。子は有ながらその甲斐なく。無緣の手にかゝらふより。いつそ往倒れのしやかになひが。ましでおじやるはと。又むせ返るぞあはれ成る。ア、與兵衛め斗が子では無い。兄の太兵衛。娘なれども。おかちはこなたの子でないか。サア〳〵早ふ先へと押出す。ヘテ去るなら連立ふ和女もおじやと引立る。母の袷の懐中より。板間へぐはらりと落たは何ンぞ。粽一わに錢五百。なふ情なや耻しと。我身を蔽押かくし聲を上。德兵衛殿眞平許して下され。是は內の掛の寄與兵衛めに遣りたい斗。我が五百盗んだ二十年添ふ中。隔心隔ての有やうに情けない。たとへあの惡人めお談義に聞樣な。しもりはんどくの阿房でも。あじやせ太子の鬼子でも。母の身でなんの憎からふ。いか成惡業惡緣が胎內に宿つて。あの通りと思へばふびんさ。可愛さは。

父親の一倍なれ共。母が可愛い顔しては。へだてた心に。餘り母があいたてない。がうばりが強ふて。いよ〳〵心が直らぬと。さぞ憎まるゝは必定と。態と憎い顔してぶつゝたゝいつ。追出すの勘當のと。むごふつらふあたりしは纖爻のこなだに。可愛がつてもらひたさ。是も女の廻り智恵許て下され徳兵衛殿。私に隱してあの錢を遣て下さる心ざし。詞ではけん〳〵と慳貪に云たれど。心で三度戴きし。何を隱そふあいつは立派好もする奴。取わけ祝月髪付元結を調へ。人交りも爲たからふ。生れて此かた節句〳〵祝儀缺ぬに此月斗。身祝ひもしてやりたさ。見苦い此耻辱を洒すも。お吉樣頼んで屆けん爲。まだ此上に根性の直る藥には。母が生肝を煎じて飲せといふ醫者あらば。身を八ツ裂も厭はね共。一生夫の錢金もじひらなかちがへぬ身が。子ゆへの闇に迷され。盗みして顯れた。耻しゆござると斗にて。わつと叫び入ければ。道理〳〵と夫の歎さ。子を持つものは身にこたへ。行末思ふお吉の涙折からに泣く蚊の聲も。いとゞ涙を添へにけり。祝日に心もない泣わめき不調法。其錢もお吉樣頼み。與兵衛にやつてお暇申しやと。いへ共女房涙にくれ。こな樣の遣て下さる其深い心ざしに。盗た錢がなんと遣りよ。大事無いひらに遣や。いや許して下されと。夫婦が義理の遣かた無さ。お吉も涙とゞめかね。〳〵お澤樣の心推量した遣憎い筈。爰に捨て置しやんせ。我が誰ぞ好さそな人に拾はせましよ。〳〵添ない迎ものお情。此粽も誰ぞ好さそな犬に。喰せて下さんせと。又泣出す二親の。心隅てぬくゝり戸も。子の不孝より落ちたるくろゝ。開て夫婦は歸りけり。父母の歸るを見て。心一ッに打うなづき。脇差拔で懐ろにさいたるくゝりさらりと開。つゝと入より胸もくろゝも落付。七左衛門殿は何方へ定めて掛も寄りましよと。余所の方から裏問ける。誰かとこそ思ふたれ與兵衛樣か。こな樣は仕合な。後共云はず好い所へござんした。是此錢八百此粽。こな樣へやれと天道から降ました。戴かしやんせ。なんぼ浪人でも極の日の賓。まんがなおろと差出せば。與兵衛ちつ共驚ず。是が親達の合力か。〳〵早合點な追出した親達が。なんのこな樣へ錢金を遣しやんしよ。いや隱さしやるな。先にから門口に蚊に喰れ。長々しい親達の愁歎聞て。涙をこぼしました。〳〵そんなら皆聞てか。能合點參りしか。他人でさへ目を泣きはらした。此錢一文も仇には成まい。肌身に付て一働。お二人の葬禮に。立派な乘物に乘せうといふ氣が無ければ。男でもくゐでも無。夫を御背なされたら天道の罰佛の罰。日本の神々のさか

爵が當つて。將來が能有まい。先戴いてと差出せば。如何にも〳〵能合點しました。只今より異人間に成て孝行盡す合點なれ共。勘心お慈悲の錢か足らぬ。といふて親兄には云はれぬ首尾。爰には賣溜掛の寄金も有筈。新でたつた二百匁斗勘當の許る迄貸て下され。それ〳〵〳〵。おくを聞ふより口聞。どこに心が直つた虛言にも金貸て呉とはいはれぬ義理。世間の義理を欠いても。金借て惡性所の拂いして。跡から段々行ふでな。成程金は奥の戸棚に。上銀が五百目餘。錢も有は有ながら。夫の留主に一錢でも貸ことはいかな〳〵。いつぞやの野崎參り。着物洗ふて進せたさへ。不義したと疑はれ。云ひ譯に幾日かゝつたやら。なふうとましや〳〵。歸られぬ內其錢持て。早ういんで下さんせと。いふ程傍へにじり寄。不義に成て貸て下され。ハテならぬと云ふにくどい〳〵。くどふ云ふまい貸て下されー。ヤ女子と思ふて弄しやると。聲立て叫くぞや。ヘテ與兵衛も男。二人の親の詞が。心根に浸こんで悲い物。弄るの侮るのといふ所へ行ことか。何を匿しませう。跡の月の二十日に。親仁の謀判して上銀二百匁。今晩限に借ました。ヤまあ跡を聞て下され。手劵の表は上銀壹貫目。借た金は二百匁。明日になれば手劵の通。壹貫匁で返す約束。夫よりも悲い

は親兄の所はいふに及ばず。兩町の年寄五人組へ。先樣からことはる筈。今に成て此金の才覺。泣ても笑ふても叶はぬこと。自害して死ふと覺悟し。是懷に此脇差さしは差いて出たれせも。只今兩親の歎き御不便がりを聞ては。死で此金親仁の難義に掛ること。不孝のぬり上身上の破滅。思ひ廻せば死るにも死なれず。生ては居れず詮方なさに見掛ての御無心ぞや。無ければ是非もなし。有金たつた二百匁で。與兵衛が命を繼で下さるゝ御恩德。冥途の底迄忘れうか。お吉樣どうぞ貸て下されと。いふ目の色も誠らしく。そうした事もと思ひながら。兼ての僞り是も又。其手よと思ひ返して。ヤ、まが〳〵しいあの虛言はいの。まだ尾鰭付ていはしやんせ。ならぬと云ふてはきつうならぬ。是程男の名利に掛誓言立ても成ませぬか。ヤはあ何とせう借ますまいと。いふより心の一分別。そんなら此樽に油二升取替て下さりませ。夫は互の商ひ內。貸借せいでは世がたゝぬ。成程つめてと賣場にかゝり。消る命の燈火は油量るも夢の間と。知らで升取柄杓取。後に與兵衛が邪見の刀。拔て待ども見ず知らず。覗ふて節句も御仕廻なされ。こちの人共割入て相談。有金なれば役に立ま い物でなし。五十年六十年の夫婦の中も。儘にならぬは女のならひ。必ず我を怨んでば

し下さるなといふ内に。燈油に映る刄の光お吉びつくり。今のは何ぞ與兵衛様。ヤ何でも御座らぬと脇差後に押隠す。それ〳〵屹度目もすはつて。なふ恐ろしい顔色。其右の手爰へ出さしやんせ。おつと脇差持かへて是見さしやれ。何も無い〳〵と云へ共。お吉身もわな〳〵。アこな様は小氣味の悪い。必らず傍へ寄まいと。跡退りして寄門の口。明て逃んと氣を配れど。ハテきよろ〳〵何おそろしいと付廻し〳〵。出合へとわめく一聲。二聲待す飛懸り取て引絞め。音ぼね立つるな女めと。喉笛の鎖をぐつと刺す。刺〻れて惱亂手足をもがき。そんなら聲立まい。今死んでは年はもいかぬ。三人の子が流浪する。其が可愛ひ死とも無い。金も入程持て御座れ。助けて下され與兵衛様。ヤ、死に共ない筈尤も〳〵。こなたの娘が可愛程。己も己を可愛がる親仁がいとしい。金拂ふて男立ねばならぬ。諦らめて死んで下され。口で申せば人が聞。心でお念佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と。引寄て右手より左手のふと腹へ。刺ては ゑぐり拔ては切。お吉を迎ひの冥土の夜風。はためく門の幟の音あおちに賣場の火も消えて。庭も心も闇みに。打まく油流る〻血。踏のめらかし踏すべり。身内は血潮のあかづら赤鬼。邪見の角を振立て。お吉が身をさく劍の山。もくせん油の地獄の苦痛。軒の菖蒲のさしもげに。ちゝの病はよくれ共。過去の業病遁れぬ。菖蒲刀に置落のたまも亂れていき絶たり。日比の强ぎ死顔見て。ぞつと我から心もおくれ。膝節がた〳〵がたつく胸を押しさげ〳〵。さげたる鍵を追取て。窺けば蚊帳の打とけて。寢たる子供の顔付さへ。我を睨むと身も震へば。つれてがらつく鍵の音。頭の上に鳴雷の。落かゝるかと肝にこたへ。戸棚にひつたり引出すうちがい。上銀五百八十匁宵に聞たる心當。ねぢ込ねぢ込ふとところの。重さよ足もおもくれて。薄氷を履火焔踏。此脇差はせんだの木の橋から川へ。沈む來世は見へぬ沙汰。此世の果報の付時と。内をぬけ出一さんに足に任せて。をしてるや。浪華の春は京にまけ。京は浪華の景色より。おとろみなる月なつかぐら。遊廓四筋は四季共に散こと知らぬ花揃。妓の風俗揚屋のかかり富士も及ばぬ戀の山。第一日本の名所なり。一年三百六十日。紋日が三日足らぬとて。くつはゝなげく〻女郎は其程客に厄介を。へんがへに行客も有。好んで頼み賴さるゝ。客は一際いかつげに。籠を飛する揚屋客。扇で忍ぶ茶屋の客。一座あそびは女房めく。肩で風切からぞめき。位を問は田舍客。寢て物語る馴染客。太皷過てと囃くは女郎の手もめのふる廻客。

親おや方の持客有り。我身上のめつきやく有。飛脚も交り行通ふ。道の間をしばらくも。口たゝ留は耻らしく。役者物まね地の物まね。小歌淨瑠璃口てんがう。西口東口々に。行も歸るもさはり無き。夕べ〳〵の大寄は幽なる世の績なり。されば山本森右衛門。與兵衛が身持の知せに慈さ。暫く主人に暇請大坂へ立越しが。女殺て金取しも。慥に夫とは知れね共。衆目の見る所與兵衛に指差す身の放埒。若やと詮義も寄付ねば先さ〳〵尋ね廓の内。東口にて尋しにそんじよ其處とは教へしかど。何れも同局のかゝり。爰や備前屋。是や教へ備前屋かと。見まがいたゝずみ居る折ふし。手にかさ高な文持て。西の方からくる禿。是々物問ふ。備前屋と申す傾城屋はいづかた。其御内に松風殿と申す傾城。御存じならば教へてたべ。我等當所不知案内頼入とぞかたくろし。ヲ去さひらしい物の言樣。備前屋は此家。西の端に戸のさいた。客の有る局が松風樣でござんす。コレお侍樣。左の足あげさんせ。ソレ〳〵又右の足も上さんせ。チ、能上さんした。いかい世話のと。弄てびんしやん行過る。所柄とて人に馴れ氣輕い奴と打笑ひ。教し局に立寄ば。内に火影は有ながら戸口ひつしと立詰たり。扨こそ客は與兵衛に極る。出るを捕へ逢はん物と。待間程なく戸を開き。編笠かつぎ立出る。すかさずひすとひん抱かゆる。女郎も次いてこりや誰ぞ。卒爾せまいと引別る。苦しからず卒爾で無。己れ與兵衛め匿れたらば逢ふまいかと。笠引ちぎり顔見合せ。ヤアこりや與兵衛で無人違。まつぴら〳〵面目なやと。腰折て手をすれば。さやつも忍びの懸やらん。うなづく斗顔かくし東の方へ走行。河内屋與兵衛に深い中と音に聞松風殿。昨日にも今日にも。與兵衛は爰元へ參らずか。氣遣の無用事有て尋る者。隱されては彼が爲ならず。サア正直が聞たい〳〵。まちッと先に見へまして。是から直に曾根崎へ。叶はぬ用とて御座りんした。何じや曾根崎へ。南無三寶遲つた。拙者も跡から參らずば成まい。次手にも一ッ尋ませう。五月の節句前か。後か。六月へ入ては漸々六日。其間に爰元で金銀の拂ひ。金澤山に使たことは御座らぬか。是も隱さずお知らせなされ。どうござんすぞ金のことは存やせぬ。やり手にお問なさりんせと。いひすて局についと入る。是は我等不調法。よしそれとても與兵衛に逢へば知るゝこと。道も知つたる曾根崎へ。たつた一飛一走と尻三のづ迄ひつからげ。もみにもふでぞ。君を待夜はよやよや。西も東も南もいやよ。兎角待夜は北がよい。さきにも待は待なから。こちからひたと行通ふ。道の犬さへ

見知る程。うつゝ扨せし河内屋與兵衛。小菊にあふせを頼ものかりよ。新町の花を見棄て硯川。爰の花屋にたゞり寄。後家のお亀出迎ひ。たま〳〵見へるお客にこそ。よふお出がさうあうなれ。與兵衛様は爰が家。ちと風變り御出を止て。戻らしやんしたか。小菊様呼びましや。内は上下座敷もつまる。濱の床几で大〳〵酒盛。きり〳〵と呑かけましよ。小菊様ヤ爰へ行燈に油さしや。油の次手に油屋の女房殺。酒屋に仕換て幸左衛門がするげな。殺手は文藏憎くいげな。與兵衛様まだ見ずか。小菊様連ましてちとお出。やれお盃持てこいとたつた獨でべり立る。後家たしなめちと人にも物言せい。生れて與兵衛こんなむさい床几の上で。酒飲だ事なけれど今日は許す。東隣借足して。與兵衛が座敷分に一つこしらや材木大工諸色諸入め。見事に我等仕つるきつい物か〳〵。ヱ、げびた此蒲鉾の薄い切様はと。潜上たら〳〵暴酒。しばらく時をぞ移しける與兵衛爰に居るか。知す事が有て來たと。刷毛の彌五郎床几に腰かけ。我を侍がさがすぞよ。ヤしてそりやどんな侍がと。胸にぎつくり横たはるも。心に包む惡事の塊。俄に顛倒うろ〳〵眼。ヤきよろ〳〵すないやい。昨日から兄が所へ來て居る侍じやとやい。ア、夫で落付た高槻のおぢ森右衛門。逢ては難義爰へ尋て來もしれぬ。早ふはづして逢共無ぞ。思へど急にも立ねば。何がなしほにと見廻し〳〵。ア、思ひ出した。新町に紙入忘れて來た。中にうめく程金入て置た。つい一走り取てこふ。刷毛も來いと立出る小菊引留。ア、さは〳〵と何じやの。有所の知れた紙入。明日なとゝらんせ。ヤそうで無〳〵。ふところが重とふ無ければ。つんと遊ぶ心がせぬと袖引放し二人連。根から忘れぬ紙入の。からせい吐て急ぎける。熱い茶四五服飲程の間もすがさず森右衛門。行燈目的に花屋の門口。花車に逢ふ爰へ〳〵と呼出し。河内屋與兵衛が跡追て參つた。二階に居るか下座敷か。罷通るとつゝと入る。是々申。新町に紙入忘れたとて。たつた今お歸り。何だ歸た。未だ梅田橋越か越さずか。是はしたり又跡へん。然らば明日にも與兵衛が參次第。酒でも飲せ爰に留置き。早々本天滿町河内屋德兵衛方迄屹度知らせ。只今參がけ櫻井屋源兵衛へも立寄。吟味致せば五月四日の夜。大金三兩錢八百請取たと有。爰元へは何程拂た。隱しては其方が爲にならぬ。直すぐに言へ〳〵。私方へも五月四日の夜に入て。大金三兩錢壹貫文。ヲ其夜は何を着て參つた。廣袖の木綿袷。色は惜花色か。しつかりとは覺せぬ。ムよい〳〵。はいれ〳〵と言ひすてゝ。元來し道を引返し

又新町へと。變生男子の願を立。女人成佛誓たり。願以此功德平等施一切どう發菩提心往生安樂國。釋の妙意。三十五日お逮夜の心ざし。お同行衆寄集り勤も已に終りける。中にも同行中の老体。帳紙屋五郎九郎。昨日今日の樣に思ひしが。早三十五日の逮夜に罷成。二十七を一期として不慮の横死。平生の心立人に優れ。上人の御恩德報謝の心も深かりし。此世こそ劒難の苦はありとも。未來は諸々の業苦を除き。本願往生疑ひはよも有まじ。此御さいそくに心驚き。彌〳〵一遍の唱名も悅んでお勤なされ。必ず歎せらるな七左殿殺手も其内知ませう。たゞ御息女の介抱が第一。先立人も夫をこそ滿足と。しめせば有がた涙ぐみ。左樣とも〳〵。お吉がことは思ひ忘れ。是も如來のお蔭と。信心堅固に悅びを重ね。行住坐臥に稱名は欠しませぬ。去乍乙のおでんめは二つ子。乳が無てはと不便に存じ。死だ翌日金付て餘所へもらわしをす。姉は能いひ聞せたれば合點して。香花の絶ぬ樣に佛壇について斗いますが。なふ中娘めが朝から晩迄。母樣〳〵といふて泣居ます。是には困果ましたと。ちやつと後の壁向て聲を呑だる啜泣。尤もさこそと同行衆も。濕さぬ袖は無りけり。折節居間の桁梁。通る鼠の怪しからす。蹴立蹴かくる煤埃。故紙をちらりと蹴落して鼠の荒は靜りぬ。ヤレ何やら落た七左殿。誠に是はと取上見れば。半切紙に一ッがき。十匁壹分五厘。野崎の割り付。五月三日と斗りにて。誰から誰への名宛もなく。色こそ變れ所々血に染つたる書出し一通。不思議の物と手に取廻し。是は誰やら見た手じやはいの。我等もどうやら見た手の風。ア、河内屋の與兵衛〳〵。それよ〳〵と四五人の。口も與兵衛に極れば。思出して七左衛門。誠に死た亡者が物語。四月十一日我等夫婦。野崎參致せしに。皆朱の善兵衛。刷毛の彌五郎。河内屋與兵衛三人連で參りしと咄せしが。其割付に極た。お吉を殺手も大方是で知ました。三十五日の逮夜に當り。鼠が是を落すといふも。亡者が知せに疑ひ無。是も佛の御恩德。ア、南無阿彌陀とひれ伏て。悅ぶ心ぞ道理なる。氣味惡乍をそ〳〵の。訪音づれも我仕たと人に言れと覺られと。一倍大柄そらさぬ顏。河内屋の與兵衛でやすとつゝと入。つい三十五日の逮夜に成りましたの。殺した奴も未だ知れず。氣の毒千萬。したが追付知れましよと。我と口からむかふの吉左右。七左衛門尻ひつからげ棒追取。ヤイ與兵衛。女房お吉を殺したな。おのれは爰へ縛れに來たか。逃れはないと棒振上る。ア、七左衛門聊爾するな。シテ己が殺した其證據は。いふな〳〵。野崎參りの割

付。十匁一分五りんといふ書付。所々に血も付て己が手に紛い無。此外に證據が入か。同行衆捕て下されと。つかみつかん其勢。南無三寶現れしと。突上る胸の動氣じつと押へて苦笑。此廣い世間。幾人も似た手が有まい物でなし。野崎參りの入用は己が奢。割付も何にも知らぬ。よい年をして馬鹿ひろぐな。己等迄も同樣に立騒いで何と仕居。まつこうすると。摑み付を取て投。寄ば蹴倒し踏こかし。一世一度の力の出場。棒ねぢたくり一振ふればわつと逃る。隙を伺ひ逃とすれば。ソリヤ逃すなと追取まく。小庭の内を追つ返しつ。二三ど四五ど隙を見合せ。ぐらりぐらりと逃出る。門の前に兩三人どつこい捕たと。胸がい攫んで捻すゆれば。撿非違使の別當大理の廳の官人なり。跡に續ておぢ森右衛門聲をかけ。最前より各表に立玉ひ。家内の一々殘ず聞屆けられしぞ。必ず未練に陳ずるな。是非も無ナ世間の風説。十人が九人おのれを名ざす。聞度に此おぢが心の中を推量せよ。事顯れぬ先遠國へも落すか。さなくば自害をすゝめ。耻を隱しくれんと。新町曾根崎行先〳〵を尋ても。跡へ廻り跡へまはり。出合ぬは己が運の極め。それ太兵衛其拾是へ〳〵。則五月四日の夜着し出たる己が拾。所々のきは付こはゞり。大理の廳より御不審。只今證跡の實否。己が命生死二ツの界成ぞ。誰か有る酒々。あつと云より銚子燭鍋。手々に引提さら〳〵さつとこぼしかけ。かゝる甥持弟持心を碎く涙の色。酒潮變じて紅の血潮。伯父甥顏を見合て。あつとより外詞なく惘れ果たる斗なり。與兵衛覺悟の大音上。一生不孝放埒の我なれども。一紙半錢盗といふ事遂にせず。茶屋傾城屋の拂は。一年半年遲なはるも苦にならず。新銀壹貫匁の手勞借り一夜過れは親の難義。不孝の咎勿体なしと。思ふ斗に眼付。人を殺せば人の歎。人の難義といふことに。ふつゝと眼付かざりし。思へば二十年來の不孝無法の惡業が。魔王と成て與兵衛が一心の眼を眩まし。お吉殿殺し金を取しは河内屋與兵衛。仇も敵も一ツ彼岸。南無阿彌陀佛と云はせもあへず。取て引ッ敷繩三寸に縛上れば。早町中が騙付け〳〵。すぐに引立引出す。果は千日千人聞。萬人聞ば十萬人殘る方なく世のかゞみ。傳て君が長き世に。清からぬ名や殘すちん。

女殺油地獄終

宵庚申

上　卷

近松門左衛門作

花のお江戸へ六十里梅の難波へ六十里。百二十里の間の宿都離れて遠江。濱松の一城主淺山殿の御在國。町家〳〵の賑ひ商ひにたゆみなく。武士は弓馬に怠らず日ませ〳〵のお鷹狩。上一人の屬みより犬も油斷いならざりし。お家相傳の弓頭坂部郷左衛門六十の齡の夜晝なく。お側去らずの野出頭今日も鷹野のお供にて。留守の邸い大手の見付お鷹歸りの御入とて。晝當場より先案内給人若黨お出入の町人迄。降つて湧たる忙がしさ御成座敷のうへ壁。床に掛物臺子の埃はいつ拭ふつ。お庭の掃除ぞつさ草引薄茶挽。茶道い引木にもまるゝ。實誠忘れたりとよ門の盛砂。小者い箒にもまるゝ。臺所の板本にい青物の淵魚鳥の山。献立い三汁九菜。おちた肴と吟味の役人。こりや目出鯛と三枚におろし山葵い八百屋が請取。南京の皿蒔繪の家具善盡したる饗應なり。組下の二ばんばへ金田甚藏岡草右衛門大橋逸平。打揃ふたる血氣ざかり立のけのんこのあたまがち。裙いおるすの勝手見廻。い

づれも御苦勞〳〵。今日ハお鷹野より直ぐお腰掛らるゝとな急なお成で嘸取込。お料理組もう出來たの早し〳〵。我々も幸ひ非番用あらば遊慮無用と挨拶口々。座敷口より小姓山脇小七郎。生花屑と花盆に花の露うぐ前髪ざのり。する〳〵と立出で。是ハ〳〵日比の御懇意お揃ひなされての御出で。主人鄕左衛門嘸滿足。唯今の殿樣前代と違ひ何角に付て輕ひお身持。壁に馬乘こけし今日のお成。主人ハ御供我々が當惑掃除等もそこ〳〵。書院の寫架のざの石。活花も手づゝながら間に合するも奉公。御内見の上御直し下されと詞も風も出過ざる。若衆とぬこの味噌の味ハ屋敷に極りし。金田甚藏岡大橋何の〳〵君のお手際解事が有ふの。去りながら人に心と盡させ無下ない心が一ッの庇と。目顔も明ぬ取込みに頼で睨みつ袖引つ。手の中つまむも一ひのし古ひ仕掛が田舍なり。坂部鄕左衛門衣服の奇麗も世につれて戒むるとハなけれ共。上に從ふ木綿羽織に紺股引。鷹野出立のりゝしげにすた〳〵と立歸り。家來共掃除ハ出來たの。ナアいづれもお見廻過分。いやさ〳〵年ハよるまい物。岩松村岩水寺の門前よりお暇受け。たつた一飛と思へども氣情も足も心弱り。去り乍ら殿にハ今一たぶし遊ばし御入有ぞ。急事ハあらない先お献立と一見と。長々と書付たる半讀みさし。大きにたまげ是やなんじや。殿の御膳ハ一汁三菜と先達て云ひ越す所三汁九菜の魚鳥づくし。身が身上と板本で切叩くこの此献立ハ誰が指圖ど。以ての外の不機嫌に頭も光りちらこのせり。小七郎温和に憚りながら此義ハお侍中の差圖ならず。二三日以前よりお長屋に逗留致し罷りゐる。大坂の住人鞠油掛町八百屋半兵衛と申して。元ハ御當地遠州生れ私とハ腹がハりの兄。樣子あつて五才の時大坂へ立こへ。町人に奉公し商人の裝手と成り。今の親ハ八百屋伊右衛門。實父山脇三左衛門ハ私が生れし年相果。當年十七年親の墓への年忌まいり。私事も懷のしく召使いるゝ御主人へ。御禮も申たしと逗留致せし兄半兵衛。商賣ハ八百屋殊更料理さゝ。幸と今日の御献立と致させし不調法ハ私。お目出度き折ゐら御機嫌と直され。兄へも御逢ひ下されのしと恐れ入たる謝罪に。主人の顔も打とくれば。是半兵衛殿能き折のお目見へ。お献立も仕直すため早う〳〵と呼立る。聲と力に兄半兵衛魂ハ武士なれど。三十余年町人に業も姿も染付し。料理はのまとのうそめに浮前と云へば氣もおくれ。臺所の板敷けつまづくやら滑るやら。はふ〳〵這出で手とつのへお國のは家風も存せずお献立と致せしハ無調法。先達てお使に一汁三菜との浮説なれども。

大坂藏屋敷留主居方の振廻でも。隨分輕いが二汁五菜結構にんだん〳〵。朝鮮人の饗應みだうへも雇われ。七五三五々三山影中納言の家の切うた。料理一通りん承り傳へしもへ申しても大名の膳部。よもや一汁三菜とんお使の聞あやまりと。云いれぬ念と入過しん猶無調法。お好みの一汁三菜我らが手際で。さり〳〵しやんと切立焚立鹽梅能の浮機嫌よき浮意と松茸。つけ竹の子なまにういらぬ仕樣が秘密と。口も料理の鹽梅加減鄕左衛門打笑ひ。ゝ、山脇三左衛門が世悴なれば身が爲にも家來筋。親の廟參氣特〳〵。幼少より他國に育ち當浮代の作風儀知らぬん道理。料理ん勿論衣類諸道具惣て無益の費お嫌ひ。上方でも風聞んないう去年十月高師山のお狩場。身が相役佐野文太左始めての浮供に縮緬の羽織着召れたと。殿が宏ろ〳〵と浮覽なされ。縮緬ん風にしぶき面倒な。重ねておけろ是と呉るとの浮意なされ。浮手づうら下された召換の木綿羽織。さしもの文太左はつと赤面。其後此事と工夫すればお供に參る文太左。縮緬の羽織着めされふ樣がおりない。兼て文太左にお示し合せ諸家中の見るまへ。木綿羽織と下されしん美麗浮停止とんなく。自然者りと止る一家中への浮意見。夫と察せぬは家中の二番ばへ達のざまと見よ。木挽町堺町の役者うらつりとる衣紋付。おのが身の分限も知らず。一がいに殿がお客い〳〵と勿体ない影言。綾錦と召れてもお大名綿服と召れてもお大名。齊藤別當實盛が最後に錦の直垂ん着たれども。源氏と捨平家へ返忠の武士心ん汚れし襤褸同然。又佐々木源藏ん二君あも仕へず襤褸の肩と裙に結び。賴朝の御代と待しん心の錦。今の武士の美麗と好むん實盛。佐々木が遺風と芳しと思召す。此殿の浮行跡ん下と寛げ世と豐に。賣買と安くせん爲の御儉約。武士ん元より町人の其方等迄此恩と忘るゝな。朝夕の御膳部も一汁三菜。酒も數と定められ三盃限り。今日のおもうしも麁相程御意に入る献立も書に及ばず。コリヤ食ん赤まじりの古臭いとすつくりと焚せ。ふき立汁に小菜のうのし向濱ん おろし大根 鰯 鱠。燒物んひろの酢いり夫も二ッ切。引て古茄子の香の物扨ひらにんチ、それよ。家來に持せし山の芋是へ〳〵と呼出せば。五尺斗りの山の芋仲間二人が指荷ひ。料理場の板敷へ拡と放して舁あぐれば。半兵衛横手と打扨もづなし。御當地ん芋所の一生の見始め。大坂で見世物に致したら錢銀の掴み取。第一お家の吉相何故と申すに今日は殿の御成り旦那の御出世。追付山の芋のら鰻にれ成なされふと。輕薄ぬらくら口に鰻の油とろりと乘掛れば。されば〳〵今日の仕合

せ。手下の百姓殿のお成りと聞付。身が離るさの道料理に爲よ迚くれしは幸ひ。今日の御馳走これ一種。お身が自慢の庖丁隨分切形と出のしてくれ。頼む〳〵と詞の下お成門の貫の木の音。すは殿の御入と聞けば。郷左衛門も次の間に袴改めお迎ひとて出ければ。山脇小七岡大橋金田も續て急ぎゆく。牢兵衛料理に心は忙くうつたり舞たり身は一つ。薄刃疋取り五尺の大芋三寸斗り切調へ。つい皮むいてちよき〳〵〳〵くず醤油の出し鹽梅煮うたは急く。殿のお顏も拜みたし座敷口より指覗けば。御城主も股引がけ上段に若玉ふ。一間隔て、近習の人々鷹匠犬引列卒足輕。玄關の小庭に居余り。臺所口と押通り長屋〳〵と休息場。奥にゝ料理の勝手と急ぎ。主郷左衛門殿の御膳目八分に持出れば。思ひ〳〵に給仕の作法。お汁がのゝるのへ食繼。初献の肴は鮒の足一さし當の引重箱。二献めも御機嫌よくお盃がのゝつて平の蓋。有がたがための臺引物。定めの通り御酒三献吸物ゝ蒸蜆。思ひの外の無馳走に上にゝ御悦喜納の盃。坂部もてうど下されて首尾よく御膳ゝとれにけり。郷左衛門板本に立はだかり牢兵衛と睨付。今日の料理ゝ芋一種太い所を御目に悪るが御馳走。何樣に切ばとて五尺余りの大芋。一寸足ずに切り辨く言語同斷手打にする奴なれども

他國者と云ひ御成の時節。屋敷に叶ゝぬ出てうせべいと往詰つたる腹立ゝ詞少なに凄じゝ牢兵衛膝も動さず是ゝ旦那の御意とも愛へず。今日の御料理隨分切形に氣と付。心一ばい出のせしと一分自慢。御褒美ゝなされいで存じの外の浮叱り。惣じて貴人大人へゝ何に限らず。斯樣の珍しき物お目に悪ぬが料理のならひ。大名高家ゝ大樣にて一度お目に振れられては澤山に有る物と思召し。隣國のお出合にも身が領内には。珍しき山の芋有などとお國自慢のれ咄しの上。ふと餘國より浮所望の時跡へも先へもいのず。國中と尋ねても有合せず。自然殿樣と虚つきにして退る。そこと存じて常の如くの調味は旦那へ御奉公と存せしに。浮機嫌に違ひしは身の不仕合せ如何樣共浮存分に遊ばせと。どこやら詞のひつはなし殘る所が武士氣質。郷左衛門口あんごり。こりや尤〻尤あやまり申した〳〵。其方が云ひ分眞直に浮前へ申すが又ば馳走。やれ〳〵〳〵山の芋で足突たとどつと笑へば。早お立とお供廻りが振出す毛鎗臺笠立笠大鳥毛。乘物引馬嘶き立浮城内迄お禮の供郷左衛門もお輿にそひ。暮ぬ間の浮歸城と氣も夕陽の入日影。座敷の仕廻は侍がた庭の締は中間小者。役め〳〵に立別るゝ。臺所には牢兵衛一人庖丁生箸薄刃俎板取片付煙管くはへて吹

く息に鉄扇が綻と延しけり。二番ばへ共はら〳〵と立寄り。拙者らは獅左衛門組下の弓役共。ゆ身は山脇小七郎の舍兄とな。早速の無心弟の事と頼むも馬鹿らしけれど。前髪姿に神ぞ瓜先よりぎり〳〵迄打込み。毎日〳〵しづ心なき玉章奉書の代も五百目斗り。身上と紙に打こんでもつれない小七郎。兄き是非所望申した。是軍右衛門がねまり申して手とつのへるこりやさ。拜み申す呉申せとたゞりのゝれば。甚藏逸平。コリヤ牛兵衛おゝともつたらむつのしいぞ。外方にも惚人が有る奉書代は愚な事。君に掛つて壹貫五百が外郎賓だ此甚藏。弓矢八幡身にくれろイヤ此逸平にくれろふと。耳際に噛付ごとく惡風吹のけ眼もくらみ。前後忘ずる斗りなり煙管も放さず牛兵衛大あぐら。御城下のならひ衆道御法度。おゝと云へば弟が首が御坐ちぬいいの。イヤ〳〵當國は女の淫亂は下々迄御せい道衆道にゝお搏ひなし。三人の内どれへなりと魂すへて返事せろと。もやつく後れ小七郎。是まで請し文一抱へ牛兵衛が前におき。兄者人の手前も耻ゐしながら斯なる上は隱されず。數ならぬ私にお執心とは振袖の身の思ひ出添いは山々なれど。獨ならず彼方此方の文の數。無下に返すも情しらずと請取ては量ながら。一通も封と切らぬがいづれも樣への立分。誰樣に隨ふ心もなし。

兄牛兵衛の存じられし事でなし。此文封の儘わ御返辨遂し切て下されと。男色たてぬく詞の優しさ其いきのたに猶なづむとしみしたゝるふ取廻せば。牛兵衛見のね〳〵聞分もないあた〳〵。形こそ町人心は侍拙者が目利で惚人の内へ遣ませう。コリヤ小七郎裝束せいと心と目にて知らすれば。あつと心得點頭て部屋に入ば。牛兵衛多くの文の上書讀み。〳〵皆おの〳〵の名書此一括りの上書に。小一兵衛とは誰事御存じないのと問ければ。三人共口と揃へ。其小一めは此邸の中間。〳〵慮外な下主めが。遣おつたいと似笑ふ。イヤそうで御座ちぬ此道に高下はない。其小一兵衛も呼出し幷べて置て念者に頼ひ。イヤく下主め。身なぞと同座に置奴でない。殊に留主やら顔も見ず無用〳〵と云ふ所へ。山脇小七郎白小袖に淺黄上下覺悟極て座につけば。牛兵衛は取敢ず肴だいの三方に扳身二口弟の前に置。惚手は四人はれられては弟一人。何方へ進せても殘る三人の恨み。此兄は他國住居行末も氣づのひ。いやとゞはさぬ御所望歴々のお侍。町人風情に手と下てのお頼みのつひきならず。弟に惚悟させての死裝束表面斗りの戀慕でなく。未來までも小七郎不憫と思召すならば此場にて指違へ。人の擇はぬ未來での念者若衆。弟とやる。何方なり共兄弟の契約〳〵と三人と

脫付る。思ひがけなさ扳身の盃。死裝束に吃驚して。へゝん〳〵と咳に紛らし身せゝりしぐつと云ひ手もなのりけり。御門脇の長屋より紺のだいなし。裙七の圖まで引のらげ一ムりふつて振出すは。戀にこひとや小一兵衛三人の鼻の先尻つき出してのつくばひ。兄御牢兵衛様のお手前もゃお耻のしいべいながら。小七様にとんと打込み二合半のもり切おたい。咽につまつてぎつち〳〵てきないこんでゞはりまする。今日君がお情とつん出して。未來では拙者めとお念者になさるべいとは有難いやら悲しいやら。ち〳〵唐がらし五ッ六ッのふつても。こんな熱い涙は出ませぬでゞはりまそるでゞはりまするとと。白刃と取て立よれば小七郎も引よせてすはやと見へし刀の中。半兵衛飛入りコリヤ狂氣したの小一兵衛と二人と左右へ引分る。コレヤ上方のお旦那糟味噌汁の御恩にのへたお若衆。爰で死ねば心中が見へませぬ。是非に死なせて下されと立上ると引伏せ。男氣見へた小七郎に誠の惚人はそち一人。爭ふ者が有てころ大事の弟と殺ふづれ。爭ひ手のない若衆山脇半兵衛が挨拶。向後兄ぶんに頼んだぞゝはつと悅び小一兵衛。お侍方と同座のならぬ奴めが。武士に劣らぬ魂故。結構なお若衆様の兄様とは忝けない〳〵眞加ない。手付に一寸ほてくろしい事御めん〳〵。半兵衛様も氣とお通しとべつたり抱きつき。紺のだいなし白ひくに黑白推の兄弟なり。岡軍右衛門はうのい惜氣くわつとせき コリヤ下郎め。見苦しい置おれと肩と取て引退れば。コリヤ何なさるゝ、聞へたお取持の御酒が過たの。ゝ合點〳〵流石二腰の御心がけは格別。柔術の稽古遊ばすな。無調法ながらお相手と座興にもてなし。ずつと寄て一當あて引うづいてうんと投。ゝ〳〵〳〵こりや鹿相でゞいりまするでゞはりまするとと空伴爲。甚藏逸平堪られず一度に寄て胸ぐら掴み。ぞんざいなる小丁稚め朋輩となせ投た。返報に砂のぢちせんと引立る。扨々お心がけのよい。お前方もこりや柔術のぞりやお相手と立柏子。二人が息合はつた〳〵と蹴のへせば板敷より眞逆様ゝ〳〵〳〵〳〵こりや又鹿相ぼめん〳〵と云ふとしは。三人ぐず〳〵起上りェゝぞんな所へ給仕に來て。酒もつて尻踏れたと袴の腰の痛い顏。酮へてこそは歸りけれ。半兵衛ぞく〳〵小氣味よく。扨も手際小一兵衛。我は他國便なき弟が事頼む〳〵。今日の料理の御褒美に二人が事と旦那へ訴訟。裾柄晴て念比さする其中立は半兵衛が。八百万代の神のけて結ぶ契ぞ

中之巻

五月雨はゞ懸幕はれて今は秋田のおとし水。軒の玉水とく〳〵ござれ繁くござれば名の立に。玉水近き山城の村は上田に家富て。庄屋に並ぶ茅屋根も内温うに下女。並んでつむぐ綿車。手廻りもよくいくはへこの庭に五つのたなつ物。積む蓬莱の島田氏。平右衛門と云ふ大百姓。妻は去年の秋霧ときへても殘る娘二人。惣領輕に入婿と鳥飼より呼迎へ。妹千代も大坂にれつきとしたる婿とつて。身の入まひは上田の田畠の世話とやさやめば。万事限りの俄病ひ姉のお輕は側離れず。臺所には女子共。なんと今朝うら仕事のはうもいたでいないう。些休まふ。お竹お鍋と呼つれて。思ひ〳〵に立出る。親のすや〳〵假寐の臨と窺ひ女房は。心忙く奥より立出で。是々臺所に人が獨もない。連台平六殿は淀川筋新田開の御訴訟に。大事の病人振捨ての京登り。男共は皆野へ行く。憎い女子共。我見る前でいちよびのいして一寸立ば早何所へ。大切な主の煩ひ藥一ッ温めふ共せぬ。下々にい何が成圍爐裏の下焚付ぬう。次郎よ〳〵と呼廻す門の口。駕籠昇据て申々。大坂の新鞠八百屋伊右衛門様のうちと。駕籠の戸明れば打凋れ目元しぼるゝ縮緬の。二重廻りの抱帶涙の色に染うへて。な〳〵〳〵出れば駕籠の者。偖に御屆け申したと言ひ捨歸るも足早なる。親の家さへ女氣の亭居も高く越のねて。佇立む有樣姉い見つけ。ヤアお千代おじやつたの。定めて御病氣の見廻ならめ。よふこそ〳〵何故駕籠の乘留やらぬ。他外でもあるやうに客人がましい。酒一ッ進せて去しやいの。それ呼戻しやと言へ共妹い差俯むき。歎けば共に歎のれてヲゝ道理〳〵疾知らせんと思ひしに此病ひでい死なぬ。氣のとりにくい舅姑持たお千代。婿半兵衛も忙しい時分。聞たり共自由に來る事い成まい。案じさするも不便沙汰するなとの。病人の氣にもさのらられず。高麗橋の伯母様常磐町へも知らせぬ。氣遣しやんな京の御典藥に換てのらめつきり藥も廻り。今朝も粥と中がさに三よそひ。病い請取て愈すとのお醫者様の請合い本復もおなじ事。和女の顔御覽なされたらいよ〳〵父様の病ひいすつぺり愈ちふ。嬉しい〳〵お目にのゝりやと有ければ。父様いお煩ひの知らなんだ〳〵。何時のうらの事でござんする。ヤ何じやお煩ひ知らぬの。そんなら和女何しに來た何悲しうて泣ぞ。耻のしや又去られてと顔押隱しひせび入る。姉も懸く顔に血と上げなふお千代。五度三度の聟入嫁入も世に有る慣とい云ひながら。惡い事い手本にならぬ耻のしい〳〵と。口で云ふ斗りが耻と知つたと言れふか和女もうる〳〵三度の嫁入。尤始めの男道修町伏

見屋の太兵衛殿。心ぶしやうに身体と持くづし。たゝずみもない樣に成果あのぬ別れ。其次ゝ死別れ互に難ゝなけれ共。人ゝ和女の辛抱がないもへに。去られた〳〵と批難付。此度の嫁入も追出さるゝに間ゝあるまい。忘れても嶋田平右衛門が娘の風下に居るなと。娘持た人々ゝ寄合茶呑咄にも和女の噂。ま一度戻つてゝ親兄弟。人中へ顔が出されぬとゝ知りぬいて。火ゐ入骨と辞うるゝとも歸るまい。さ、必ず去られて戻るなと。念に念とつがふた今度の嫁入。よふ戻りやつた父樣お聞なされたら。お悦びなされうぞお顔見せる折が有ふ。必ず聲高に物しやんな。して半兵衛が暇の狀取て戻りやつたの。いや跡の月半兵衛殿。父御の十七年の弔いの爲生れ故郷遠州の濱松へ。戻り次第道具に添暇の狀ゝ跡うら先去ねと譯も言ゝず。お腹に四月唯もない身と。姑御が手と取て怨籠に引ずりのせ。むごいつらいと計りにて歎くと見ればいた〳〵敷。子のある物と夫の留主暇くれる姑心に一物有ゝいの。伯母婿ながら和女の親分。高麗橋二丁目川崎屋源兵衛殿指置て直に爰へ突付る仕方も憎しよい〳〵。此方の人が京うらの歸りと待て詰開うせ容易で暇ゝとらぬ。とゝ言へ世上の夫婦中去るといふ事誰こしらへ。憂目とさせる可愛やと歎けばわつと泣出す聲。高い〳〵障子の那方火樣の寢入ばな。泣な〳〵と言ひつゝもつとふ涙の血筋とてしんゝ泣寄憐さよ。平右殿御氣色今日ゝ如何とつゝと入る。おなぢ村の金藏お千代ゝちやつと姉の影。見付られじと身と隠せば。こ、隠れまい〳〵只今堤の茶屋で大坂へ戻り怨籠の咄で聞たお千代殿目出度い去られて戻らしやつたげなと。口も氣儘のとはうなし。お輕ゝはつと余所よりも親の聞く耳憚りて。金藏樣嗜ましやんせ。聲ゝなし聲低に言ふても濟こと千代ゝ去られゝ致しませぬ。親の病氣と見廻のもぎり奥にゝ父樣すや〳〵と寢てござる目と醒して下さんすな。ひくう〳〵おなじくば去んで貰ひたいと。氣の毒がるほど猶聲高。親仁寝ての面白いなんぼ隠しても惜な事聞てゐます。お千代殿幾度でも去られさつしやれ。彼是の婿達が踏擴げた田地でも百性の女房にゝ大事ない。おれが持て一夜さも淋しいめゝさせまい。去られて戻つた悲しいと氣とくさらし。必ず女房ぶり損ふて貰ふまい。去春貰ひのけた時おれが方へござればよいに。惚のゝつた一念他に足ゝ留らぬ筈。居まい〳〵戻ると云ふも此鼻に緣が深いのうらじや。親仁殿に云ひ込で今日のうらでも我ら請込む。姉御大事にのけて貰ひましよと喚けば。二人ゝ死入斗り冷す心の奥に手と打。のるよ〳〵。あい〳〵

〳〵。南無三親仁おきられた。金藏が見廻ふたと云ふて下され。又明日御見廻申そふと歸れば、のるゝ腹も立。是々去ずと千代とお貰ひなされぬの。いや〳〵云ふても大事の絲組。日と見て申し出そうとへらず口して立歸る。父樣お目が醒たのと姉が障子とあくる跡より。千代もおづ〳〵指覗けば。夜着にもたれて起臥もなやみ苦しき老の坂。誰のりすとゝなけれ共落くる肉に顏あれて。見のゝす親の顏と顏堪のねてなふ父樣。お藥わがつて今一度達者になつて下さんせと。思ゝず知らず聲立てさめ〳〵歎き伏しまろぶ。父も見る目に涙ぐみ大事ないつゝと來い。つゝと寄れと膝近く又去られて戻つたな。子に逆ふ親の心坐乍千里万里も行く。況てや一ッ家の内疑ても寢られず。最前より何事も皆聞しぞ。ろも我ながら斯も心の變る物ぞ。五十と云ふ年の内ゝ行歩心に任せずながら。心ゝ若のりし昔に變らず氣も強く義理にも引れ。おのれ重ねてさられたちゝ顏も見るまじ。物云ふまじとの我もありしが六十に足踏込では。年斗りよるでなく月もより日もよつて。病ひにゝのらまるゝ身のおとろふる程。彌增に按じらるゝゝ子の身の上。三度ゝおろの百度千度去られても。去らるゝに定まりし前世の約束と思ひあきらむれば。悔みもせぬ憎ふもない笑ふ人ゝも笑ひもせよ。譏らばそしれ指もさせ。子の不憫さにゝのへぬぞと老の繰言息よゝり。半兵衛めゝ遠州へうせて留主の内とな。其留主合點。万一うせたりとも物云ふな顏も見な。彼奴が身上百倍の所へ嫁入させる。苦に持て煩ふな喃姉下々ゝ野へいつつらん。茶わのいて千代めに中食させてたもれやと。餘念なき父の顏姉ゝ悦びコレお千代。案じた父樣の御機嫌日本一。お側はなれずに介抱申しや。嬉しや胸が開けたと障子と引立〳〵勝手へ出る。折こそあれ門に物もう頼みませう。何方とこたへ入と見れば千代が夫の半兵衛。扨こそ緣と切に來たと思ふ心に口ぞまくれ。去狀さまよふ御座つたと。云へどもなんの氣も附ず。旅出立の儘笠取て沓ぬぎに草鞋の紐。心も解ておのるさま何方も變る事あるまい。國元へ參る時分ゝ事急にて報知もいたさず。氣のつこのぬ親共留主の内にも嘸御無沙汰。拙者も無事に遠州より唯今罷り歸ります。フウそれゝな淡さぞくによふお歸りなさるゝと。顏と背けて鼻あしらひ。男ども女子ども誰ぞお茶でもあげぬのと。内にいぬ人呼立てむやくし顏の色合と。見て取ながら半兵衛立も立れず仔細ゝ知らず。互の心隔ての障子さつとあけ。姉さまお藥温めてと出るゝ女房。ヤアお千代爰に居るのと。聞捨て物とも云ゝず直と入り障子

とはたと引立たり。かゝる樣あれ女房。ぬつうら爰に何故物ゝ申さぬと騷げども。物云ゝぬ譯聞たくば此方の心にお問なされ。人の知つた事の樣に。〳〵可笑い事でゝあると空笑ひ取てもつうれず。ムウムウと計り差伏ひきとむねつくより詞なし。奥にゝ親のせぐるし聲。夜短うで日の永いゝ扨々退屈で暮し兼る。千代よ棚な本おろして何なり共讀で聞せ。うるゝ何所て日の永いゝ扨々退屈で暮し兼る。千代よ棚な本おろして何なり共讀で聞せ。うるゝ何所に來て聞ぬう。我伽せぬうせぬうと忙しく老の氣のいらだて。あい〳〵爰に仕事しながら障子隔てゝ聞ますと。流石半兵衛と捨ても立れず障子の傍に立よれば。ヤ親仁樣御病氣う容体見たしと云んとせしが不待遇なる氣とうねて。詞と留め折と待共に摺寄り聞ゐたる。千代ゝ數多の本取出し伊勢物語ぢんのうき。父樣の傍に有まい綱島の心中もござんする。つれ〳〵平家物語なふ父樣何の本が能らふぞ。姉が讀さいた平家物語祇王が段と聞ふ讀やれ。誠に紙と付た所がある。と押開き。母の刀自なく〳〵又教訓しけるゝ。天が下に住ん者兎も角も入道の仰せゝ背くまじき事で有ぞ。千年万年と契るとも頓て別るゝ中も有。あうちさまとゝ思へ共ながらへはつる事もあり。世に定めなき物ゝ男女の慣なり。はんにそうじやと讀さして。我身に當る憂涙留め兼てぞ泣ゐたる。父も不憫に目と瞬〳〵。昔も今も人の氣の移り易き世上の慣。コレ姉もきけ。平家物語と千代が身に引較べて云ふ時ゝ。清盛入道ゝ八百屋半兵衛。祇王ゝ千代が身の上よ。その清盛が心變つて追出す。憎や清盛。去年婿入せし折のうち不調法な娘と進上致した。氣に入らぬ事あらば打殴き縛り括ても直させ。末々までも見捨ず添て下されのし。此度共に三度の嫁入。在所ゝ一ッ所ぐろにて。又歸つてゝ平右衛門二度人中へ顔が出されぬ。娘ゝ氣に入らず共我と不便と。面倒見て必ず去て給ゝるな。ヤ、去まい〳〵御臨終の折のうらゝ前與ゝ平六殿。後與ゝ此半兵衛真實の子と持たと思召せ。今こそ町人八百屋の半兵衛。元ゝ遠州濱松にて山脇三左衛門が悴武士名利商賣名利。千代ゝ去ぬ氣道するな。ア、添ないと手と束ね。地頭代官の其外に一生下ぬ頭と下し互の契約。物忘れする老の身にも其時の嬉しさゝ骨身に染て忘れぬ物。若い形して忘れしゝ忘れぬ証據。其身ゝ實父の弔ひにゝこつけ遠州へ出のゝし。其跡で姑に追出させ養子の親に我がつみと塗付る不孝者。義理も法も知た奴ゝ彼が何の武士の果。鰹節の削り屑人でなしめに緣組であたら娘と捨たな。ろくに吟味も爲なんだうと死んだ母が

彼世申

彼世のち。恨み召れふ口惜いと愼み深き堅親仁。惡口交の口說泣二人の娘も正だい涙。兎うく男に縁のない生れじやうのと斗りにて。聲も惜まず泣居たる。扨は女房去られて愛へ戻つたのと。始めて驚く半兵衛胸に磐石据たる如く。呆れ返つて涙も出ず暫時詞もなのりしが、情ない女房。假令一言一宿のつき合にも人の心い知るゝ物況て足のけ〻年の馴染。子までなしたる夫の心知ても言譯してくれぬの。親仁樣の御立腹申し開くい知つたれ共。我罪を養親に塗付る不孝者との一言のらい。もめ〳〵存せぬ我ら去りい致さぬと申し分る程不孝の上塗。親仁樣につがひし詞違へぬ武士の性根と見せる。見て疑ひとはれ玉へとずばと引ぬく脇差より。おのるは早く絶り付く千代も驚きなふ悲しや。こな樣に恨みいないと障子引あけ走りより。留ても留ちぬ男の力父樣頼み上ますと。騷げど騷がぬ平右衛門。お身が居るとは知つての當事耳にとまつての自害の。ヲ、よい分別。自害して死んだらばあれ見よ八百屋伊右衛門夫婦。嫁と憎んで去りしゆへ子いつらうちに自害せしと。妻子に惡名難と付口々に取沙汰せば手がら〳〵。留るな娘どんぶんに自害めされ。見物せんとの一言に孝心深き肝とひしがれ。ヘアそうじや過つた眞平と額と擦付身と悔み。然らば御暇千代も同道いざお立やれ。ヱイやつはり私と女房に持つて下さんすのヲ、假令死んでも身体も戻さぬ。ぢん未來まで女夫〳〵。さ、忝い父樣姉さまも悅んで下さんせと。はや締直す抱帶ささとたぐつてにじりより。父いはら〳〵涙にむせび。半兵衛是見や此しどなさ。歸らんと云ふ嬉しさに親の病ひと何共云いず。悅ぶ顏と見る親の心の中の嬉しさと。叶はゞ見せて祖云たし。取締のない愚者伊右殿夫婦の氣にい入まい。頼むい其許の心一ッ親い老病明日知らず。黃泉の底のそこ迄も心にのゝるい千代一人。明日が日眼塞ぐとも姉夫婦にきつと云付。十廿の盃の取やりいつ何時でも事缺せぬ。隨分商賣手擴くして娘が事と頼み入る。契約の盃せん銚子〳〵。姉よ酒とさらせしの親子の中に遠慮いない。酒と思ふ心が酒燒鍋に水持てこいと。盃の出る間もこがるゝい子故の闇。引うけ〳〵ずつと乾し。半兵衛差ふ親子夫婦が水盃さいつさゝれつ汲ども盡ず飲ども醉ぬ水酒盛不憫と思ふ親の氣い余りて色に出にける。命があらば又逢はふ死なば親子の末期の水。未來い八功德地の水此世に思ひ置事ない。二人ながらおいにやれ〳〵。去らばと夜着に打もたれ二度詞もいざれぬ。親の心に身と耻て姉につゞ〳〵云ひのいし。思ひと躊て立出る暫時と父い起上り。姉なふ

重ねて戻らぬため。祝て内で門火たけ。忌しくいとゝ思へども親に從ふ焚火の煙。目出度ふ爰から焚ますと。庭にかるゝ下萌の。果ゝ夫婦が無常のけふり。灰に成ても歸るなと其一言と此世の名殘。留る名殘行く名殘長き名殘と

下之巻

夏も來て青物見世に水うわく。莚庇に除られし日影の千代が眞の家ゝ新うつぼ油うけ町八百屋伊右衛門。淨土宗の願人了海坊の談義に打込。開帳廻向の世話やき仲間。見世ゝ半兵衛に打任せ大坂中の寺狂ひ。女房ゝ内外の世話に五ッも年ふけて。朝うら晩迄氣ゝ苛だで。此半兵衛ゝ藏にべら〳〵何して居やる。見世の賣物がしなびるゞゝ松めきり〳〵と水打おろ。コリャさんよ。のりのい物がひあがろがな。とりへてたゝんで打盤出してちよき〳〵とうて。ヤ其ちよき〳〵で夕飯のおねばきざめ。コリャ松よ。今日ゝ五日宵庚申甲子が近い。二また大根のけておけゝさんよ茶釜の下が燃出ると。商賣が八百屋とて八百色程言付る。口せわ〳〵と忙しきゝ大晦日の生れうや。伯母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ。はしりの竹の子片荷にゝ猶活生姜青山椒白瓜二ッ。これゝ扨も早い事でごんすよの。おれが戻るゝも遲い事でごんすよの。コリャのちつぼ。今朝卯の刻うら内と出て。何時じやと思ふ盞下りぼし商賣のおうこくらゝせ魂に魔へさせんと取付ば。半兵衛走りいで母者人のがこりや尤ゴレ太兵衛。何處にのら〳〵やつて居た。おくび町の笹屋うら竹の子取に矢の使ひ。阿波座堀の丹波屋うら栗おこせと云ふてくる。朝倉屋うらゝ青山椒内にはきれる返事に困つた。太義ながら母者人の機嫌なとし。つい一走り廻つておじや。ヘテ私じやとて何の惡ひ所に遣入て居ましよ。横町の山城屋うら呼こまれ二ッ三ッ咄したばうり。其も外の事でござらぬ此方に誰やら逢たいとて。今朝うら爰に待て居るといふてくれとの傳言。私や花主と廻つてこう此方も一寸往しれと。注文物と取揃へ荷拵へして出てもく。半兵衛ゝ山城屋と聞よりお千代が來たであろ。氣とられまいと空とぼけ。ヘテ山城屋うらゝ何の用どりや一寸いてのふと。はしり出るとひずと執へ息子どのこりやどこへ。イヤやましろ屋うら逢たいと。ヲヽその山城屋合點なりませぬ。ろぬつけりとした顔ゝいの。こちと夫婦ゝ何にも知らぬと思ふてう。氣にいらいで去なした嫁。遠州戻りに在所へより能くゝへて戻つたな。常盤

町の從弟が所に預けておき。商賣に假托間がな隙のな女夫こつてり。おれが知らいでおこのいの嘸おれが事譏りやつゝろ。十五年世話にした親の嫌ふ女房に。隨分と孝行つくし親には不孝つくしや。愚知らずめと疊たゝいて喚き居る所へ。青布子の西念坊案内なしにずつと通り。熊野屋の權右樣のら先達てのお約束。宗味が石のねのこのいげん鹿相な非時致します。講中皆お揃ひ旦那寺もとふお出で。御夫婦ながら唯今と。云ひ捨歸るゞゝくさ坊主未來願ひいわぶな者。アレ親仁殿。熊野屋のら呼に來た早よ往のしやれおりや往ぬ。きりゝゝさしやれとつこうゞ聲。親伊右衛門い後生一へん。コレ女房何と囂しい。又たしても〳〵。半兵衛さへ見れば敵の樣にいふ人じや世間する若い者呼に來まい物でもない。少々の事い聞のがしにしやいの。コレ其結搆過たこのら親と阿呆にしふるわいの。現在おれが甥の太兵衛と差置き。あゝの他人の此のら殿に家邸遣る此母邪ゝい少もない。コレ女房。ろれい誰も知つた事今更調へる事のいの。そのよな腹のたつ時い念佛が藥じや。兎角如來の御方便修羅燃す和女と。呼に來るも彌陀如來參る此方連も彌陀如來機嫌直しやと宥めれば。イヤこち夫婦が出てゐて跡へお千代と呼入れ。留主の間ではたへさす事は成ませぬ此方一人參つて。

私は俄に目が舞たと成と間に合に遣つしやれ。コレ女房たつた今西念坊が見て去だいいの。此伊右衛門に虛つけゝ、勿体ない妄語戒。此中さるお寺で五戒の割口說聽聞した。三百戒五百戒も約る所い赤貝に留るとのお談義。半兵衛が叱るゝも貝のわざ。和女に已が意見するも貝のわざ。一蓮託生の閨のお同行とじやれて機嫌と取ければ。そんならア此方參らしやれ。此樣な嗔恚の燃る時に念佛申せば。咽にすく〳〵立やうな心鎭めて跡のら參ちふ。さゝのてゝくいへてあたゞんな念佛講。こんな時いめこのり聞して延したがよいいの。はんに〳〵此方の同行に氣轉の利たがひッとりもないと。恐いめ知らぬ我儘たら〳〵。ゝゝそんなら先へ行く跡のらおじや。佛法とのやの雨い出て聞と。外へ出れば又有難い事も聞。此度生玉大法寺の開帳に雞山と飾られたも。筑後の川中島の四段目のら出た事じやげな。こんな事も出にや聞れぬ。ゝ有難い南無阿彌陀佛とお珠數くり〳〵出にけり。半兵衛一言の答もせず涙にくれて居たりしが顏ふり上。申し母者人。今めこのしい申事ながら。武士の釜の水で育ちし此半兵衛。廿二の年のら面倒に預り。一人の甥御と差置家郎商賣とも。私へお讓りなさるゝ御厚恩。肝にこたへて空にも存せぬ。御恩の母の氣に入

ちぬ女房なれば。私が離別致してこそ孝行も立世間もたつ。所に此度國元の留主の間に。八百屋半兵衛が母が嫁と憎んで姑去りにしたと沙汰あつて。まん〳〵千代めが惡いになされませ。はうく〻最負の世の中お前の名はの出させぬ。母の惡名と立て若い者の人中へ顔が出されませうの。親仁樣にも面目失いする爰が一ッの御訴訟。少の間と思召し虫と殺し。美しう千代めとお入なされ其上にて私が。物の見事に去狀書て暇やります。ホヽろこが男のあうけん。貴人高位の娘でも夫が去るになんと申そ。時に〻千代めが姑への恨みもなく。お前と慈悲じやと云〻せたい。十六年此方たつた一度の御訴訟。老少不定の世の中蟹私が先だつても。如何なる跡のとひ弔ひ百万遍の御回向より。聞入れたとの御一言。智識長老のお十念と授る心と斗りにて。女房の親と我親と世間の義理と恩愛と。三すぢ四すぢの涙の糸たぐり出すがごとくなり。母はいやりと笑顔して〻、思ひ合た夫婦合。誠らしう思いれど虚に涙い出ぬ物。眞實去るがぢやうじやの。ヲヽお前とだます程なれば此御訴訟は申しませぬ。ヲヽ嬉しい〳〵已も鬼にはなりとむない。必ず去りやゝ間に合言て欺しやれば。コレ此母が咽笛と出刀庖丁でちよいとやぞや。母殺すの女房去の夫のらい其方の勝手次第。ヲヽさらりと穢土の苦が脱た。此世のらの生佛とい〻ふれが事。足輕ふ非時に參りましよ。こちや未來までのきざりせぬ閨の同行が。さころ待や焦れて南無阿彌陀佛〳〵。さんよ其姿でつい供せい。ヲヽ南無阿彌陀。松よ。又見世のつるし喰ふな。ヲヽなまみだ。南無阿彌陀佛に取ませてぶつ〳〵云ふてぞ出にける。お千代が重なる五ッ月の重さ身ながら。足元も手もおろ〳〵と帶の下。小褄引あげちよこ〳〵走り。ヲヽ久し振で家と見た半兵衛樣。今日といふ今日町内廣ふ戻たいいの。ヲヽ嬉しやと抱つけば。半兵衛ぎよつとし何として戻たの。たつた今母が出られた道で逢ひいせあんだの。さればいの。母樣の山城屋へよらしやんして。いつにない門口うらにこ〳〵と。いとしや〳〵れれが些の思ひ違ひで苦勞させた。今のらいなそのいのとも云ふまいと心誓文たてた。娘い持ず天にも地にもたつた一人の花嫁。末期の水取るゝも骨拾わるゝも和女。隨分孝行にしてたも和女もおれがいとしがる。今お念佛に參る其内に早ふ戻つて。後に逢ふ早う〳〵と頓と桶な物打わけた樣なお心。皆此方樣の云ひなしやへと。ほんに男の御恩い戴いて居てもあきいない。松よ久しいな。最早どこも蚊があるに。女房主人がなければ未だ蚊帳の鉤手もなし。ヲヽさんが居眠りでい

裕どもの洗濯もできまい。此戸棚のほてりいいの奥の疵もまだ塞ず。のうの物も見廻たし何のらせうやら氣がうろつく。居つけた所に居て見よととんと坐りし茶釜のまへ。湯と沸して水になる末知らぬこそ果敢なけれ。半兵衛兎角の挨拶せず。　コヤ　松よ。只ねずとも藏へゐて椎茸よれと人とのけ。お千代の顔とつく〳〵と見て涙ぐみ。エ、可哀や利發なやうでも女心。母の詞と眞實と思ふの。云やる事が皆虚じや。然りながら昨日もくれ〳〵いふ通り。佛法の端も聞入れ物の慈悲も知つた人。我甥とさしのけ他人の身共に。跡式讓る心のらい根のらいがまぬ是証據。人にい相縁奇縁血と分た親子でも中の惡いが有る物。乘合舟の見ず知らずにも。可愛らしいと思ふ人もわる。人界の習慣斯した物いとしばなげに根のらの惡人でもない母と。和女故に邪見者と言せは女夫の者が後生も惡い。母の機嫌よふ一たん呼び返し。改めて己が手のら去る筈じや。エ、イすりやどふでも去らるゝの。肝潰すことゐいの死るい二人が豫ての覺悟。養ひ親にさんもつのず在所の親の意恨もなく、流石じや。見事ゐ死んだと未練者の名と取まい爲。母に向ひなんぼの詞と盡したと思やるぞ。書置も認め死裝束脇差もあらめの荷へ卷込み。此世の心がゝりは微塵程もなけれども。金に語つて死ぬる心中と一口に言れふのと。是が一ッの氣がゝりとわつと泣ばわッと泣。こなさんの孝行の道さへ立ば私も心は殘らぬと。夫婦手と取組寄り伏し沈むこそ道理なれ。母は念佛の回向より嫁女夫の願意此功德氣がゝり。余所にゆるりと居る空も見世鎖比にによつと歸り。なふれ千代戻りやつたのさつきにも云ふ通り。些としたりやうげ違ひで物思はせたいとしやの。ほんの生如來が見たくばおれじやと思や。永うもない浮世に酷いつらいめ見て何にせう喃否やの。　コリヤ　半兵衛。はしりの出刄庖丁よふ磨して量たぞや。ちよいと觸つても劍じやぞ。　ア　南無阿彌陀佛〳〵と半兵衛に合圖の詞。嫁は知ぬと思ひこむ是ばつこのりい佛なり。女夫い母の機嫌顔見れば此世の本望と。思へどじやくい雨とふる。涙隱すぞ哀れなる。　コレ　半兵衛何も忘れたとないの。日の永い時は得て物忘れするものじやよふ思ひ出しや。ね千代泣ずと爰へおじやいの。未已が恐いの爰へ〳〵と猫撫ごえ。　ア、くお側へ參りますと。立寄んとする所と半兵衛取て突退。女房斗りい親の儘にもならぬ。身が氣に入らぬ去た〳〵出てうせい。　コリヤ　さんも丁稚も能聞け。半兵衛が女房去たぞ。向ひ隣町内でも母の浮名と立たらば聞事でない。うろ〳〵せずと出てうせいと眞顔に睨む目に

涙。コレ嫁御おりや去ぬぞや。親の儘にもならぬは女夫是非がない。おれと恨みと思やるなと云へども。河の返答も泣入〳〵しやくり泣。ゝ、其涙いまだ母に恨みが有さうな。有ならば言や聞ませう。ィヽエ〜お慈悲深い姑御に。何の〳〵と手りにてうつはと伏して泣居たり。ヲヽ、おのれが云ふまでない母者人に何の恨み。口手間入れる面倒なと小腕取て門口に。引出す此身も終に行く後に〳〵と囁きて。目ませに宿の名殘の涙。弱る心と見られじと門口ひつしやり見世ぐはつたり。鳴るは六ゥうのはや初夜の時もじぶんも六々に。胸はわけなき五々八々知死期近づく斗りなり。あのぬ夫婦の生別れ流石の母も挨拶なく。おうゑと立て奥の間の燈はろぼしの鐘の聲。善悪照す御燈の火と見るよりも居眠る下女。外に見る目も荒布の束申に隠せし一尺四寸。是が冥途の案内者魂こむる書置箱。地獄へ落るの極樂の末は白茶の死裝束。くる〳〵包む毛氈もはや紅の血と見れば。死損いはせまいぞと一心いすはれ共。暖簾一重彼方あはすゝぎき母の鐘の聲。胸にこたへて身も慄ひ踏所覺へぬ差足に。御外す手もわな〳〵密と出たる門口に。イヤアお千代の。おいの。サア鶴の口と脱れたサアおじやと手と引ば。マア待て下さんせ生中一度戻つて。此方様の口のら退ぞ去ぞと言れては末來迄の氣掛。此門口で唯一言去ぬと云て下さんせ。ふ愚痴な事斗り今宵は五日宵庚申。夫婦連で此家と去ると思へば能わいの。はんにそうじや手に手と取て此世と去る。輪廻と去る迷と去る。今日は最期の羊の歩足に任せて

道行思ひの短夜

名殘も夏の薄衣鶯の巣に育てられ子で子にならず杜鵑。我も二八の年月と養親に育てられ。子で子にならず振捨て死に行く身は人ならぬ。死出の田長の杜鵑同じたぐひの夫婦連。肩に掛たる毛氈は啼く音血とはく姿のや。覺悟極し足元も影はのぐらさ薄曇。卯月五日の宵庚申死ば一所と契りたる。其一言は庚申參りの人に打紛れ。忍び出るも商賣の八百屋万と一文字に。半兵衛と云ふ名にも似ず。唯ねぶのくも思ひつひわのな心の突話て詞の義理にはじのみや。智者は惑ず勇者は恐れぬ生れ付流石は武士の胤ぞこし。千代も今度が三度目の嫁菜盛りも古くれて。諸事と細なけしのちし人の云ふ事さくらげや。夫の親と手にさゝげ晝夜孝行つく〳〵し。仰せ背のぬ給仕へ。氣のとつさのな姑にせり〳〵弄り摯られて。命もなしやありのみの谷川ふりに身と投ふ。今日あまのりに成ふのと心はうちやうの

んてんの。いつわつさびとしもせねば斯なるはすでござんせう。何としやうがの身の果と云て返らぬ水ぶきの。姑去で殺したと惡名つけて世の人のわらびませうがふ笑止と。悔めば夫はずいきの涙。なふ和女さへ其如く悔んで給るに此半兵衛。年比日比の御厚恩送らで死ぬるは人のくず。罰とこのぶらん恐ろしとほうづき程な血の涙。はら〳〵溢せば走り寄り。私も病者な父様と先と送るがじゆんさいと。却つて憂目見せまする。是も何もへ相生の松だけもへと抱きつき。木末に知ぬ松の露落て松露になりやせん。彼一群に聲高く下向の業のぞめき歌。見付られじと影隱す。我が戀路はいとなき三味よなんのねもせで待明す。それじや〳〵見れば思ひの雲の帶〳〵。さすぞ孟ならづと一ッまいれ。否とおしやるに。こちやも。それじや〳〵そうさんせそれじや〳〵。しのもよいこの情盛にちよさりこつきり小ゐよぼの。腰もしなへてやつくるり。くるりや〳〵やつくるりと。ぬめらしやんすは二人がほのに名取川。ヲヽそれ二人と二人が名取川それじや〳〵。それ行過しと立出て。今の小歌の一節に二人と二人が名取川。ヲヽそれそれじやと謠ひしは己と和女が名取川。辻占が能い此方へと勇むは男の矢竹心。ヲヽ嬉しいと引連て共に急ぐは女氣の。情するぞに人絶て物しん〳〵たる寺町と。死に行く身も暫くは爰生玉の馬場先に法界無緣の勧進所。無明能化の門前に念佛と便り辿り寄る。なふお千代。しんすいばんきやうでんと聞く時は心は娑婆に從つて轉じ變る。和女も千代と云ふ名と楓樂良訓信女と改め。我も八百屋半兵衛と露秋禪定門と改め。息のある内より早無き人の數に入れば。死後の身体の置所も俗縁と離れ。寺の庭でと思へども門閉のねば力なし。爰は奈良の東大寺大佛殿の勧進所。先年了海和尚衆生濟度の說法と此所にて說始め。今遷化の後迄も我親は講中の第一にて由緒ある所なれば。最期と爰と思ひ寄る但望も有りやと問ば。なふ死る身に何の望み。水の中火の中でも先の世迄も此方様と夫婦になつて居る所と。見立て死で下さんせとさめ〳〵歎けば。ヲヽ過分な。此書置にも書く通り發子に成て十六年此方。十方旦那の機嫌と取り暇ある日には町中と振賣し。元は僅の八百屋店今では人に少々の金貸す樣に儲け溜ても。憂い目斗りに日と半日心と伸す事もなく。死なふとせしも以上五度。恨みある中にも和女に縁組切ての愛と睦せしに。それさへ添れぬ樣になり死ぬる身に迄成り下る。由ない者に連添て半兵衛が身の因果。和女迄にふるまひ在所の親仁姉御にも悪い事と聞すと思へば。此

んてんの。いつわつさびとしもせねば斯なるはすでござんせう。何としやうがの身の果と云て返らぬ水ぶきの。姑去で殺したと惡名つけて世の人のわらびませうがお笑止と。悔めば夫はずいきの涙。なふ和女さへ其如く悔んで給るに此半兵衛。年比日比の御厚恩送らで死ぬるは人のくす。罰とのぶらん恐ろしとほうづき程な血の涙。はら〳〵溢せば走り寄り。私も病者な父様と先と送るがヒゆんさいと。却つて憂目見せまする。是も何もへ相生の松だけもへと抱きつき。木末に知ぬ松の露落て松露になりやせん。彼一群に聲高く下向の衆のぞめき歌。見付られじと影隱す。我が戀路はいとなき三味よなんのねもせで待明す。それじや〳〵見れば思ひの雲の帶〳〵。さすぞ盃ならづと一ッまいれ。否とおしやるに。こちやも。それじや〳〵そうさんせそれじや〳〵。しのもよいこの情盛にちよきりこつきり小わよぼの。腰もしなへてやつくるり。くるりや〳〵やつくるりと。ぬめらしやんすは二人がほのに名取川。ヲヽそれ二人と二人が名取川それじや〳〵。それ行過しと立出て。今の小歌の一節に二人と二人が名取川。ヲヽそれそれじやと謠ひしは己と和女が名取川。辻占が能い此方へと勇むは男の矢竹心。ヲヽ嬉しいと引連て共に急ぐは女氣の。情するぞに入絶て物しん〳〵たる寺町と。死に行く身も暫くは爰生玉の馬場先に法界無縁の勧進所。無明能化の門前に念佛と便り辿り寄る。なふお千代。しんずいばんきやうでんと聞く時は心は境界に從つて轉じ變る。和女も千代と云ふ名と楓樂良訓信女と改め。我も八百屋半兵衛と露秋禪定門と改め。息のある内より早無き人の數に入れは。死後の身体の置所も俗縁と離れ。寺の庭でと思へども門開のねば力なし。爰は奈良の東大寺大佛殿の勧進所。先年了海和尚衆生濟度の説法と此所にて説始め。今憑化の後迄も我朋は講中の第一にて由緒ある所なれば。最期と爰と思ひ寄る但望も有りやと問ば。なふ死る身に何の望み。水の中火の中でも先の世迄も此方様と夫婦になつて居る所と。見立て死で下さんせとさめ〳〵歎けば。ヲヽ過分な。此書置にも書く通り婆子に成て十六年此方。十方旦那の機嫌と取り暇ある日には町中と振賣し。元は僅の八百屋店今では人に少々の金貸す樣に儲け溜て。要い目斗りに日と半日心と伸す事もなく。死なふとせしも以上五度。恨みある中にも和女に縁組切ての憂と晴せしに。それさへ添れぬ樣になり死ぬる身に迄成り下る。由ない者に連添て半兵衛が身の因果。和女迄にふるまひ在所の親仁姉御にも悲い事と聞すと思へば。此

胸に鰓とのけ肝と猛火でいる樣な。ヱヽ口惜いと拳と握り膝に押付身と慄し。涙はら〳〵朝露につれて流るゝ斗りなり。あれ又愚痴な事斗り。在所の父樣姉樣は此方樣より歸めよい。水盃の其上に門火迄焚れしは。生て再度戻るなと私に意見の暇乞。其愚痴な事いふ手間で早ふ殺して下さんせ。アレ〳〵三方四方に半鐘がなる鐘が鳴る。人の來ぬ間に來ぬ間にと急ぐ最期の玉のづら。夫にまとひ泣沈む。それよ〳〵由なき悔み。最早互に親の事兄弟の事言出すまい。必ず和女言出しやんな卒此方へと毛氈と土に打敷。なふれ千代。此毛氈と毛氈となる思われそ。二人が一所に法の花紅の蓮と觀ずれは一遂託生願みあり。親兄弟への書置も此狀箱に入れ置ば明日は早々屆くべし。サテ〳〵觀念最期の念佛怠りやるな。今が最期とずばと拔く一尺四寸親重代。我身と切れとて讓はせじ甲斐なき半兵衛が身の果やと。書思へば手も慄ひ不覺の涙堰あへず。心覺への西向に千代は合掌手と合せ。光明遍照十方世界念佛衆生接取不捨。南無阿彌陀佛彌陀佛の聲より早く引寄て脇差咽に押當る。なふ待てたべ待しやんせと身とすりのけは半兵衛。待てとは未練な。又物と見て俄に命惜なつたうの卑怯者めと喝付れば。いや〳〵未練も卑怯も出ぬ今の回向は我身の回向。可愛やれ腹に五

ヶ月の男の女の知ねども此子の回向して遣ない。嬉しや悲しや。疎だらば何樣して[illegible]ふせふと案じ置は皆空事。日の目も見せず殺すのと思へば可愛ざんすと。うつはと伏して泣入れば男も聲とすゝり上げ。已も何の忘ふぞ若言出したら和女の泣やらふ悲しさに。[illegible]つて居たと斗りにて一度にわつと聲とあげ前後正体泣叫ぶ。おのも翼と並べながら人の最期と急ぐなる八聲の鳥も告渡れば。サテ〳〵夜明に間がない。明日は未來で添ものと別は[illegible]しの此世の名殘。十念逼つて一念の聲諸共にぐつと刺す。咽のこさうも亂るゝ刀思ひ切て[illegible]も四苦八苦手足と蹴き身と蹴き。卯月六日の朝露の草には置で毛氈の上に無き名と留め[illegible]り。年は三九の群内縞血汐に染て紅の衣服に姿掻繕い。妻の泡帶と二ッに押切り諸[illegible]脱で我と我。鳩尾と臍の二所うんと締ていり〳〵。脇差逆手に取持て二首の辭世に[illegible]斗り。古へと捨ばや義理も思ふまじ朽ても消へぬ名こそ惜しけれ。はる〳〵と濱松風にもまれ來て涙に沈ひさゝんざの聲。三國一しや我は佛に成りすます。しやんと左手の腹に突立て右手へくはらりと引廻し。返す刀に笛掻切り此世の縁切る息引切る。晨鐘過の勤進所目すり〳〵門番が見付て。心中ヤレ心中死んだ〳〵と呼はる聲。吹傳へたる濱松風枝とならら